

東京外国語大学記述言語学論集

思言

第6号

論文

- 日中オノマトペの述語用法の諸特徴に関する対照研究—辞書の用例を用いた予備調査—
黄 慧 (3)
- 引用節内のモダリティ形式と主節述部・被修飾名詞との関連性—意味分類を基に—
佐藤 雄亮 (25)

卒業論文 要旨

- 宮城方言の条件表現—青森・秋田方言との対照を中心に—内海 優 (55)
- 現代口語ビルマ語において行為・事柄を表す複合名詞主要部の機能大西 秀幸 (63)
- マンガにおける臨時的な英語オノマトペの音韻的特徴小檜山 紫織 (71)
- 現代口語ビルマ語の助詞-kou_とゼロ助詞-φについて—人物目的語の-φ標示を中心に—
五島 俊太郎 (79)
- 中国語における「点儿 (dianr)」とそれが共起する語との相関関係栄山 如 (87)
- 愛知県尾張方言における終助詞の記述的研究—「ンダッテ」を中心に—
高見 あずさ (95)
- 移動動詞「行く」の直前に現れる「に」と「へ」の使い分けについて—1940年代、1950年代
 の文学作品から—多胡 友梨恵 (103)
- 韓国語の複数標識 -tul について蔡 熙鏡 (111)
- 熊本方言における強調語使用の世代差・男女差について豊田 瑤子 (119)
- ウズベク語の補助動詞構造《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b)+ket-, qol-, qoy-》について
日高 晋介 (127)
- 秋田方言における「(ニ) ガッテ」の用法と若年層における新方言堀川 知之 (135)
- 高知方言のアスペクト—存在動詞を中心に—本山 綾乃 (143)

2010年

東京外国語大学

総合国際学研究科・外国語学部

記述言語学研究室

序文

『思言』の第6号をお届けする。今年度は修士論文の完成に至った学生がいなかったため、修士論文の要旨のない号となった。卒業論文に関しては、力作もあり、修士に進学した学生も多かったのもので、その点については喜んでる。

今回も印刷・刊行に関して東京外国語大学大学院の競争的経費を申請し、その援助を賜うることができた。記してお礼申し上げる。今年度の援助に関しては経費の逼迫状況から厳しい旨を伺っていたが、大学院の予算に計上していただくことができた。これに深く感謝し、より質の高い論集を目指して今後も努力を重ねてゆきたいと考えている。

他方、外部から広く投稿を受け付けることや、その査読体制の確立などは今年度も課題として残されたままである。当研究室での研究会に関しては、学内レベルでの公開は行っているが、これもまだ広く一般から人に聞きに来ていただけるようなレベルには至っていない。外部との交流を深めるとともに、さまざまな刺激を受けてやっていくようにすること、より広い世界に発信し、通用するような研究体制を構築する必要がある。

今号の編集にあたっては、小山内優子さん、内海優君が中心になって尽力してくださった。ゼミの院生・学部生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。英文題目のチェックをしてくださった下地理則氏にもお礼申し上げたい。

上記のように拙いままお届けする本号であるが、読んでくださった方々からは、今後も広く御批判御叱正を賜りたい。前号でもいくつか御意見を賜うることができた。これをうけて改善に努めるとともに、御意見を下さった方にはこの場を借りて深くお礼申し述べたい。

2010年10月1日

風間 伸次郎

思言 第6号 目次 :

論文

日中オノマトペの述語用法の諸特徴に関する対照研究—辞書の用例を用いた予備調査—
A contrastive study on the predicative use of the onomatopoeia in Japanese and Chinese: a pilot survey based on dictionary entries
..... 黄 慧 (3)

引用節内のモダリティ形式と主節述部・被修飾名詞との関連性—意味分類を基に—
The correlation between modals in the quotative clause and the predicate or modified noun in the main clause in Japanese
..... 佐藤 雄亮 (25)

卒業論文 要旨

宮城方言の条件表現—青森・秋田方言との対照を中心に—
A comparative study on conditional constructions in the Miyagi, Akita, and Aomori dialects of Japanese
..... 内海 優 (55)

現代口語ビルマ語において行為・事柄を表す複合名詞主要部の機能
The function of the head of Colloquial Burmese compound nouns that denote an action or an event
..... 大西 秀幸 (63)

マンガにおける臨時的な英語オノマトペの音韻的特徴
The phonetic characteristics of temporary onomatopoeia in comics: with a special focus on English
..... 小檜山 紫織 (71)

現代口語ビルマ語の助詞-kou_とゼロ助詞-φについて—人物目的語の-φ標示を中心に—
The particles -kou and -φ in Modern Colloquial Burmese: with a special focus on -φ attached to human object
..... 五島 俊太朗 (79)

中国語における「点儿 (dianr)」とそれが共起する語との相関関係
The form -dianr in Chinese and words that cooccur with it
..... 栄山 如 (87)

愛知県尾張方言における終助詞の記述的研究—「ンダッテ」を中心に—

A descriptive study on sentence-final particles in the Owari dialect of Japanese: with a special focus on *Ndatte*

.....高見 あずさ (95)

移動動詞「行く」の直前に現れる「に」と「へ」の使い分けについて—1940年代、1950年代の文学作品から—

The Japanese particles *ni* and *e* that occur immediately before the motion verb *iku*: a survey based on the literary works in the 1940's and 1950's

.....多胡 友梨恵 (103)

韓国語の複数標識 *-tul* について

A study on the plural marker *-tul* in Korean

.....蔡 熙鏡 (111)

熊本方言における強調語使用の世代差・男女差について

The gender and generational differences in the use of emphatic expressions in Kumamoto City, Japan

.....豊田 瑤子 (119)

ウズベク語の補助動詞構造《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b) + ket-, qɔl-, qoy-》について

The Uzbek auxiliary verb constructions 《perfective converb (verb stem -(i)b) + ket-, qɔl-, qoy-》

.....日高 晋介 (127)

秋田方言における「(ニ) ガッテ」の用法と若年層における新方言

The use of *nigatte* in the Akita dialect of Japanese and New Dialect among young people

.....堀川 知之 (135)

高知方言のAspect—存在動詞を中心に—

The aspect of the Kochi dialect of Japanese: with a special focus on the verbs *aru* and *oru*

.....本山 綾乃 (143)

論 文

Articles

日中オノマトペの述語用法の諸特徴に関する対照研究
—辞書の用例を用いた予備調査—

黄慧 (HUANG HUI)

(東京外国語大学大学院博士後期課程地域文化研究科)

キーワード：オノマトペ 述語用法 日本語 中国語 対照研究

1. はじめに

日本語および中国語のオノマトペ¹はともに述語として用いることがある。本稿では、両言語のオノマトペ辞書を資料とし、日本語および中国語におけるオノマトペの述語用法を辞書から抽出し確認すること、日本語および中国語におけるオノマトペの述語用法には、どのような相違点があるのかを明らかにすることを目的とする。なお、本研究はコーパスを用いた本調査に向けての予備調査であることを断わっておかなければならない。本研究は、その予備調査として辞書という媒体を資料とし、用例を収集し、考察を行ったものである。

本研究での例文番号および一部の中国語訳²は、特に注釈がない限り、筆者によるものである。中国語の用例を提示する際には中国語の発音記号としてピンインをつける。

2. 先行研究

ここでは、まず日本語および中国語のオノマトペの述語用法の音韻・形態的特徴、統語的特徴に関する先行研究を概観する。2.1.では日本語のオノマトペの述語用法に関する先行研究を、2.2.では中国語のオノマトペの述語用法に関する先行研究についてみていく。

¹ 田守・スコウラップ (1999: 10) によると、オノマトペとは、現実の音を真似ている語、あるいは少なくともそのように見なされる語を指すものであるというのが最も一般的であるが、声を含む音を表す語に対してだけでなく、動作の様態 (くねくね) や肉体的 (ぼっちゃり) あるいは精神的 (もさっ) など状態を描写する語に対しても用いられることがあるという。そのため、音だけでなくこのような広義な定義としてオノマトペという用語を用いるとしている。さらに音や声を表すものを擬音オノマトペと称し、様態等を表すものを擬態オノマトペと称している。どこまでをオノマトペとして見なすべきかということについては判断が揺れる部分であるが、本稿では資料として用いた2冊の擬音語・擬態語辞典 (3節に後述) に載っているもの全てを研究対象とする。

中国語では、「拟声词 nǐshēngcí (擬声詞)」と呼ばれているが、中国語の「拟声词 nǐshēngcí (擬声詞)」には、日本語の擬態語オノマトペのようなものは非常に少ない。日本語と中国語のオノマトペは一对一の対応関係を成していないが、両者の差を考察することを含めて本稿では便宜上用語を統一し、「オノマトペ」と称する。

² ここで言う中国語訳には、中国語で書かれた参考文献および辞書に載っている用例も含まれる。野口 (1995) には、中国語のオノマトペが述語用法として用いられていても、副詞的用法としての日本語訳文になっているものがある。本稿はオノマトペの述語用法に焦点を当てているため、こういった場合の用例は筆者が述語用法のニュアンスが出るように翻訳した。

2.1. 日本語のオノマトペの述語用法

田守・スコウラップ (1999) によると、日本語のオノマトペは動詞的用法として用いられるものと、形容動詞的用法（「オノマトペ+だ」形式）で用いられるものがある。動詞的に用いられる際には「オノマトペ+する」³という形、もしくは「-めく」「-つく」などを伴って派生動詞的に用いられるものがある。本稿では、「-めく/-つく」のような接尾辞形は、用例数が非常に少ないということから考察に加えないことにする。その結果、本稿で扱うオノマトペの述語用法には、「オノマトペ+する」形と「オノマトペ+だ」形の両形式が含まれる。

ここでは、まず 2.1.1. で日本語のオノマトペにおける述語用法の音韻・形態的特徴について概観し、2.1.2 では日本語のオノマトペにおける述語用法の統語的特徴について見ていく。

2.1.1. 音韻・形態的特徴

日本語のオノマトペの音韻・形態的特徴について述べた先行研究には、田守・スコウラップ (1999)、伊東 (2006) などがある。日本語のオノマトペは、音韻・形態的特徴によって「オノマトペ+する」ができるものとそうでないものがある。田守・スコウラップ (1999) および伊東 (2006) をまとめると、「オノマトペ+する」ができるオノマトペには以下のようなものがある。

- (1) CVNVCVri 型：
のんびり、にんまり
- (2) CVQCVri 型：
ぐったり、さっぱり
- (3) 2モーラ反復形：
いらいら、がたがた
- (4) 2モーラ反復形の変種：
かさこそ、でこぼこ

伊東 (2006) が(1)-(4)のみを研究対象にしていることから、日本語において「オノマトペ+する」ができるものは、4モーラ⁴のものが一般的であると言える。4モーラのオノマ

³ 「オノマトペ+する」については、「と」を必須とする「オノマトペ+と」という形と「と」を介せずに直接オノマトペに後続する「オノマトペ+する」の形がある。本稿では、加藤・坂口 (1996) および宮地 (1978) を参照し、オノマトペが「と」を介せずに、直接「する」と結びつくもののみを動詞的用法として見なすことにする。

⁴ 本稿では、田守・スコウラップ (1999) に倣い、音韻・形態的特徴を論じる際には「音節」ではなく、「モーラ (拍)」を用いる。「モーラ」の定義およびその音節数との区別は国際交流基金編 (1989) および齋藤純男 (1997) を参照し、促音、撥音、長音を1モーラ (拍) として数える。例えば「さっか」の場合、音節数であれば「さっか」の2音節になるが、モーラ数であれば「さっか」の3モーラになる。

中国語においては、1文字が1つの音節を表すため、これを日本語のモーラ数に相当するものと考え、統一して「モーラ」という用語を用いる。

トペ以外にものについて音韻・形態的に「オノマトペ+する」ができるかどうかについて言及している研究は非常に少ない。田守・スコウラップ (1999)、伊東 (2006) には、「オノマトペ+する」ができないオノマトペについてはっきりした記述がない⁵。ただし、その記述を筆者がまとめると「オノマトペ+する」ができないオノマトペには以下のようなものがある。(ここでは「オノマトペ+とする」の形でしか用いられないものも「する」が後続できないものとして扱う。)

- (5) くるり、けろり
「ーり」で終わる3モーラ以下のオノマトペ
- (6) がたん、ごろん
「ーん」で終わる3モーラ以下のオノマトペ
- (7) ほっ、びかっ、くるっ、ぱっぱっ
「ーっ」で終わるオノマトペ

以上から分かるように、「オノマトペ+する」ができるオノマトペは、4モーラのものがほとんどであり、4モーラ以下のオノマトペは「オノマトペ+する」という形を取る際に制限があるようである。さらに、語末の音の現れ方も「オノマトペ+する」の現われに影響を与えるようである。

2.1.2. 統語的特徴

ここでは、「オノマトペ+する」および「オノマトペ+だ」に関する先行研究を確認する。

中北 (1991)⁶や影山 (2005)⁷は、「オノマトペ+する」はひとまとまりとして動詞的に用いられると主張している。「オノマトペ+する」について網羅的に扱った研究に西尾 (1981) がある。西尾は「オノマトペ+する」を「アスペクト・テンス」、「意志動詞・無意志動詞」、「自動詞、他動詞、使役、受け身」、「格支配」の観点から概観している。「オノマトペ+だ」については中北 (1991) および大塚 (2009) による研究がある。

大塚 (2009) は、「オノマトペ+する/だ/やる」の3形式について考察を行ったもので

⁵ 田守・スコウラップ (1999) では、「オノマトペ+する」ができないオノマトペの形態的特徴については直接言及していない。さらに、伊東 (2006) では4モーラのオノマトペのみを研究対象にしているため、4モーラのオノマトペについては言及しているものの、それ以外のものについては言及されていない。

⁶ 中北 (1991) は、擬態語は、動詞になり得る語彙的意味を持っていても、単独では動詞として機能することができず、形式動詞「する」と結合して、動詞相当の語となることによって、動詞として機能するための文法的な資格を得ると述べている。さらに、「擬態語+する」がどのような動詞として機能するかの決定は、「する」に固定的に備わっている性質によるものではなく、補足成分である擬態語の語彙的意味と構文によって決定されると述べている。

⁷ 影山 (2005) は、「擬態語+する」を「擬態語動詞 (mimetic verb)」と呼んでいる。「擬態語+スル」は、形態的には複合語になっていないものの、意味・機能としては「擬態語+する」全体が1つの述語 (合成述語 composite predicate) と見なされると述べている。「擬態語+する」全体の意味構造は、「する」が持つ語彙概念構造の鋳型に、擬態語が表す特定の意味内容を組み込むことで得られるとし、「擬態語+する」全体の意味構造は通常の動詞の意味概念構造と実質的に同じであると結論付けている。

ある。「オノマトペ+する」をアスペクトの観点から動詞分類を行った結果、すべてが金田一 (1950) の動詞分類⁸に当てはまるものであったと結論付けている。

影山 (2005, 2006) は、日本語のオノマトペの他動性が非常に低いことに触れ、ヲ格を取るものは「使役変化他動詞 (足をぶらぶらさせる)」および「働きかけ他動詞 (背中をとんとんする)」の2種に加え、主語が意図的にヲ格経路を不特定方向に移動する「場所移動動詞 (駅前をうろうろする)」があると述べている。

中北 (1991) は、「オノマトペ+する」と「オノマトペ+だ」ができるものについて考察を行っている。中北の考察は、1)「オノマトペ+する」と「オノマトペ+だ」ともに言えるもの、2)「オノマトペ+する」が言えて「オノマトペ+だ」が言えないもの、3)「オノマトペ+する」はできないが、「オノマトペ+だ」はできるものについてそれぞれ言及している。中北によると「ぐらぐらしている／ぐらぐらだ」には、ほとんど違いを感じられないのに対して、「頭がつるつるする／頭がつるつるだ」における「つるつるする」は、発話する話者自身が実際に身を持って体験したときにしか言えない。さらに、コトが実現した結果どうなったかを表す「めろめろだ／めちやめちやだ」は「オノマトペ+する」ができないと述べている。

以上、日本語におけるオノマトペの述語用法について見たが、次は中国語のオノマトペの述語用法について見ていく。

2.2. 中国語のオノマトペの述語用法

中国語のオノマトペの述語用法に関する代表的な先行研究には、耿 (1986)、野口 (1995)、李 (2007) があげられる。

ここでは、まず 2.2.1.で中国語のオノマトペにおける音韻・形態的特徴について概観し、次に 2.2.2 で中国語のオノマトペにおける述語用法の統語的特徴について見ていくことにする。

2.2.1. 音韻・形態的特徴

耿 (1986) によると、中国語では1モーラのオノマトペは、(8)のように現代詩歌では時に語気助詞が伴わなくても述語として用いることができる場合があるが、こういった用法は古代中国語においては頻繁に用いられていたものの、金・元時代以降は口語や文語の中で定着されていないという。野口 (1995) は、(9)のように2モーラのオノマトペも述語として用いられることがあり、動詞として用いられる場合は変調を伴うということがあると記述している。さらに、(10)のような重ね形⁹のオノマトペには後ろに「的」をつけて述語になるものがあると述べている。

⁸ 大塚 (2009) は、金田一 (1950) の4分類「状態動詞／継続動詞／瞬間動詞／第四種の動詞」に従い分類を行った。

⁹ 重ね形には、1モーラの重ね形と複数モーラの重ね形を含む。

- (8) wāshēng guā, chánshēng jī, shǎngwǔ sòng wǒ dào mèng lǐ
蛙声“呱”、蝉声“叽”、晌午送我到梦里。(儿歌)
(蛙声が「ケロ」、セミ声が「ミーン」と、昼間私を夢の国に連れて行ってくれる)
[耿 1986 より抜粋]
- (9) zuǐ lǐ hái shì gū lū zhe
嘴里还是咕噜着
(口ではまだブツブツ言っている)
[野口 1995 より抜粋]
- (10) dà huǒ jī jī zhā zhā de, xiàng yì qún xiǎo niǎo zài jiào
大伙叽叽喳喳的、象一群小鸟在叫
(みんなはペチャクチャして/しゃべって、子鳥の群れがさえずっているみたいだ)
[野口 1995 より抜粋]

以上から分かるように、現代中国語においては 4 モーラおよび 2 モーラのオノマトペが述語になりやすいのに対し、1 モーラのオノマトペは述語になりにくい。

2.2.2. 統語的特徴

ここでは、中国語のオノマトペにおける述語用法の統語的特徴について見ていくことにする。

耿 (1986) には、「古代漢語と違って、現代漢語においてオノマトペを述語として用いるものは稀である」という記述がある。中国語のオノマトペはほとんどが動詞を修飾する副詞的修飾成分および名詞を修飾する連体修飾成分として用いられる。中国語のオノマトペが述語として用いられる際の諸特徴に関する詳細な記述は、管見の限り見当たらない。

耿 (1986) によると、中国語のオノマトペは、(11) のように後ろに付加成分なしで直接述語を作ることができるが、これらの用法は現代漢語においては口語的で、ある種の修辭的色彩を帯びるものであり、文語ではあまり見られないという。しかし、詩歌の場合は (12) のように、リズム感を保ち、韻を踏むためなら付加成分なしでも用いられることがあると述べている。

- (11) jiù shì tài tài zài xiǎo shū zǐ gēn qián jī jī guā guā tā yě méi zé bèi tā
就是太太在小叔子跟前咕咕刮刮—他也没责备她
(张天翼《清明时节》)
(奥さんだけが義弟の前でガミガミしている—彼は決して彼女を責めなかった)
[耿 1986 より抜粋]

- (12) diànguāngshǎn léishēnggǔn fēngsōusōu yǔzhènzhen
电 光 闪、雷 声 滚、风 嗖 嗖、雨 阵 阵。

(祁荣祥《风雨巡》)

(雷が光り、雷鳴がゴロゴロっと！風がビュービュー、雨が時折)

[耿 1986 より抜粋]

李 (2007) によると、中国語のオノマトペは動態助詞「了 le、着 zhe、过 guò」¹⁰を伴うことで述語として用いられるもの (用例(13) のようなもの)、あるいは方向補語、結果補語、数量補語を伴って用いられるもの (用例(14) のようなもの) があり、「不 bù」を用いて否定することができる。さらに、野口 (1995) によると(15) のように助詞「的 de」を伴ったものが現代の中国語においては一般的な用法である。

- (13) tāshēngqìle gūdūzhezui bāntiānbúshuōhuà
他 生 气 了, 咕 嘟 着 嘴 半 天 不 说 话

(《现代汉语》)

(彼は怒って、モグモグしながらしばらく話さなかった)

[李 2007 より抜粋]

- (14) qiánlǜ kāishǐ zài wǒmen tóu dǐng shàng wēngwēngqǐ lái
前 略 开 始 在 我 们 头 顶 上 嗡 嗡 起 来。

(贾平凹《朱子荷含羞草》)

(前略 私たちの頭の上でウオンウオンしはじめた)

[李 2007 より抜粋]

- (15) tābúshì chángxū duǎntànde jiùshì gūgū zōu zōu de
他 不 是 长 吁 短 叹 的, 就 是 咕 咕 啾 啾 的

(《红楼梦》)

(彼はため息をするか、ガミガミいうかのどっちかだ)

[李 2007 より抜粋]

李 (2007) は、中国語のオノマトペが動詞として用いられる際に「不及物動詞¹¹」がほとんどであり、「及物動詞」はあまりないということについて触れ、(16) のように目的語を取るものは非常に稀であると述べている。このことについては耿 (1986) でも言及があり、現代の中国語においては(17) のように述語として用いられ、時には目的語を取ることもでき

¹⁰ 最も簡単な解釈をすると、「了」は完了、過去を表すものであり、「(シ) タ」に相当するもので、「着」は現在進行や結果状態を表す「(シ) テイル」。「过」は過去の経験を表す「(シ) タコトガアル」に相当するものである。

¹¹ 中国語の“不及物動詞”、“及物動詞”は、大まかに言うと日本語の「自動詞」「他動詞」に相当するものであるが、若干ずれがあるため、本稿では中国語の用語をそのまま用いることにする。

ると述べている。

- (16) 前略 “rúguǒ wǒ yǒu yī bǎ chōng fēng qiāng, wǒ jiù tū tū le nǐ.”

(前略 私に銃があれば、あなたを「タタ」してしまう←[銃で撃つという意味])

[李 2007 より抜粋]

- (17) nǐ men yī tiān dào wǎn xǐ xǐ shén me?

你们一天到晚嘻嘻什么?

(《杨朔散文》)

(あなたたち1日中、何をヒヒしてるの?)

[耿 1986 より抜粋]

以上、中国語におけるオノマトペの述語用法に関する先行研究を見てきた。中国語におけるオノマトペの述語用法は数量的に非常に少ないこともあり、これまであまり注目されてはいなかった。ここで紹介した先行研究も概説で触れられている程度のものであり、詳細を記述した研究はほとんどない。

2.3. 先行研究のまとめ

2.1.および 2.2.で日本語と中国語におけるオノマトペの述語用法に関する先行研究を見てきた。日本語および中国語のオノマトペの述語用法はどちらも音韻・形態的特徴と関係していることが見て取れる。さらに、統語的特徴において、その他の動詞と同様の文法的機能を持っていること、そして目的語を取れるオノマトペが少ないことが分かる。

しかし、音韻・形態的特徴および統語的特徴において収集した用例を数量的に調査・分析したものは非常に少ないように思われる。さらに、各記述ともにそれぞれの特徴についての考察であるため、オノマトペの述語用法について網羅的に考察されていないことが伺える。

3. 研究対象・研究方法

まず、日中両言語におけるオノマトペの述語用法の用例を手作業で辞書から抽出する。本研究で用いた日本語および中国語のオノマトペの辞書は以下のとおりである。それぞれの言語において非母語話者が編著者であること、そして2冊の辞書とも用例にはすべて翻訳がついていることから研究の便宜上、この2冊を調査資料として選んだ。

表 1: 研究資料¹²

	資料詳細	オノマトペ数	用例数
日本語	野口宗親 (1995)『中国語擬音語辞典』東方書店、東京	431 語	1216 例
中国語	曹金波 (2008)『標準日本語擬声語・擬態語』大連理工大学出版社、大連	783 語	2599 例

日本語に関しては、辞書から、「オノマトペ+する」「オノマトペ+だ」「オノマトペ+やる」の用例をすべて抽出することにする。

中国語のオノマトペの述語用法は、オノマトペのまま、あるいは動態助詞 (着 zhe、了 le、过 guo) や補語 (方向補語、数量補語、結果補語)、目的語を伴って述語になるものをすべて抽出する。

辞書から収集した両言語のオノマトペの述語用法の用例を用いて、以下の 2 点について調査する。

- 1) 日本語・中国語におけるオノマトペの述語用法には、どのようなものがあるのか
- 2) 日本語・中国語におけるオノマトペの述語用法には、どのような相違点があるのか

4. 考察

4.1. オノマトペの述語用法における音韻・形態的特徴

4.1.1. 日本語のオノマトペにおける述語用法の音韻・形態的特徴

音韻・形態的特徴から「オノマトペ+する」ができるものとできないものがあることについては既に 2.1 で見た。ここでは辞書から収集した用例を用いてモーラ数を確認し、モーラ数と述語用法の関係を見る。詳細を表 2 に示す。

表 2: 「オノマトペ+する」とモーラ数

モーラ数	用例数
4 モーラ	162
3 モーラ	2
6 モーラ	1
8 モーラ	1
1、2、5、7 モーラ	0
合計	166

¹² 以降、毎回辞書の名前全体を出さず、「辞書」という用語を用いるが、中国語について言及しているときは野口宗親 (1995) 『中国語擬音語辞典』であり、日本語について言及しているときには曹金波 (2008) 『標準日本語擬声語・擬態語』であることを断っておく。

辞書の用例において「オノマトペ+する」の形で用いられるものは 4 モーラがほとんどで、162 例、約 97%を占める。3 モーラのオノマトペは 2 例、6 モーラと 8 モーラのオノマトペが各 1 例ずつ確認できた。それ以外の 1、2、5、7 モーラの用例は確認できなかった。以下に用例を示す。

- (18) 日曜日には家でゴロゴロしている。(4 モーラ)
(曹 2008)
- (19) おこって口もきけないほど、かっかしてるんです。(3 モーラ)
(曹 2008)
- (20) 日当たりのいい席だと、つい午後の授業はうつらうつらしてしまうんです。(6 モーラ)
(曹 2008)
- (21) 面倒な仕事を抱え込んだが、まあ、えっちらおっちらやっていますよ。(8 モーラ)
(曹 2008)

伊東 (2006) では、4 モーラのオノマトペのみについて考察を行っていたが、辞書の用例から確認できたように、4 モーラのもの以外にも「オノマトペ+する」の形で用いることができるものがある。しかし、4 モーラは「オノマトペ+する」の形で用いられやすく、1 モーラや 2 モーラのオノマトペは、もともと数量的に非常に少ないうえ、さらに特殊拍を伴わないと用いられにくいものであるため、「と」を介さずに直接「する」と結びつくことは非常に少ないということが分かった。「チャンする」「ジャバする」「チンする」「ポイする」など、2 モーラのオノマトペに「する」が後続した形で用いられる用例が日常生活ではいくつかあるが、そのようなものは非常に稀であるということである。

次は、「オノマトペ+だ」とモーラ数の関係について確認することにする。表 3 に「オノマトペ+だ」の詳細を示す。

表 3: 「オノマトペ+だ」とモーラ数

モーラ数	用例数
4 モーラ	22
2 モーラ	1
6 モーラ	1
1、3、5、6、7、8 モーラ	0
合計	24

辞書の用例において、日本語の「オノマトペ+だ」でも 4 モーラで用いられる用例が最も多く、22 例で約 92%を占める。2 モーラ、6 モーラのオノマトペは各 1 例ずつ確認できたが、1、3、5、6、7、8 モーラのオノマトペは確認できなかった。以下用例を示す。

- (22) 満員電車で六時間も立ち詰め、もうくたくただ。(4 モーラ)
(曹 2008)
- (23) 売れ行きが不振でせっかくの投資もぱーだ。(2 モーラ)
(曹 2008)
- (24) この服は私にとってはつんつるてんだ。(6 モーラ)
(曹 2008)

以上、日本語のオノマトペにおける音韻・形態的特徴について見てきた。次は中国語のオノマトペにおける述語用法の音韻・形態的特徴を見ていくことにする。

4.1.2. 中国語のオノマトペにおける述語用法の音韻・形態的特徴

日本語のオノマトペの述語用法はモーラ数と密接に関係していることは4.1.1の考察で明らかになった。ここでは、中国語のオノマトペが述語用法として用いられたものについて詳しく見ていく。用例の詳細を表4に示す。

表 4: 中国語のオノマトペの述語用法とモーラ数

モーラ数	用例数
2 モーラ	44
4 モーラ	21
3 モーラ	1
6 モーラ	1
1、5 モーラ	0
合計	67

辞書の用例において、オノマトペの述語用法は2モーラが最も多く、44例で約66%を占めていることが分かる。それに次いで4モーラが21例で31%を占めている。4.1.1.で日本語のオノマトペは2モーラが述語用法として用いられることはほとんどなく、4モーラのほうが述語用法として用いられやすいということについて考察を行った。しかし、それに対し、中国語のほうは4モーラよりも、2モーラのほうが述語として用いられやすいと考えられる。今回扱った擬音語・擬態語事典に収録されている母体の数による違いはあるものの、平均的に見ると、このような傾向があると言える。中国語のオノマトペは、2モーラのもは動詞的に用いられる際に変調を伴うといったその他のモーラ数のものでは起きない現象を伴うことから特殊であることが分かる。

しかし、2モーラのオノマトペが助詞や補語などを伴わないまま単独で用いられる場合は、ほとんど(25)のように、詩歌的用法として韻を踏むためのものである。

(25) bǐshēngcháchá biǎoshēngdīdī
笔声 查查、表声 滴滴

(ペンの音がサラサラ、時計の音がチクタク)

(野口 1995)

4モーラオノマトペは、ほとんど単独で述語用法として用いられている。4モーラのオノマトペは音韻的にある程度の長さを持つことで安定性を保持している。そのため、統語的に1~3モーラのオノマトペより制約が緩く、オノマトペが単独で現れたり、補語成分や目的語、補助成分を伴って現れたりするなど比較的自由である。それゆえに、述語成分として用いられる際にも、(26)のように、付加成分なしにオノマトペが単独のままで述語として機能することができるものと思われる。

(26) dàn wǒmen de duì wǔ hái shì xī lǐ huī lǎ hěn bù zhěng qí
但我们的队伍还是稀里哗啦、很不整齐

(しかし、私たちの群れはまだバラバラで、整頓されていない)

(野口 1995)

一般的に反復形は動作の多回性を表すことができる。(27)のような用例は1モーラの反復形であるためか「的 de」を伴うことで、あるモノの状態を表すことができる。AB型はABAB型に派生しただけで十分に事柄を全体としてとらえる事ができるため、(28)のように、AAA型が「的 de」伴う用例はそれほど多くないと思われる。これは、特別に強調したい、あるいは文学的表現を意図するときだけにだけ用いられるのかもしれない。3音節、および6モーラのオノマトペが述語用法として用いられた用例を以下に示す。

(27) wénzi hēnghēnghēngde xiànglǎohéshàngniànjīng huòzhě lǎoxiùcáidúgǔwén
(蚊子) 哼哼哼的、像老和尚念经、或者老秀才读古文

(蚊がブンブンしている、まるで年寄りのお坊さんが経文を読んでいるか、あるいは年寄りの秀才が古文を読んでいるようだ)

(野口 1995)

(28) zhāngyǒucáixiànggèyǎba yìtiānshuōbùliǎoshíjùhuà zhāngyǒuyìxiàngzhīmáquè
张有才象个哑巴、一天说不了十句话；张有义象只麻雀、

zhěngtiānzhīzīzīchāchāzhā
整天 吱吱吱喳喳喳。

(張有才は口が不自由な人のように、一日10個のフレーズもしゃべらない、張有義は雀のように、毎日ぺちゃぺちゃぺちゃぺちゃしている)

(野口 1995)

このように、日本語においては「オノマトペ+する」ができるオノマトペは比較的モーラ数の制限を強く受ける¹³のに対して、中国語のオノマトペはオノマトペそのままの形で付加成分を伴わなくても述語用法として用いることができるため、モーラ数に関する制限は比較的緩いのではないかと考えられる。以上、中国語のオノマトペにおける音韻・形態的特徴について見た。次に日本語および中国語におけるオノマトペの述語用法の音韻・形態的特徴についてまとめる。

4.1.3. 述語用法における音韻・形態的特徴のまとめ

前節で、日本語のオノマトペの述語用法は、4モーラのものに偏っていることが明らかになった。つまり、日本語において「オノマトペ+する」および「オノマトペ+だ」のものはほとんどが4モーラである。日本語のオノマトペはABABのように4モーラの反復形を用いることで、ある動作の継続・持続や多回性を表すことができる。持続性や多回性を動詞化するため、「オノマトペ+する」や「オノマトペ+している」とともに用いられるとも考えられる。

2モーラのオノマトペは「チンする」のような、ごく一部のものを除いて「する」や「だ」を後続する用法は非常に少ないようである。さらに、1、2、3モーラのオノマトペは語尾が「促音、撥音、長音」で終わるものが多く、これらは「オノマトペ+とする」のように「と」を必須とする。「と」を伴わない「オノマトペ+する」の形では用いることができないため、述語用法も非常に少ないのだと思われる。

中国語のオノマトペの述語用法は、2モーラおよび4モーラに偏っていることが分かった。そのうち、2モーラは統語的制約を強く受け、詩歌的表現および韻を踏む場合以外は、単独では述語用法として用いられにくい。それに対して4モーラのオノマトペは比較的制約が緩く、オノマトペが単独でも述語として用いられやすいという特徴がある。

日本語のオノマトペ同様に、中国語においても1モーラのオノマトペが単独で述語用法として用いられた用例は確認できなかった。両言語における1モーラのオノマトペが元々少ないということもあるが、その中でも、やはり述語用法として用いられるものはとりわけ少ない。この現象は述語用法だけでなく、副詞的用法においても同様で、1モーラのみで用いられる用例はごく稀であり、ほとんどが「地 de」を伴って用いられていることが黄(2008)で確認されている。

以上、日本語および中国におけるオノマトペの述語用法の音韻形態的特徴について見てきた。次は述語用法の統語的特徴について見ていくことにする。

¹³ 日本語に関しては、主に広告や新聞などで用いられる「する」や「だ」を省略した形で文末に用いる動詞省略用法がある。田守・スコウラップ(1999)を参照されたい。

4.2. オノマトペの述語用法における統語的特徴

4.2.1. 日本語のオノマトペにおける述語用法の統語的特徴

辞書に載っている 783 語のオノマトペのうち、「オノマトペ+する」および「オノマトペ+だ」の形で用いることができると表記されている項目は 313 語で、全体の約 40%を占める。黄 (2010) は現代小説を資料として調査を行っているが、調査結果として明らかになったのは、オノマトペは副詞的用法として用いられるものが最も多く、それに次いで多く現れるのが「オノマトペ+する」の形であり、「オノマトペ+だ」の形は比較的少ないということである。これら 313 語のオノマトペが、「オノマトペ+する」および「オノマトペ+だ」の形で述語として用いられた用例は全部で 472 例ある。詳細を表 5 に示す。

表 5: 「する」形および「だ」形の用例

形式	出現数
述語:「する」の形	166
述語:「だ」の形	24
連体形 (名詞修飾)	160
その他	122
合計	472

表 5 から、「オノマトペ+する」の形で述語として用いられたものが約 66%を占めているのに対し、「オノマトペ+だ」の形で述語として用いられたものは約 14%に過ぎず、用例数が圧倒的に「する」より少ないことが分かる。述語用法としての「オノマトペ+する」は「する」の形でコトの様を表し、「している」の形でモノの様を表すため、同じくモノの様を表す「だ」の出現頻度に影響を与えているように思われる。以下用例を示す。

- (29) 目には見えないけど、ここにはばい菌がうようよしているんですよ。
(曹 2008)
- (30) 飲みすぎて腹ががぶがぶする。
(曹 2008)
- (31) 彼女は中国語がぺらぺらだ。
(曹 2008)
- (32) 満員電車で六時間も立ち詰めで、もうくたくただ。
(曹 2008)

述語用法のうち、「オノマトペ+する」が動詞的に用いられる用例が圧倒的に多かったため、「オノマトペ+する」の用例について詳しく見ていくことにする。表 6 に「オノマトペ+する」の詳細を示す。

表 6: 「オノマトペ+する」形の述語用法の詳細

形式	出現数
「する」形	148
補助動詞	14
使役形	4
合計	166

「オノマトペ+する」が補助動詞をしたがえた形で使われる用例は 166 例中に 14 例現れている。補助動詞は「テクル」、「テシマウ」が後続した形で使われたものである。「テイル」については後述する。以下用例を示す。

- (33) テレビで怪談を見ていてなんだかぞくぞくしてきた。
(曹 2008)
- (34) つい午後の授業はうつらうつらしてしまうんです。
(曹 2008)

ヲ格をとるものには、使役変化他動詞が 4 例、場所移動動詞が 2 例、その他が 3 例ある。基本的にヲ格をとるものは、使役形として用いられ、身体名詞とともに現れるという傾向がある。(35)–(36) のように、口、目などの身体名詞を描写する際には「オノマトペ+する」の形よりも、「オノマトペ+させる」の形で使役変化他動詞として用いられやすいということは、影山 (2005) にも言及がある。しかし、影山 (2005) が言う「母親が赤ちゃんの背中をトントンする」のような「働きかけ他動詞」の用法は辞書の用例では確認できなかった。

- (35) 鯉が水面に顔を出して、口をぱくぱくさせている。(使役形)
(曹 2008)
- (36) 母親は驚きのあまり、目をぱちぱちさせていた。(使役形)
(曹 2008)
- (37) 彼はいつも酒のにおいをぶんぶんさせている。(使役形)
(曹 2008)
- (38) 鎖をがちゃがちゃさせる。(使役形)
(曹 2008)
- (39) 係員は奥の部屋と窓口との間をうろうろするばかり。(場所移動動詞)
(曹 2008)
- (40) 何をくよくよしているんだ。(その他)
(曹 2008)
- (41) 話をきっぱりする必要がある。(その他)
(曹 2008)

「オノマトペ+する」および「オノマトペ+だ」をテンス・アスペクトの観点からみると、表 7 のようになる。

表 7: テンスとアスペクトから見る述語用法の内訳

形式	詳細	出現数
する	する／した	78／5
	している／していた	67／2
	してくる／してきた	2／10
	してしまう／してしまった	1／1
だ	だ／だった	24／0
合計		190

表 7 から分かるように、辞書の用例からは「オノマトペ+だ」は、ほとんど「だ形」で用いられ、「だった形」は 1 例も現れていない。「オノマトペ+だ」はモノのサマを表しているため、あるモノの静的状態・恒常的なものを表すために「だ形」を多く用いると推測できる。しかし、現実の日常会話の中では「昨日までざらざらだった肌が温泉に入ったらすべすべになった」のように「だった」形で用いられていることは容易に想像できるが、辞書の記述においては、出現頻度がかなり低かったことも断っておかなければならない。以下用例を列挙する。

- (42) そんな大きい声でおめかないでよ。耳ががんがんするわ。
(曹 2008)
- (43) 雨でハイキングが中止になったので、がっかりした。
(曹 2008)
- (44) 隣の部屋で何かごそごそしている。
(曹 2008)
- (45) 今日は朝から忙しくて一日中ばたばたしていた。
(曹 2008)
- (46) 社長の話を聞いていると、腹が立って、むかむかしてくる。
(曹 2008)
- (47) 一日中細かい計算をしていたら頭がくしゃくしゃしてきた。
(曹 2008)
- (48) 日当たりのいい席だと、つい午後の授業はうつらうつらしてしまうんです。
(曹 2008)
- (49) 前略 祖父に死なれてからは急に落ち込み、しょぼしょぼしてしまった。
(曹 2008)

(50) のどが渴いてからからだ。

(曹 2008)

ここにあげている用例以外にもオノマトペの後続成分として「(に) なる／(と) 行く」などがある。あるモノが、ある状態から違う状態に変化した場合、つまり結果状態を表すものや状態変化を表すものは、「オノマトペ+になる／になった」のように用いられるのが一般的である。

以上、日本語におけるオノマトペの述語用法の統語的特徴を見てきた。次は、中国語におけるオノマトペの述語用法の統語的特徴を見ていくことにする。

4.2.2. 中国語のオノマトペにおける述語用法の統語的特徴

中国語の辞書には、431 語のオノマトペの合計 1216 例の用例が収録されている。そのうち、オノマトペが述語として用いられた用例は、わずか 67 例のみで、全体の約 5%しか占めていない。日本語に比べて中国語のオノマトペは述語用法が非常に少ないことが分かった。耿 (1986) の中国語のオノマトペは述語用法が非常に稀であるという主張を裏付ける結果になっている。表 8 に詳細を示す。

表 8: 中国語のオノマトペ辞書における述語用法の出現頻度

詳細	出現数
オノマトペのみ	43
補語後接	12
目的語後接	10
状語前接	2
合計	67

中国語のオノマトペの述語用法において最も特徴的なのは、付加成分なしにオノマトペのみで述語成分になるものが 64%と最も高くなっていることである。補語を伴うもの、目的語を伴うもの両方とも約 15%を占めている。オノマトペのみで現れているものは、静的なものの描写が多く、形容詞的に機能しているように思われるが、補語および目的語を伴って現れるものには動作性が強く感じられる。

述語用法のうち、オノマトペのみで述語用法として用いられたものは、ある動的な事態を全体像として描写するものであると考えられる。オノマトペのみで述語用法として用いられているものを以下に示す。

- (51) chēlún kuāngdāngkuāngdāng, lièchē yáo yáo huàng huàng
车轮“哐当哐当”、列车摇摇晃晃
(車輪はガタンガタン、列車はユレユレ)
(野口 1995)
- (52) mǎcuì qīng nà liǎng piàn báo zuǐ chún, pī pī pā pā jiù xiàng qiāo bāng zǐ shì de shuō le yí dà
堆、连一口气都没有喘
(马翠清的薄嘴唇はベチャベチャして、棒を叩くように呼吸もせずに、一気にしゃべった)
(野口 1995)
- (53) bào zhī diàn tái zhěng tiān gū lā gū lā, bái zhuān yáng nǚ
报纸电台整天呱啦呱啦：白专、洋奴、……!
(新聞やテレビ局は毎日ギャーギャーしてる(「報道している」の意味)：白専、洋奴……！)
(野口 1995)
- (54) dàn wǒ men de duì wǔ hái shì xī lǐ huī lā, hěn bù zhěng qí
但我们的队伍还是稀里哗啦、很不整齐。
(しかし、私たちの群れはまだバラバラで、整頓されていない)
(野口 1995)

「的 de」を伴い、形容詞的に用いられる用例が 7 例ある。それら以外はすべてが動詞的用法である。日本語でも「だ」を伴った形容動詞的用法が「する」を伴った動詞的用法より圧倒的に少なかったが、中国語においても形容詞的に用いられた用例は全体の 12% 前後にとどまっている。

- (55) wǒ dī le tóu tóu nǎo lǐ hōng lōng hōng lōng de
我低了头 头脑里轰隆轰隆的
(私のうつむいた、頭の中はゴロゴロしていた)
(野口 1995)

李 (2007) の記述によると、中国語のオノマトペの述語用法には、目的語を取るものが非常に稀である。しかし、オノマトペ辞書から収集した用例からは、約 15% を占める 10 例が目的語を伴って現れている。

- (56) lǐhónggāngyòudīshēngdūleyījù
李 红 钢 又 低 声 嘟 噜 了 一 句

(李紅鋼は、また低い声で一言ブツブツ言った。)

(野口 1995)

- (57) wáwámenzài”gābēng zhecándòu
娃 娃 们 在 “嘎 嘣 ” 着 蚕 豆

(子供たちはエンドウ豆をガチガチしている)

(野口 1995)

日本語のオノマトペの述語用法では、使役形で用いられる場合と同様に、その目的語となる名詞は口、足、目、臉、翼などの身体名詞が多いように思われる。一方、中国語のオノマトペの述語用法は及物動詞として用いられることがほとんどないということが李(2007)によって述べられているが、少ないながら、身体名詞を中心としてその他の名詞の目的語も取れるということが確認できた。

- (58) rénmensōngyīkǒuqì bādāzhegānkědezhuǐshuō (口)
人 们 松 一 口 气 、 吧 嗒 着 干 渴 的 嘴 说

(人々はホッとして、乾いた口をベチャベチャしながら話した)

(野口 1995)

- (59) xiǎojiǔliándèxīnnǎ jiùxiàngzhǎngquánleyǔmáodèxiǎoniǎo pūlāzhechìbǎngfēizhe
小 九 莲 的 心 哪 、 就 像 长 全 了 羽 毛 的 小 鸟 、 扑 啦 着 翅 膀 飞 着

(翼)

(小九蓮の心はね、まるで羽毛が完全に生えた子鳥のように、翼をパタパタしながら飛んでいる。)

(野口 1995)

補語を伴って現れるオノマトペは、「～しはじめる」に相当する「起来 qǐlái」のようなものがある。

- (60) tāqìdézàixīnlǐhēnghēngqǐlái
他 气 得 在 心 理 哼 哼 起 来

(彼は怒りで心からフンフンし始めた)

(野口 1995)

以上、中国語におけるオノマトペの述語用法の統語的特徴について見てきた。以下では、日本語及び中国におけるオノマトペの述語用法の統語的特徴についてまとめる。

4.2.3 述語用法における統語的特徴のまとめ

「オノマトペ+する」の形で述語として用いられたものは、「オノマトペ+だ」の形で述語として用いられたものより用例数が圧倒的に多い。「オノマトペ+する」は「している」の形でモノの様を表すため、同じくモノの様を表す「だ」の出現頻度に影響を与えているものと思われる。

ヲ格をとるものは、身体名詞を修飾する使役形が主であり、場所移動動詞も確認できたが、影山 (2005)も述べているとおり、オノマトペは他動性が非常に低い。さらに「働きかけ動詞」は今回の調査では見当たらなかった。口、目などの身体名詞を描写する際には「オノマトペ+する」の形よりも、使役形が用いられやすい。これについては影山 (2005) に既に指摘がある。

辞書の用例からは「オノマトペ+だ」は、ほとんど「だ形」で用いられる。「オノマトペ+だ」はモノのサマを表しているため、あるモノの静的状態・恒常的な状態を表す際には、「だった形」よりも「だ」形が多く用いられていることが原因ではないかと思われる。以下用例を提示する。

中国語のオノマトペの述語用法において最も特徴的なのが、オノマトペのみで述語成分になるものが約 64%と最も高くなっていることである。オノマトペのみで現れているものは、静的なものに関する描写が多く、補語および目的語を伴って現れるものは動的なものに限る。「的 de」を伴い、形容詞的に用いられる用例は、動詞的に用いられたものより少ない。中国語において形容詞的に用いられた用例は全体の 12%前後にとどまっている。日本語においても同じ現象であることが確認できた。

李 (2007) によると、中国語のオノマトペには目的語を取るものが非常に稀であるが、本稿で辞書から収集した用例のなかでは、約 15%を占める 10 例が目的語を伴って現れている。身体名詞を主にその他の名詞の目的語も取れるオノマトペは決してそれほど珍しくないことが伺える。

以上、日本語および中国語におけるオノマトペの述語用法の統語的特徴についてまとめた。

5. おわりに

本稿では、日本語および中国語のオノマトペの述語用法について、辞書を用いてその用例を確認し、さらに両言語の述語用法にはどのような特徴があるのかについて調べた。以下、本稿での考察をまとめる。

- 1) 日本語では、述語用法として用いられるオノマトペが全用例数の約半数以上を占めるのに対し、中国語では述語用法として用いられるオノマトペが比較的少ない。
- 2) 両言語とも述語用法とモーラ数は密接に関係していることが分かった。日本語では、ほとんど 4 モーラのものが述語用法として用いられるのに対し、中国語では 2 モーラのオ

ノマトペが述語として用いられやすい。さらに、1 モーラの述語用法は両言語とも辞書では確認できなかった。先行研究にも指摘されているとおり、1 モーラのオノマトペはそのままの形で用いられるものは非常に稀である。両言語におけるオノマトペは述語用法だけでなく、副詞として用いられる際にも 1 モーラのものでそのまま用いられるものはごく稀である。

- 3) 両言語における述語用法はともに、他動性が低いことが分かった。他動詞的に用いられる場合、ほとんどの用例が口、足、目など身体の再帰名詞を目的語として取る傾向があることも分かった。
- 4) 日本語は、現状描写として「している」の形が多く用いられる。同様に、中国語のオノマトペもオノマトペが単独のまま現れることや助詞の「着 zhe」を伴うことで、現状を描写する傾向がある。

本稿は、日本語と中国語における述語用法の諸特徴を辞書の用例から確認した予備調査段階にとどまっている。今後の課題として、辞書から確認できたオノマトペの述語用法の諸特徴を基盤に、小説から用例を収集し、日常生活で用いられている言語データから述語用法について検証・考察を行い、さらにその諸特徴を明らかにしていきたい。

参考文献

【日本語に関するもの】

- 伊東真美 (2006) 「日本語オノマトペの「する」動詞化の研究」『日本語学会 2007 年春季大会予稿集』, 日本語学会: 45-52
- 大塚望 (2009) 「擬音語・擬態語と「する」の結合について—「だ」「やる」との違いを中心に—」『日本語文学』19, 創価大学日本語日本文学会: 17-36
- 影山太郎 (2005) 「擬態語動詞の語彙概念構造」『第 2 回中日理論言語学研究会』, ハンドアウト: 1-9
- _____ (2006) 「擬態語動詞の統合構造」『関西学院大学人文学会』56-1, 関西学院大学: 83-101
- 加藤久雄, 坂口昌子 (1996) 「後続成分とオノマトペの性質について」『奈良教育大学紀要』45-1, 奈良教育大学: 1-12
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房 (1976 に収録): 7-26
- 黄慧 (2008) 「中国語の「オノマトペ+地」について」『2008 年中国語学会第 58 回大会学会予稿集』中国語学会
- 国際交流基金編 (1989) 『発音 教師用日本語教育ハンドブック』, 凡人社.
- 斎藤純男 (1997) 『日本語音声学入門』, 三省堂.
- 曹金波 (2008) 『標準日本語擬声語・擬態語』大連理工大学出版社.

- 田守育啓, ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ—形態と意味—』 くろしお出版
- 中北美千子 (1991) 「擬音語・擬態語と形式動詞「スル」の結合について」『国文目白』31, 日本女子大学国語国文学会: 247-256
- 西尾寅弥 (1981) 「「擬音語・擬態語+する」の形式について」『語学と文学』20, 群馬大学語文学会: 82-96
- 宮地裕 (1978) 「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』115, 国語学会: 33-39

【中国語に関するもの】

- 耿二岭 (1986) 《汉语拟声词》湖北教育出版社, 湖北
- 李镜儿 (2007) 《现在汉语拟声词研究》学林出版社, 上海
- 野口宗親 (1995) 『中国語擬音語辞典』東方書店, 東京

日汉拟声词谓语用法的特征 —以词典中的用例为主进行的预备调查—

摘要

本文主要讨论日语与汉语中拟声词的谓语用法。我们用日汉“拟声词词典”为主要资料，收集了用例，并确认到日语与汉语中拟声词的谓语用法及其特征。主要考察拟声词做谓语时的语法特征其音节数。再看日汉拟声词的谓语用法的不同之处。

通过分析，我们考察到以下几个特征：

- 1) 日语拟声词半数以上都可以做谓语。但与日语相比，汉语中的拟声词可以做谓语的拟声词其数量很少。
- 2) 日汉拟声词都与音节数有密切的联系。日语中可以做谓语的拟声词大多数是 4 音节的。2 音节的拟声词做谓语的很少。但汉语里 2 音节的拟声词做谓语的比较多。其次是 4 音节的。日汉拟声词中单音节一般不能单独做谓语。这个现象不局限于做谓语时，而做修饰语（副词）时也有同样的倾向。（请参看田守他 1999、黄 2008）
- 3) 我们还观察到日汉拟声词做谓语时他动性非常低，而且用于他动词时它们带的宾语都是“口，嘴，手，脚，眼睛”等身体名词。
- 4) 日语中用现状描写可用“shiteiru/da”两形式，汉语里的现状描写则多使用拟声词单独做谓语的形式，或“拟声词+的”的形式而很少用“拟声词+着”的形式。

引用節内のモダリティ形式と主節述部・被修飾名詞との関連性 —意味分類を基に—

佐藤雄亮

(東京外国語大学大学院博士後期課程地域文化研究科)

キーワード：モダリティ 引用節 現代日本語書き言葉コーパス 分類語彙表

1. 本研究の目的

本研究は、例 (1) のように、「と」や「って」などを用いる「引用節¹」内にモダリティ形式が現れる用例について論じるものである。

- (1) 初め、野々宮が何かを企んで出鱈目を言っているのではないかと疑ったが、それなら彼が自分と森本の関係を知っているわけがない。(深谷忠記「指宿・桜島殺人ライン」²)

例 (1) の「引用節—主節述部」では、「出鱈目を言っているのではないか」と考えることが、「疑う」ことだということが表現されている。次節で見る先行研究で指摘されているように、「疑う」など主節述部は、「のではないか」を用いた節がどのような行為・思考であるかを換言したものとなっているわけである。

本研究の主な主張は、(1) の「疑う」のように、モダリティ形式を含む引用節と共に主節述部の意味、およびその数量的分布に、各モダリティ形式の意味の違いが反映していること³、そしてそれが意味の記述に対する実証的な根拠となる、という点である⁴。考察においては、日本語の大規模書き言葉コーパスを用い、数量に対して統計的分析を加えることで、考察の客観性を保つよう留意した。以下、2 節で先行研究の言及をまとめ、3 節で考察対象となるデータの収集と整理の方法について述べる。4 節が本研究の本論であり、調査結果とその分析を行う。5 節は本研究のまとめである。

2. 先行研究

引用節との共起における差異に基づき、モダリティ形式の意味を論じる研究はあまり見られない⁵。その中で、森山 (1988)、藤田 (1986, 2000) は本研究にとって参考に

¹ 以下、日本語記述文法研究会 (2008) に従いこの用語を用いる。

² 以下、例文においてはモダリティ形式に当たる部分に下線を、引用節を受ける主節述部・被修飾名詞に囲み線を付す。用例の出典には (著者「タイトル」) を付す。

³ 後述するように、実際には主節述部ではなく被修飾名詞となっているものについてもその共起を論じることになる。

⁴ モダリティ形式の従属節における出現の可否という文法的性質を指摘した研究として、南 (1974, 1993) などが挙げられる (それらの現象から各形式の意味の説明も試みられている)。

⁵ 大規模なコーパスからの用例数やその割合の違いを基に、前述の南の考察なども参照しながら、モダリティ形式の類型化を論じるナロック (2006)、Narrog (2009) を本研究は参考にしている。ただし、ナロック (2006)、Narrog (2009) は、南 (1974) の言う A~C 類の従属節内にどのようなモダリティ形式が現れるのかという点を論じたものであり、引用節内のモダリティ形式を取り上げる

すべき先行研究である。

森山 (1988) は上の観点を「報告動詞分析」と呼び、『『文』ト〜スルというように、文の発話的な意味をどう報告するかによって、その文の表現的な意味を考えようとするものである』と説明する (森山 1988: 249)。例として、「だろう」を用いた文が「[彼はもうすぐ大学をやめるだろう]と判断する／した。」と、「命令的な表現の文」が「[すぐ部屋に來い]と命ずる／命じた。」とそれぞれ言えることなどが指摘されている。

特定の主節述部が取る引用節に、どのような性質が認められるか考察を進めた諸論考が藤田 (2000) に収められている。日本語には、「おはようと言った。」など、「述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す」典型的な引用と言えるもの(「第Ⅰ類の引用」)と、「おはよう。」と鈴木が入ってきた。」などのように「述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す」もの(「第Ⅱ類の引用」)の二種類が認められる (藤田 1986, 2000)。この内、第Ⅰ類に該当する例では、「言った」などの主節述部は、「おはよう」という具体的な発言・心内発話に対して、抽象化を行ったものと見ることができる (藤田 2000: 71-72)。この点を踏まえ、藤田 (2000: 199-380) では、それら「抽象化」に着目し、主節述部が「と疑う／知る／後悔する／宣言する／約束する／聞く／名づける／名のる」である場合に引用節が示す性質に関して考察されている。第Ⅰ類と異なり、第Ⅱ類の引用に見られる「引用句と共存する動作・状態」は、ある程度の緩やかな条件さえ満たせば、文脈に支えられて大抵の表現が許容されてしまう (藤田 1986: 213; 2000: 224) ものとされるため、引用節と主節述部の意味上の結び付きは弱いと判断できる。

本研究は、これらの先行研究を参考に、モダリティ形式を含む引用節と共起し、「第Ⅰ類の引用」を構成する主節述部を分析することによって、各モダリティ形式(を用いた節)がどのような行為・状態を表すものと捉えられているか考察するものである。

3. 研究方法

3.1. 用例の収集方法

本研究では、考察の対象をモダリティ形式の一部に限定する。具体的には、宮崎 (他) (2002)、日本語記述文法研究会 (2003) などにおいて「認識のモダリティ」を表す形式として挙げられた全ての形式、すなわち〈だろう〉〈かもしれない〉〈にちがいない〉〈にきまっている〉〈はずだ〉〈ようだ〉〈みたいだ〉〈(する) そうだ〉〈らしい〉〈のではないか〉の10形式⁶、および「評価のモダリティ」に属するとされる形式の代表例として〈なければならぬ〉〈ほうがいい〉を取り上げる。

今回は、これらの形式が、動詞もしくは形容詞に接続し、かつ引用を表す「と」「って」、もしくは例示を表す「など」「なんて」を用いて藤田 (1986, 2000) の言う「第Ⅰ類の引用」を表しているという条件を満たす用例を考察対象とした。

引用に関連して、「という」や「との」を介した名詞修飾表現がある。調査におい

本研究とは着眼点異なる。

⁶ 〈だろう〉〈かもしれない〉〈そうだ〉が〈の(だ)〉を前接させる形式の内、〈の(だ)〉については〈だろう〉〈だろうか〉〈の(だ)だろうか〉と共に佐藤 (2010) で論じた。〈のかもしれない〉〈の(だ)そうだ〉に関する考察は今後の課題である。

て、この「という」「との」を用いた名詞修飾と、モダリティ形式との共起が一定数認められた。こういった用例の内、次の「疑い—疑う」のように、被修飾名詞を用言化することで【引用節—主節】の関係が読み取れるものについては、本研究での考察対象に含めた。

何か盗んだのではないか {という／との} 疑い 【「という」による名詞修飾】
 何か盗んだのではないかと 疑う 【引用節—主節】

「という」「との」を介して修飾される名詞が、具体的な意味が希薄な名詞である例の内、「問題が起こるだろうということが懸念される」のような例は、「だろうと懸念される」への置き換えが可能であることから、考察対象に含める。この場合、「こと」などではなく、「懸念される」などを、引用節と共起する主節述部として認める。

具体的な意味が希薄な名詞の例であっても、その全てが考察の対象となるわけではない。例えば、「問題が起こるかもしれないという点を見逃した。」などは、引用節と「見逃す」の間に上の例のような関係性が無いため、「問題が起こるかもしれないと見逃した。」には置き換えられない。このような例は考察の対象外とした。

本研究で用例収集に用いるコーパスは、国立国語研究所が公開している、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ (=BCCWJ ; 2008 年度版) である。今回はジャンルを限定せず、コーパス全体からの用例を考察対象とした⁷。用例の検索は、BCCWJ 内に含まれる『ひまわり』BCCWJ パッケージ⁸を用いた⁸。

3.2. 用例の分類基準

前節の方法で収集した用例について、引用節を受ける主節述部あるいは被修飾名詞を、意味によって分類したものを本研究の考察材料とする。コーパス検索で得られた用例のそれぞれについて、「と (いう)」などを受ける主節述部・被修飾名詞を特定し、それらの語について『分類語彙表』における「分類項目番号」およびそれに対応する項目名を付与し、各例の意味分類とする⁹。論じる内容によっては、さらに下位の分類

⁷ このコーパスには「書籍」「白書」「国会会議録」「Yahoo!知恵袋」という収録媒体別のデータが収められている。

⁸ 以下の正規表現を①～⑤の順に並べたものを検索語とした。

① 「動詞・形容詞終止形」の指定：[うくぐすつぬぶむるいただ] (ただし〈なければならない〉では前に接続する文字列を指定しなかった。「見-なければならない」などの例があり、一様な文字列指定ができないためである)

② モダリティ形式 (の諸形式) を指定するための要素 (各形式とも、過去/非過去、普通体/丁寧体の違いを考慮した文字列指定を行った。「かも知れない」「に違いない」など、漢字表記も可能なものはそれらも収集の対象とした)

③ 文末で現れうる要素：[?!、…] ※ 「0 回以上の出現」で指定

④ 引用表現の指定：(と|って|なんて|など) 文字列が一致していても、考察対象と異なる意味を表すものについては全て手作業で省いた。

⁹ 以下は、『分類語彙表』の分類を筆者が改めたものである。

(a) 『分類語彙表』に無い語：筆者の判断によって、置き換えが最も適切と考えられる語の番号を付与する

(b) 同一品詞内で複数の項目に出現する語 (例：「訴える」は、「2.3123」「伝達・報知」、「2.3611」「裁判」に掲載)：同じ分類項目内に掲載される語などを参考に、各例における意味に最も合致

として設けられる「段落」¹⁰を利用する箇所もある。

4. 調査結果と考察

4.1. 全体数の確認

まず、今回対象とする用例の全体数を、出現頻度の多い形式から順に表 1 に示す。ただし、「評価のモダリティ」の〈なければならない〉〈ほうがいい〉に関しては別扱いとした。

表 1: 全体の用例数

形式	な い で か は	だ ろ う	れ か な い し	は ず だ	い に ち が い が	ら し い	よ う だ	に き ま っ て い る	そ う だ	み た い だ	ほ う い が	な ら な け ら な い ば
用例数	3730	1199	293	168	101	80	42	10	7	2	1023	704

表 1 から明らかなように、引用節において最も多く用いられるモダリティ形式は〈のではないか〉であった。それに次ぐのは〈だろう〉であり、〈かもしれない〉〈はずだ〉〈にちがいない〉など「可能性・必然性」を表すとされる形式の例はぐっと減る。〈らしい〉〈ようだ〉〈そうだ〉〈みたいだ〉など、「証拠性」を表すとされる形式の例はさらに少ない（「可能性・必然性」の〈にきまっている〉がその間に存在する¹¹）。

「第 I 類の引用」において、引用節は、思考・感情を表す場合と、発話・表出を表す場合とがある（藤田 2000: 209）。今回の調査結果においても、引用節を受ける主節述部・被修飾名詞は、『分類語彙表』での項目番号 3000 番台「心」（思考・感情を表すもの）と、3100 番台「言語」に分類されるものが大半であった。以下、思考・感情に関わるもの、表現に関わるものの順に、各モダリティ形式別の特徴をまとめる。なお、次に挙げるような〈にきまっている〉〈そうだ〉〈みたいだ〉に関しては用例数が少なく、共起する語の分布を問うことの有効性は無いと判断し、以下ではこれら 3 形式については言及しない。

する項目の番号を付与する

(c) 派生関係にある語が特定の品詞で複数の分類項目番号に割り振られている場合：（「心配」は名詞・動詞において"x.3013", "x.3061", "x.3062"の 3 箇所に掲載されているが、形容動詞としての用法は"3.3013.05"にのみ掲載）：最も多くの品詞に共通する項目番号（「心配」の場合は"3013"）を付す

(d) 『分類語彙表』が考慮しているのとは違う意味の用例であると思われる場合：類似する語の分類項目番号に変更する

(d) の例として次の例を挙げる。

「そろそろ運転免許の試験を受けてみようか」と、自動車局（DMV）のウェブサイト調べてみた。（中略）「カリフォルニアで職を得るもの、または居住するものは、一〇日以内にカリフォルニアの免許を取得しなければならない」とある！（「超」アメリカ整理日誌）

この例の「ある」は、『分類語彙表』に記載される「存在」ではなく、「記載されている」という意味になっている。この例の「ある」は"2.3151"「書き」に意味分類を変更した。

¹⁰「段落」は「意味上の語集団」を指すとされ、それぞれ二桁の数字が割り振られるが、項目名は当てられていない。

¹¹「可能性・必然性・証拠性」については、宮崎他（2002）、日本語記述文法研究会（2003）などの説明を参照のこと。

- (2) 彼はドクター・マックが好きだが、この勝負、デルーカ看護師が勝つに決まっていると思った。(堺谷ますみ「ドクターは敵?」)
- (3) いよいよ平家の追討軍がやってくるそうだ、という噂も耳にした。木曾ノ義仲挙兵、とも風の便りに聞こえてきた。(中津文彦「義経の征旗」)
- (4) やがて、父のいびきが聞こえてきた。子どもの頃は怪獣が吠えてるみたいだと思っていたいびきの音に紛らせて、僕は、少しだけ泣いた。(重松清「熱球」)

4.2. 思考・感情に関わる述部・名詞の用例分析

4.2.1. 用例数の確認と統計的処理について

本節では『分類語彙表』の 3000 番代の分類項目、つまり思考・感情に関わる主節述部・被修飾名詞が、モダリティ形式を含む引用節と共起する例について論じる。表 2 に、本節で対象とする用例の数を示す。『分類語彙表』での分類項目は名詞・動詞・形容詞類で共通した番号が付与されているため、同じ分類項目であれば品詞の違いは考慮せずまとめて示す。この表に限らず、これ以降該当する用例が 1 例も得られない項目は、欄をグレーで塗りつぶす。「語例」の欄には、多く見られた語を挙げた。

表 2: 思考・感情を表す主節述部・名詞の用例数

分類項目名	項目番号	語例	な い で か は	だ ら う	れ か も し な い	は ず だ	い に ち が な い	ら し い	よ う だ	い い ほ う が	な ら な い ば な け ら ば
心	3000	心理		1							
感覚	3001	気がする・感じる	224	20	12	1	4	1	1	3	10
感動・興奮	3002	痛感する ・感心する	3				1				2
感情・気分	3010	気分・心境	3		1						
快・喜び	3011	わくわくする	1	1							
恐れ・怒り ・悔しさ	3012	恐れる・恐怖	44		7				1		2
安心・焦燥 ・満足	3013	心配する・懸念	293	13	17				2		
苦悩・悲哀	3014	悩む・悲観する	4		2						
好悪・愛憎	3020	気遣う・同情する	5	4	1						
敬意・感謝 ・信頼など	3021	不信感	2								
表情・態度	3030	笑う								1	
信念・努力 ・忍耐	3040	苦勞									1
自信・誇り ・恥・反省	3041	反省・後ろめたい	9	3			1				1
欲望・期待 ・失望	3042	期待する・希望	38	15	11		1			2	2
意志	3045	意向・腹づもり	3	2					1		2
道徳	3046	信		1							2
信仰・宗教	3047	念じる									1
学習・習慣 ・記憶	3050	記憶する・習う	2	1						2	
知・知識	3060	常識	1								

分類項目名	項目番号	語例	ないで かは	だろ う	れか もし ない	はず だ	いに ちが ない	らし い	よう だ	ほう が いい	なけ らな いば
思考・意見 ・疑い	3061	思う・考える	2420	767	136	104	63	8	5	837	386
注意・認知 ・了解	3062	わかる・気が付く	58	16	9	4	5	22	1		20
測定・計算	3064	予測する・試算	12	16	1		2				
研究・試験 ・調査・検 査など	3065	分析する・調査	2	2	1						1
判断・推測 ・評価	3066	想像する・推測する	149	77	12	5	11	7	1	15	6
決心・解決 ・決定・迷い	3067	結論・覚悟する	6	9	4	3	3			1	137
意味・問題 ・趣旨など	3070	話題・イメージ	2	4				1			16
論理・証明 ・偽り・誤 り・訂正など	3071	理屈・仮説	9	5		1			1	2	2
説・論・主義	3075	説・主張	15	1	1	1					5
原理・規則	3080	原則・法律								1	7
制度・慣例	3082	制度									2
計画・案	3084	準備									1
見る	3091	発見する ・観測する	3					2		1	
見せる	3092	指摘する・示す	68	6		1				1	2
聞く・味わう	3093	聞く	7	4	3	2		15	1	19	2
小計			3383	968	218	122	91	56	14	885	610
その他			347	231	75	46	10	24	28	138	94
合計			3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704

先の表 1 に示した全体の値と、この表 2 における合計の値を対照すれば、モダリティ形式が引用節で用いられるのは、表 2 にまとめたような、引用節の内容に関して思考したこと、何らかの感情を抱いたことを表す語と共起する場合がほとんどであることがわかる。用例数がもっとも多いのは〈のではないか〉であり、分類項目の広がりも〈のではないか〉において 34 項目中 26 項目と、最も広い。以降、〈だろう〉〈かもしれない〉の順に項目数は減少し、〈はずだ〉〈にちがいない〉〈らしい〉〈ようだ〉に関してはそれぞれ 10 項目を割る。

最下段の合計数を見てもわかるように、単純な用例数の比較では〈のではないか〉が最も用いられやすい形式であり、その偏りは大きいように見える。しかしこれらの数値が統計的にも偏りを持った結果なのかどうかは別に確認する必要がある。本研究では、その点を分析する方法として、「理論的に期待される値からどれだけずれているか」というデータを用いる。

期待値と観測値のずれの尺度としては、カイ二乗検定に用いられるカイ二乗値（計

算式は $[(期待値-観測値)^2/期待値]$ を用いる¹²。引用節で用いられる用例全体の中で、それぞれの分類項目に特徴があるかどうかを確認するため、期待値は「その他」の分類項目の用例数も含めた、全 7340 例を用いて算出している¹³。収集した用例数が期待値から大きくずれる程、それは統計的に偏っている（つまり、何らかの解釈すべき理由が存在する）ことになる。次の表 3 にその値を示した（小数点以下第 2 位を四捨五入して表す）。ずれの尺度が 1 より大きい値については、観測値が期待値よりも多いものに (+)、少ないものに (-) を付与した¹⁴。期待値からのずれが大きい上位 15 個の値には斜字体・下線を付して示した¹⁵。つまり、それらは何らかの理由で特に多い (+)、あるいは少ない (-) 値を示した箇所だということになる。

カイ二乗値の分布から、用例数（ここでの「観測値」）の偏りに反して期待値と観測値の違いが大きいのは必ずしも〈のではないか〉に限られないことが見て取れる。以下、上の表 2、表 3 において顕著な値を示した箇所について論じる。

4.2.2. モダリティ形式と感情を表す語との共起

表 3 の中での〈のではないか〉の値の内、その用例数が顕著に多いという結果を示したものに、“3013”「安心・焦燥・満足」がある。〈のではないか〉とは逆に、〈だろう〉と「安心・焦燥・満足」の語との共起例は期待値に対して少ない。

本節では、この「安心・焦燥・満足」を始めとして、主節述部・被修飾名詞が、引用節の内容に対しての何らかの感情を表すものについて論じる。対象となるのは「安心・焦燥・満足」以外に、“3012”「恐れ・怒り・悔しさ」、”3014”「苦悩・悲哀」、”3021”「敬意・感謝・信頼など」内の「不信感」（肯定的な語の例は得られなかった）、”3042”「欲望・期待・失望」である。これらはどの語も、引用節の内容に対して否定的あるいは肯定的な感情を表すものである。『分類語彙表』の最下位の分類である「段落」を参照して、否定的なもの、肯定的なものごとにとまとめた用例数を表 4 に示す（該当する用例の得られなかった〈はずだ〉〈らしい〉を除く）。

¹² 二乗するのはプラスとマイナスに広がるずれの距離をプラス側に一元化するためであり、期待値で割るのは、期待値の大きさによる値のばらつきを平均化するためである。このように調整することで、例えば【期待値 1000、観測値 992】の場合よりも【期待値 10、観測値 2】の場合にずれの尺度が大きく求められることになる。

¹³ 期待値= $[7340 * \text{該当する分類項目の総用例数} / 7340 * \text{該当する形式の総用例数} / 7340]$

¹⁴ ここでの「尺度 1 以上」という基準に特に根拠はなく、任意に設定したものである。

¹⁵ 最下段の「その他」の値は「上位 15 位」に含めない。

表 3: 思考・感情を表す語の例における期待値と観測値とのずれ

分類項目名	項目番号	のではないか	だろう	かもしれない	はずだ	にちがいない	らしい	ようだ	ほうがいい	なければならぬ	用例数
心	3000	0.5	(+)4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
感覚	3001	<u>(+)50.0</u>	(-)14.0	0.1	(-)4.5	0.0	(-)1.3	0.2	<u>(-)32.7</u>	(-)10.2	276
感動・興奮	3002	0.0	1.0	0.2	0.1	(+)10.2	0.1	0.0	0.8	(+)3.5	6
感情・気分	3010	0.5	0.7	(+)4.4	0.1	0.1	0.0	0.0	0.6	0.4	4
快・喜び	3011	0.0	(+)1.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	2
恐れ・怒り・悔しさ	3012	(+)10.0	(-)8.8	(+)10.9	(-)1.2	0.7	0.6	(+)1.5	(-)7.5	(-)2.0	54
安心・焦燥・満足	3013	<u>(+)99.0</u>	<u>(-)30.3</u>	(+)1.2	(-)7.4	(-)4.5	(-)3.5	0.0	<u>(-)45.3</u>	<u>(-)31.2</u>	325
苦悩・悲哀	3014	0.3	1.0	(+)12.9	0.1	0.1	0.1	0.0	0.8	0.6	6
好悪・愛憎	3020	0.0	(+)3.4	0.9	0.2	0.1	0.1	0.1	(-)1.4	1.0	10
敬意・感謝・信頼など	3021	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	2
表情・態度	3030	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	(+)5.3	0.1	1
信念・努力・忍耐	3040	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(+)8.5	1
自信・誇り・恥・反省	3041	0.5	0.2	0.6	0.3	(+)3.4	0.2	0.1	(-)2.0	0.1	14
欲望・期待・失望	3042	0.2	(+)1.2	(+)24.7	(-)1.6	0.0	0.8	0.4	(-)6.0	(-)3.2	69
意志	3045	0.3	0.4	0.3	0.2	0.1	0.1	(+)19.9	(-)1.1	(+)2.0	8
道徳	3046	(-)1.5	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	(+)10.2	3
信仰・宗教	3047	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(+)8.5	1
学習・習慣・記憶	3050	0.1	0.0	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0	(+)2.4	0.5	5
知・知識	3060	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
思考・意見・疑い	3061	0.1	0.0	(-)14.7	0.2	0.1	<u>(-)36.8</u>	(-)18.0	<u>(+)48.3</u>	(-)10.0	4726

分類項目名	項目番号	のではないか	だろう	かもしれない	はずだ	にちがいない	らしい	ようだ	ほうがいい	なければならぬ	用例数
注意・認知・了解	3062	(-)1.6	(-)1.7	(+)2.4	0.3	(+)5.3	<u>(+)286.4</u>	0.1	(-)18.8	(+)3.8	135
測定・計算	3064	0.9	(+)23.6	0.0	0.7	(+)5.8	0.3	0.2	(-)4.3	(-)3.0	31
研究・試験・調査・検査など	3065	0.4	(+)1.1	(+)2.4	0.1	0.1	0.1	0.0	0.8	0.3	6
判断・推測・評価	3066	0.2	(+)20.5	0.0	0.3	(+)13.0	(+)5.0	0.2	(-)15.1	(-)16.5	283
決心・解決・決定・迷い	3067	<u>(-)71.3</u>	(-)11.7	1.0	0.1	0.3	(-)1.8	0.9	(-)20.8	<u>(+)942.2</u>	163
意味・問題・趣旨など	3070	(-)8.0	0.0	0.9	0.5	0.3	(+)2.2	0.1	(-)3.2	<u>(+)86.3</u>	23
論理・証明・偽り・誤り・訂正など	3071	0.1	0.9	0.8	0.6	0.3	0.2	(+)6.9	0.2	0.0	20
説・論・主義	3075	0.9	(-)2.0	0.0	0.4	0.3	0.3	0.1	(-)3.2	(+)3.5	23
原理・規則	3080	(-)4.1	(-)1.3	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	<u>(+)50.6</u>	8
制度・慣例	3082	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	(+)17.0	2
計画・案	3084	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(+)8.5	1
見る	3091	0.0	1.0	0.2	0.1	0.1	<u>(+)57.2</u>	0.0	0.0	0.6	6
見せる	3092	(+)20.3	(-)3.6	(-)3.1	0.3	(-)1.1	0.9	0.4	(-)9.0	(-)4.0	78
聞く・味わう	3093	(-)14.8	(-)2.5	0.4	0.5	0.7	<u>(+)360.1</u>	(+)1.6	(+)18.3	(-)1.9	53
その他		(-)49.2	(+)29.2	(+)31.5	(+)23.8	1.0	(+)16.0	(+)87.7	0.0	0.0	993
総用例数		3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340

表 4: 否定的感情／肯定的感情の別による用例数

	項目	語例	なの では か	だ ら う	か も し れ な い	に ち が い な い	よ う だ	ほ う が い い	な ら な い ば な け ら ば
否定的	3012	恐れる・恐怖	44	0	7	0	1	0	2
	3013	心配する・不安だ	293	4	17	0	0	0	0
	3014	嘆く・悲観する	4	0	2	0	0	0	0
	3021	不信感	2	0	0	0	0	0	0
(小計)			343	4	26	0	1	0	2
(割合)			90.0%	14.3%	70.3%	—	—	—	—
肯定的	3013	安心する・安堵する	0	9	0	0	2	0	0
	3042	期待する・希望	38	15	11	1	0	2	2
	(小計)			38	24	11	1	2	2
(割合)			10.0%	85.7%	29.7%	—	—	—	—
合計			381	28	37	1	3	2	4

表 4 からわかるのは、〈のではないか〉〈かもしれない〉において否定的感情を表す語の現れる割合が高く、一方で〈だろう〉においては肯定的感情を表す語との共起例の方が多く、という違いである（〈にちがいない〉〈ようだ〉〈ほうがいい〉の用例も得られたが、割合を問題にできるほどの用例数が得られなかった。強いて言えばどの形式も肯定的感情の語との共起例の方が多く）。これら 3 形式は、肯定的・否定的双方の共起例が認められ、どちらかが非文法的となるわけではないが、片一方と強く結び付いていると判断できる。結び付きが強いと判断されたものが (5) から (7) の例であるが、一方で (8) から (10) のような結び付きも決して非文法的だというわけではない。

- (5) 既婚の友人がパソコンやプリンターを使いに来ることが多いのですが、浮気と誤解されるのではないかと私の母親が心配しています。（Yahoo! 知恵袋）

【〈のではないか〉・否定的】

- (6) そんなとき、好都合にも夫が殺害された。夫を殺す動機があることから疑われるかもしれないと、妻は不安になる。（笹沢左保「水木警部補の敗北」）

【〈かもしれない〉・否定的】

- (7) こうして F 運送会社から百億、M 商事から五十億の手形が松浦の手に渡された。そうして二週間後には換金されるだろうと期待していた。（梁石日「裏と表」）

【〈だろう〉・肯定的】

- (8) 行介が涙を拭いた時、三紗は彼がプロポーズするのではないかと期待を持った。プロポーズされたとしても、それを受け入れる気はなかった。（平岩弓枝「白い序章」）

【〈のではないか〉・肯定的】

- (9) なお、そうなると思いたまわないでほしいが、私どもは、いまの調子でうんとうまくいくと、腸のしめつけがなくなって、鼻の管がとれるようになるかもしれないという希望を持ち始めている。(伊藤栄樹「人は死ねばゴミになる」)

【〈かもしれない〉・肯定的】

- (10) 「コンコルドがもうすぐ見えます。しばらく停車することにします」。乗客の中には急いでいる人もいるだろうと私は心配した。しかし皆は空を眺め、飛行機が姿を見せると一斉に拍手をして歓声をあげた。(土田英生「自家中毒」)

【〈だろう〉・否定的】

これまでのモダリティ研究において、「認識内容について、話し手が好悪どちらの感情を抱くのかによって選択される形式が異なる」という指摘は管見の限り認められない。「話し手の感情」はそこで表されている内容だけを基に判断するのは簡単なことではないが、ここで論じたような主節述部・被修飾名詞を判断基準にすれば、その内容が好ましいのか望ましくないのかを明らかにできる。この点で、本研究の採った方法の利点を生かすことができたと言える。その結果得たデータも、〈のではないか〉〈かもしれない〉と〈だろう〉の間の違いを、かなり明確に示すものとなった。

4.2.3. モダリティ形式と「思考・意見・疑い」との共起

この節では多くの形式において最も多い用例数を得た"3061"「思考・意見・疑い」について取り上げる。ここでも最下位の分類である「段落」を用いて、その用例数および語の種類の高がりについて確認する。

各モダリティ形式と共起する主節述部・被修飾名詞について、表 5 に『分類語彙表』における「体」、すなわち名詞類の用例数を、表 6 に「用」すなわち動詞類の用例を示す¹⁶。なお、"3061"「思考・意見・疑い」に対する「相」つまり形容詞類の分類は『分類語彙表』では設定されていない。共起する語の例は二例ずつ挙げたが、一つしか示されていないものは、該当する例としてその語の例しか得られなかったことを表す。

表 5、表 6 に示したように、名詞類、動詞類ともに〈のではないか〉の用例が多く、なおかつ共起する語の「段落」の種類も最も多い。このような偏りは先に見た表 2 と共通するものである。しかし、やはりこれらのデータにおいても、統計的に特徴的な項目を調査すると〈のではないか〉だけが顕著な値を示すわけではなく、先の表 3 と同様の結果となった。表 7 には名詞類・動詞類をまとめて、表 3 と同様の計算を行った結果を示す。

¹⁶ 段落の番号は動詞類・名詞類で共通していないのでここでは別の表にして示した。なお、動詞類の語例に「意見がある」が挙げられるように、すべての例が「名詞」「動詞」の例だというわけではない。ここでは『分類語彙表』に挙げられているままの分類を用いている。

表 5: “3061”「思考・意見・疑い」の用例【名詞類】

段落	語例	ないでは	だろう	れかも ないし	はずだ	いにち ないが	らしい	ようだ	い ほうが	なけれ ば	合計
01	思い 思惑	15	5	4	1	1				2	28
03	構想 発想	21	5	3	5				2	4	40
04	感想	1									1
05	強迫観念	2								1	3
07	考え 思考	6	7		2				7	7	29
10	発案	1									1
11	意見 見解	43	7				1		12	3	66
13	先入観					1				1	2
16	確信 信念		2		5				2	4	13
17	疑い 疑念	49									49
合計		138	26	7	13	2	1	0	23	22	232

表 6: “3061”「思考・意見・疑い」の用例【動詞類】

段落	語例	ないでは	だろう	れかも ないし	はずだ	いにち ないが	らしい	ようだ	い ほうが	なけれ ば	合計
01	思う	1805	635	101	64	42	4	4	781	259	3695
02	念頭に置く 思い込む	1		1					1		3
03	思い付く	5	1								6
06	考える 思案する	409	91	24	17	10	1		31	103	686
08	考え直す 思い巡らす		3	2			1		1	1	8
11	意見がある	16									16
12	確信する 思い込む	4	11		10	9	1			1	36
13	疑う 恐れがある	42		1				1			44
合計		2282	741	129	91	61	7	5	814	364	4494

表 7: 「思考・意見・疑い」における、期待値と観測値とのずれの度合い

段落	語例	ないでは	だろう	れかも ないし	はずだ	いにち ないが	らしい	ようだ	い ほうが	なけれ ば	用例数
01	思い 思惑	0.0	0.0	(+)7.4	0.2	1.0	0.3	0.2	(-)3.9	0.2	28
03	構想 発想	0.0	0.4	(+)1.2	<u>(+)18.2</u>	0.6	0.4	0.2	(-)2.3	0.0	40
04	感想	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
05	強迫観念	0.1	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	(+)1.8	3
07	考え 思考	(-)5.2	(+)1.1	(-)1.2	(+)2.7	0.4	0.3	0.2	(+)2.2	(+)6.4	29
10	発案	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
11	意見 見解	(+)2.7	(-)1.3	(-)2.6	(-)1.5	0.9	0.1	0.4	0.9	(-)1.8	66
13	先入観	(-)1.0	0.3	0.1	0.0	<u>(+)34.4</u>	0.0	0.0	0.3	(+)3.4	2

段落	語例	ない のでは か	だ らう	れ か も し ない	は ず だ	い に ち が ない	ら しい	よ う だ	い い ほう が	な ら な け ら ば ない	用例 数
16	確信 信念	(-)6.6	0.0	0.5	<u>(+)74.3</u>	0.2	0.1	0.1	0.0	(+)6.1	13
17	疑い 疑念	<u>(+)23.3</u>	(-)8.0	(-)2.0	(-)1.1	0.7	0.5	0.3	(-)6.8	(-)4.7	49
01	思う	(-)2.8	(+)1.6	<u>(-)14.7</u>	(-)5.0	(-)1.5	<u>(-)32.7</u>	<u>(-)13.9</u>	<u>(+)137.4</u>	<u>(-)25.7</u>	3695
02	念頭に置 く 思い込む	0.2	0.5	(+)6.5	0.1	0.0	0.0	0.0	0.8	0.3	3
03	思い付く	(+)1.2	0.0	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0	0.8	0.6	6
06	考える 思案する	(+)10.5	(-)4.0	0.4	0.1	0.0	(-)5.6	(-)3.9	<u>(-)43.7</u>	<u>(+)21.0</u>	686
08	考え直す 思い巡ら す	(-)4.1	(+)2.2	(+)8.8	0.2	0.1	(+)9.6	0.0	0.0	0.1	8
11	意見があ る	(+)7.6	(-)2.6	0.6	0.4	0.2	0.2	0.1	(-)2.2	(-)1.5	16
12	確信する 思い込む	<u>(-)11.2</u>	(+)4.5	(-)1.4	<u>(+)102.2</u>	<u>(+)146.0</u>	0.9	0.2	(-)5.0	(-)1.7	36
13	疑う 恐れが ある	<u>(+)17.3</u>	(-)7.2	0.3	(-)1.0	0.6	0.5	(+)2.2	(-)6.1	(-)4.2	44
--	"3061" 以外全て	0.3	0.1	(+)26.6	0.3	0.1	(+)66.4	(+)32.5	(-)87.3	(+)18.1	2614
全用例数		3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340

表 7 からは、表 5、表 6 中、最も大きな用例数となる動詞類"01"の段落 (すなわち「思う」) と〈のではないか〉の共起例 (例 (11) - (13)) も、統計的には特に偏った結果ではないことがわかる。もちろんこれは、「意味が無い共起例」であることを表すのではない。コーパスにおいて最も高い頻度で現れるということは、「用いられやすさ」という点では最も顕著な共起例だと考えることができる。

(11) これらを古い製品と入れ替えるだけでも火災対策の前進につながる。ある程度の強制も含め、国が指導して推し進める必要があるのではないかと思う。
(野口昌之「家長の地震考」)

(12) 「十二月十七日の航空券を押さえてある」とぼくは言った。

「わたしの誕生日？」

「なんとなく縁起がいいんじゃないかと思ってさ」

彼女は微笑み、弱々しい声で「ありがとう」と言った。(片山恭一「世界の中心で、愛をさけぶ」)

- (13) 「わかってくれ...あの子はヒステリー状態だった。実際、あの日の彼女を見たときは、二度と正気に戻らないんじゃないかと思ったくらいだ」彼はかぶりを振り、ため息をついた。 (平江まゆみ「スウィート・ベイビー」)

さてこの「思う」との共起例において、〈のではないか〉とは異なり、統計的に顕著な値を示す形式が存在する。次のような〈ほうがいい〉と「思う」の共起は特に顕著な値であることが表 7 には表されている。

- (14) 「どうかしたのかい」
山上が問い返すと、「私たち、いまはなんの不安もないけれど、人生、一寸先は闇と言うでしょう。将来の保障を考えておいた方がいいとおもうんだけど」
山上は茜の言葉の含む意味がつかめなかった。 (森村誠一「マリッジ」)
- (15) したがって、私は、これらについても、押出しファイリングに入れて、「ポケット一つ原則」を貫くほうがよいと思う。ただし、封筒の色で区別する。要返信などの「すぐやるファイル」は、赤い封筒に入れて、頻繁にチェックする。これは、すぐに習慣になる。 (野口悠紀雄「超」整理法)

ここでさらに用例を確認すると、この結果には特定のコーパスジャンルが関係していることが明らかになった。というのも、〈ほうがいい〉と「思う」の共起例は、下に示すような Yahoo!知恵袋の用例が 664 例と突出しており、国会会議録での 30 例、書籍・白書の 87 例と比べ非常に多くなっているからである。これは、〈なければならぬ〉と「思う」の共起例が国会会議録では 188 例ある一方で、書籍・白書では 58 例、さらに Yahoo!知恵袋では 13 例に過ぎないという結果と非常に対照的な数値である。

- (16) (立ちくらしがひどい、という相談で) 脳の病気や耳の病気でも生じます。さまざまな病気が考えられますので精密検査を受けた方が良いと思います。
(Yahoo!知恵袋)
- (17) (俳優になるための方法に回答して) 劇団には養成所があるところも多いですから、そこで演技について学ぶのが良いと思います。俳優といっても、舞台、テレビ、映画などいろいろ活躍の場があるわけで、自分がどんな俳優になりたいのかによって、所属する劇団を選んだ方が良いと思いますよ。
(Yahoo!知恵袋)
- (18) (質問：) 薬を飲んだ 3 時間くらい後に、嘔吐したんですが、薬飲んだ意味なくなってしまうますか？
(回答：) (略) でも、飲んだお薬が胃薬でないのなら、今飲んでも胃に負担を掛けるだけなので指示通りの間隔を守った方が良いとも思います。
(Yahoo!知恵袋)

Yahoo!知恵袋は、投稿者の設定した質問に対して回答者が案を述べる形になってい

るが、基本的には質問者も回答者も一般の読者である。その結果、回答も、当該の分野の第一人者が回答するというよりも、似たような経験を持つ人間からの、アドバイスとしての回答が多くなるようである。アドバイスとして、ということから、「～しなさい。」や「～ほうがいい。」と断言する表現よりも、あくまで個人的感想であることを「と思う」を付け加えて表すことが多くなるのではないかと考えられる。

この説明はあくまで解釈の一つに過ぎないが、〈ほうがいい〉と「思う」の共起の度合いの強さに Yahoo!知恵袋の用例が大きな影響を与えていることは間違いない。今回、他の項目ではジャンル別の傾向などは確認していないが、共起の組み合わせによっては、特定のジャンルに出現が偏るということは十分予想される。またこれは、必ずしもモダリティ形式と主節述部が共起する場合だけではなく、モダリティ形式の出現全体においても、考慮すべき問題かと思われる。ただ、本研究の主目的からは外れるので、詳細は他の機会に譲りたい。

次に、「証拠性」の〈らしい〉〈ようだ〉と「思う」の共起について確認する。表 7 において (-) が付き、期待値とのずれも上位 15 項目に入っていることから、この 2 つの形式と「思う」の共起例は他に比べて顕著に少ないと言える。統計的な分析に加えて、引用節内に出現する全用例数に占める、「思う」との共起例の割合を見てもその点は明らかである。

表 8: 全用例に対する「思う」との共起例の割合

	な の い で か は	だ ろ う	れ か な い し	は ず だ	い に ち が い	ら し い	よ う だ	い う が い い	な ら な け ら ば	用 例 数
「思う」との共起例	1805	635	101	64	42	<u>4</u>	<u>4</u>	781	259	3695
全体例	3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340
割合	48.4%	53.0%	34.5%	38.1%	41.6%	<u>5.0%</u>	<u>9.5%</u>	76.3%	36.8%	100.0%

既に表 1 において、〈らしい〉〈ようだ〉は全体的に見ても用例数が少ないことを確認したが、この結果には特に「思う」との共起例が少ないことが影響していると考えられる。

〈らしい〉〈ようだ〉など「証拠性」を表す形式については、宮崎 (2002: 144) が例と共に、次のような説明を加えている。

〈可能性・必然性〉と〈証拠性〉の対立の基本は、話し手の内的思考による認識であるか、外的状況の観察に基づいた認識であるか、ということにある。純粋に話し手の内的思考として文を述べることができるか否かということは、仮定条件の帰結として使用できるか否か、「と思う」による思考内容化が可能か否か、というテストによって確認できる。

(59) 雨がひどいので、試合は中止に{なるかもしれない／なるにちがいない／?なるはずだ／*なるようだ／*なるみたいだ／*なるらしい／*なりそうだ／*なるそうだ}と思う。

(宮崎 2002: 144 例番号・文法性判断は宮崎 (2002) による)

宮崎 (2002) の文法性判断は、「と思う」のように、発話時時点の話し手の判断を表す場合のことを述べており、必ずしもすべての「思考内容化」を除外しているわけではない。実際に、次のように発話時時点の判断を表していない例であれば、使用例が認められる。

- (19) 石津は、飛び出して来たのが、もうかなり年輩で、おそらくは六十歳を過ぎているらしいと思ったが、その手に、光った刃物が握られているのを見て、ギョッとした。(赤川次郎「三毛猫ホームズの騒霊騒動」)
- (20) 村井氏は、大仰な身ぶりを混えて話した。(中略) また躁状態に入ったようだ、と私は思った。(内海隆一郎「蟹の町」)

しかしながら、〈らしい〉〈ようだ〉が、「(話し手が) ～と思う」という形の引用節で用いられた例は今回の調査でも得られなかった。「思う」との共起例の少なさは、「発話時時点の話し手の判断」を表す「思う」などと共起しにくいという点に求めることができる。

「思考・意見・疑い」に該当する語のほとんどは、「意見」「発想」や「思う」「考える」のように、思考内容がどのようなものであるかをあまり限定せずに表現する語であった。しかし、「思考・意見・疑い」内には、その意味では他と異なる語群が存在する。項目名にもある「疑い」を表すものである。「思考・意見・疑い」の下位にある段落を確認すると、「疑い」や「疑う」を含むのは名詞における"17"、動詞における"13"の段落である。先の表 7 に示したように、この二つの段落と共起するもので、用例数が期待値よりも多く、特徴的だと言えるのは〈のではないか〉のみであった。実際、該当する用例を抽出すると、〈のではないか〉においては名詞の「疑い」「疑心暗鬼」「疑念」「疑問」「疑惑」「半信半疑」「猜疑心」、動詞の「勘ぐる」「疑う」「恐れがある」と、異なり語数で 10 語、延べで 91 例の共起例が認められるのに対し、他に得られたのは〈かもしれない〉における「疑う」との共起例 1 例のみという偏りが認められた。

- (21) あなたがこの本をつまみ食的に読むなら、もしかしたら本当に著者が言いたいことは理解できていないのではないかと、という疑念に悩まされることになる。(山田祐輔「逆 18 禁」)
- (22) 初め、野々宮が何かを企んで出鱈目を言っているのではないかと疑ったが、それなら彼が自分と森本の間を知っているわけがない。(深谷忠記「指宿・桜島殺人ライン」)
- (23) 内容によって違いはありますが、身近な対象者ならどこまで気付いているのかに留意しましょう。
- ・探られているかも知れない、と疑っている段階か
 - ・探偵らしき人が探っている、とわかってしまったか
 - ・依頼主までわかってしまったか (児玉道尚「探偵社・興信所の選び方と頼み方」)

この点に関しては、既に先行研究で「「～ト疑ウ」の場合、最も頻ばんに引用句内部に出てくるのが「～デハナイカ」という文末形式である(藤田 2000: 244)」という指摘があるが、今回の調査で、「疑う」に限らず、類似した意味で用いられる語と共起するモダリティ形式は専ら〈のではないか〉に偏ることが実証できた。

4.2.4. 〈らしい〉と「聞く」の共起

「認識のモダリティ」の諸形式の内、表 3 で〈のではないか〉以外に顕著な値を示す箇所が多いのは〈らしい〉であった。ここでは〈らしい〉について取り上げる。

表 3 からは、〈らしい〉に特徴的な結果の一つとして〈らしい〉と"3093"「聞く・味わう」との共起例が挙げられることがわかる。表で (+) を付したように、この共起において、期待値よりも実際に得られた用例数はかなり多い。以下に実際の例を挙げる。

- (24) 彼が死んでから、刑事さんに、森さんは、あなたと結婚したいと思っていたらしいときいて、なんで、それを生きてる間にいってくれなかったのかと思ったくらいよ。(山村美紗「失恋地帯」)
- (25) 嵐龍三郎先生がまんぼう塾をやめようかと思っていると聞いて、誠は田中先生が学校をやめるらしいと聞いたときの百倍もおどろいた。(斉藤洋「まんぼう塾物語」)
- (26) 「手術で、ある程度治るんですよね？」
「ええ。当たり外れはあるみたいですが、手術するだけの価値はあるみたいですね。まったく普通の状態に復帰した事例も多々あります。最初、手術で治るらしいと聞いた時には、夫婦して小躍りして喜びましたよ。(大石英司「新世紀日米大戦」)

〈らしい〉と共起する"3093"「聞く・味わう」の例は全てが「聞く」の例であった¹⁷。「出席者の話によれば、会は無事に済んだらしい」などの、「伝聞用法¹⁸」を〈らしい〉が持っていることを考えると、同じく伝聞したことを表す「聞く」と〈らしい〉との共起は極めて自然な結果のようにも思われる。しかしながら、もし〈らしい〉が他者からの伝聞を表し、それと共起する「聞く」も同様の伝聞を表すのだとすると、どちらかが余剰なものになるはずである。その場合には、以下に図示するように、〈らしい〉だけ、あるいは「と聞く」のどちらかを用いるだけで表現できるからである。図では太い矢印で「伝聞」が発生したタイミングを、細い点線の矢印でどの「伝聞」を言語化しているのかを示した。

¹⁷ ここで論じる「聞く」には、「尋ねる」という意味での「聞く」は含めていない。「聞く」は『分類語彙表』でも多義語として扱われているため、文脈上「尋ねる」の意味だと判断できるものは"3132"「問答」の例として扱っている。

¹⁸ 日本語記述文法研究会(2003)などは、「電源が入らない。壊れたらしい」のような「推定」とこの「伝聞」は、「どのような証拠に基づくか」の点だけが異なるものであるため、統一的に扱えると論じている。

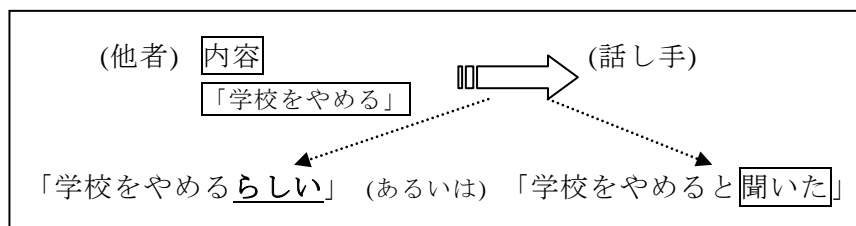


図 1: 「学校をやめる」と伝聞した場合

従って、(24) から (26) の例は、話し手が伝聞した内容がそもそも「～らしい」を含むものであったことを表していることになる。つまり、話し手にその内容を伝えた人間にとってもまた、その内容は別の人間から聞いた伝聞内容であった、という解釈になる¹⁹。

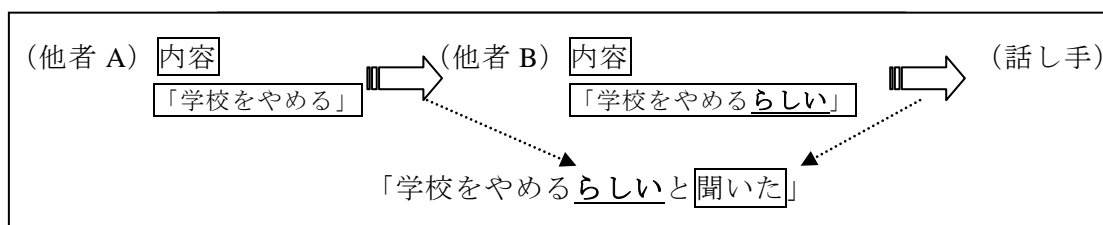


図 2: 「学校をやめるらしい」と伝聞した場合

上の例は、文字通り解釈するのならば全て図 2 と同じような状況を言語化したものであるはずだということになる。しかしながら、図に示したように、〈らしい〉と、「聞く」が言語化する「伝聞」がそれぞれ異なるタイミングの（つまり発話者が異なる）ものを表しているのであれば、〈らしい〉と「聞く」の間に直接の関係は成立しないことになる（他者 B が他者 A から何かを聞いたことが、話し手が他者 B から何かを聞くという事態に影響を与えるとは考えられないからである）。となると、〈らしい〉と「聞く」の共起が顕著に発生していることを説明することができない。

さて、次のような例での伝聞はどのようになっているだろうか。

- (27) (髪を乾かす時間についての返答) 私も肩くらいの長さで、乾かす時間はだいたい 3～5 分くらいでしょうか。私の場合は、先に根元を乾かしてから、その後に毛先の方を乾かします。そのほうが髪に良いらしいと聞いたので。
(Yahoo!知恵袋)
- (28) 子供がカブトムシの幼虫をもらってきました。かなりデカイ幼虫なのですが幅 28 センチ奥行き 15.5 センチの水槽に 5 匹入れています。もっと広い水槽を買った方がいいのでしょうか？共食いをするらしいと聞いてちょっと心配になってきました。 (Yahoo!知恵袋)

¹⁹ ここでは図でいう「他者 B」が述べる内容を伝聞したのではなく、他の証拠に基づいて「推定」した、という解釈も成立するはずであるが、ここでは考慮しないでおく（実際、上に示した例の中でも、たとえば例 (27) では、「森さん」が死んでいるという文脈があるため「伝聞」よりも「推定」の解釈が優先されるだろう）。

- (29) (手の爪の白い線について) 空気が入るとなるらしいとは聞いたことがあります。何らかの病気とか、体が弱っているとなるときもあるらしいです。私も子供の頃、手の指全部がそうだったことがありました。 (Yahoo!知恵袋)

これらの例では話し手が聞いた内容が「髪に良いらしい」「共食いをするらしい」「空気が入るとなるらしい」であったことが必ずしも必須条件とはなっていないようである。特に最後の例では、後続の文では「らしいと聞く」ではなく「らしいです」だけで文が終わっており、どちらも実は単一の「伝聞」を表している可能性が高い。つまり、次の図に示すように、同じ発話者から伝聞したという内容が、〈らしい〉と「聞く」の両方で表されているという解釈である。

例文を見ると、こういった解釈は上に見たような Yahoo!知恵袋からの用例でのみ可能だと思われ、これが話し言葉における用い方の現れである可能性もある。ただ、用例が現時点では充分には集まっていないため、実際の話し言葉の確認なども含め、詳細については今後の課題としたい。従って、下の図に示すような状況は、現時点ではその可能性を指摘するにとどめる。

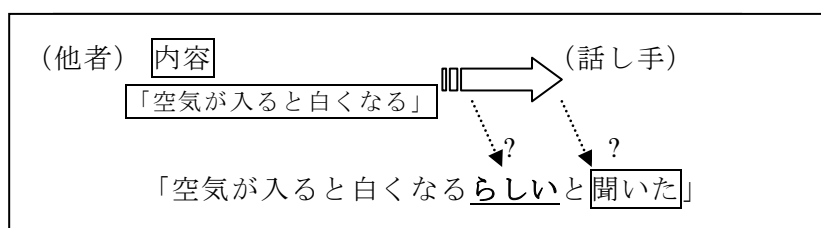


図 3: 単一の伝聞が〈らしい〉と「聞く」によって言語化される場合

4.2.5. 〈らしい〉と「注意・認知・了解」の共起

引き続き、この節でも〈らしい〉に認められた特徴を論じる。

"3062"「注意・認知・了解」は、表 2 に示した用例数の分布からはやはり〈のではないか〉との共起例が最も多いのだが、表 3 では、統計的に顕著なのはむしろ〈らしい〉との共起例だという結果になっている。つまり、〈らしい〉においては、予想されるよりもかなり高い度合いで「注意・認知・了解」に当たる語との共起が認められたわけである。この結果に基づき、「注意・認知・了解」が共起する例を確認すると、次のような〈らしい〉と「わかる」の共起が特徴的であることがわかる。

- (30) 食事はバイキングのシステムで、洋酒のメーカーがスポンサーになっているらしいとわかった。(阿刀田高「Vの悲劇」)
- (31) 栗子は呆れて両親を見ていた。もはや、誰が悪いとか、どこに責任があるとか、そういう問題ではなくなっているらしい、ということだけは分かった。(乃南アサ「パラダイス・サーティーン」)

他の形式も含め、「わかる」との共起数を見ると次のような結果となる。〈らしい〉の「注意・認知・了解」との共起例 22 例のうち 15 例が「わかる」との共起である。

表 9: 「わかる」の用例数と割合

	ない のでは か	だ らう	れ か も し	は ず だ	い に ち が	ら し い	よ う だ	い ほ う が	な ら な い ば	な け れ ば な ら な い	合 計
「わかる」	1	8	1	1	0	15	1	0	1	28	
"3062"全体	58	16	9	4	5	22	1	0	20	135	
「わかる」 の割合	1.7%	50.0%	11.1%	25.0%	0.0%	68.2%	100.0%	--	5.0%	20.7%	

〈らしい〉は「認識のモダリティ」の中でも「証拠性」を表す形式である。つまり、〈らしい〉を用いた場合、話し手の認識は単なる想像によってではなく何らかの証拠に基づいた判断であることが表されるわけである。外部に何らかの証拠がある分、話し手にとってのその判断は確実性が高いもの（つまり、「わかる」と言えるほどの判断）として捉えられるために、〈らしい〉と「わかる」の共起が特徴的な結果となる、と説明することができるかもしれない。

ただ、同じ「証拠性」を表すにもかかわらず〈ようだ〉と「わかる」の共起は、表 2、表 3 どちらにおいても取り立てて目立つ結果とはなっていない。また、〈らしい〉がそれ以外の形式に比べて「話し手の確信度が高いことを表す」と判断できるようなその他の現象も特に認められない。従って現時点では〈らしい〉と「わかる」の共起について確実な理由を設定することができない。ここではその現象の指摘にとどめ、理由についてはまた今後考察することにした。

4.2.6. 〈なければならぬ〉と「決心・解決・決定・迷い」との共起

表 3 におけるカイ二乗値で最も大きな値は、次のような〈なければならぬ〉と"3067"「決心・解決・決定・迷い」の共起例である（これは期待値よりも実際に得られた用例数が多かったものである）。他の形式との共起例がほとんど無い中で〈なければならぬ〉とだけ 137 例共起していたことがこの結果をもたらしている。「決心・解決・決定・迷い」にあたる語の内、特に〈なければならぬ〉との共起例が多く見られたのは次のような例である。

- (32) 第八条「透明性の確保」は「個人情報の取扱いに当たっては、本人が適切に関与し得るよう配慮されなければならない」と規定している。（櫻井よしこ「日本の論点」）
- (33) 憲法 24 条 1 項は、「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。」と定めています。（本橋美智子「Q&A これぞ安心高齢者の財産管理」）

これらの例では、〈なければならぬ〉が話し手の心的態度を表さず、「客観世界の秩序、しくみ、事情などのあり方として（高梨（2002: 94））」事態の必要性を述べるのに用いられている。このような用法は、「{規則では／法律では}～なければならない。」

などの表現の他に、上の例のような主節述部を用いることによっても明示されうる。〈なければならない〉における「決心・解決・決定・迷い」の多用には、話し手からの要請としてではなく、それが客観的必要性に基づいて求められていることを明示するために用いられることが影響しているものと考えられることができる。

一方、〈ほうがいい〉には客観的必要性を表す用法は無い(宮崎他 2002: 96)。「決心・解決・決定・迷い」と〈ほうがいい〉の共起例が「～ほうがいいという結論」という、規定・規則と関連しない語との共起例 1 例のみであった点に、〈なければならない〉〈ほうがいい〉間の違いが現れていると考えられる。

以上、本節では、引用節内のモダリティ形式の違いが、思考・感情に関わる主節述部・名詞との共起しやすさ、しにくさに影響を与えていると判断できる例を確認した。

4.3. 表現に関わる述部・名詞の用例分析

次に、主節述部・名詞が、表現に関わるものの用例について考察する。表 10 に、該当する用例数を示す。表 11 には期待値と観測値とのずれをまとめた。

本節で扱う主節述部・名詞は、モダリティ形式の意味を直接反映してはいないように思われる例も多い。例えば、全形式に共通して認められる"3100"「言語活動」の中で最も多く用いられていた「言う」は、単に発話を行うことを表すだけである。各モダリティ形式も言語形式の一つである以上、それらを用いた引用節と、「言う」などの語との間の共起しやすさ・しにくさに、何らかの意味的理由が設定できるとは考えにくい²⁰。一方で、表現の様態・機能を細分化して表す語が用いられた場合には、各モダリティ形式との共起のしやすさに、モダリティ形式の意味が影響をあたえる場合も考えられる。本節では、モダリティ形式の意味が影響を与えると思われる用例について確認する。

²⁰ 従って、表 11 の"3100"にみられるような統計的分析結果の違いは、各モダリティ形式の意味が積極的に関与した結果ではなく、「言う」などよりもより細かい意味を表し分ける表現との共起が多ければ、「言う」などとの共起が相対的に少なくなる、逆に意味を細かく表す語とあまり共起しなければ相対的に「言う」などとの共起頻度が高くなる、という関係にあるものだと考えられる。

表 10: 表現を表す主節述部・名詞の用例数

項目分類 項目名	項目 番号	語例	ない のでは か	だ ろう	か も し ない	に ち が い ない	は ず だ	ら しい	よ う だ	ほ う が い い	な ら な い ば な け れ ば
言語活動	3100	言う・発言する	181	142	44	5	30	11	13	94	36
表現	3103	表明する・表現	2								2
叙述	3104	述べる・記述する	4	10	3	1	4		1	3	6
通信	3122	送る・メール								2	
伝達・報知	3123	噂する・報告	18	5	8	2		8	3		1
話・談話	3131	話す・語る	24	18	7		1	3	3	8	3
問答	3132	質問する・尋ねる	45	16	5		2	1	1	8	3
会議・論議	3133	議論・反論する	21	1			1		1		3
言論	3134	論じる	3								
批評・弁解	3135	批判する・非難する	22				1				
説明	3136	説明する・説く	2	2			1		1		2
宣告・宣言 ・発表	3140	言い聞かせる・宣告する		2						1	4
報告・申告	3141	提案する・証言	7	1			3		1	2	
評判	3142	風評		1							
読み	3150	読む						1		1	
書き	3151	書く・ある	1	7	2	1	1	1	2	4	24
文章	3154	記事・条文	2						1		1
合計			332	205	69	9	44	25	27	123	85

表 11: 表現を表す語の例における期待値と観測値とのずれ

項目名 分類	番号目	語例	ないで かは	だ らう	れか も し ない	はず だ	いに ちが ない	ら しい	よ う だ	い ほう が いい	な ら な い ば な け ら ば	用 例 数
言語活動	3100	言う・発言する	<u>(-)36.5</u>	<u>(+)28.8</u>	<u>(+)21.4</u>	(-)4.7	<u>(+)65.3</u>	(+)4.0	<u>(+)30.3</u>	(+)3.5	(-)5.6	556
表現	3103	表明する・表現	0.0	0.7	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.6	(+)6.8	4
叙述	3104	述べる・記述する	(-)9.2	(+)4.4	(+)2.3	0.1	<u>(+)28.8</u>	0.3	(+)3.6	0.5	(+)2.8	32
通信	3122	送る・メール	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	(+)10.6	0.2	0.2	2
伝達・報知	3123	噂する・報告	1.0	0.8	<u>(+)21.4</u>	0.9	0.6	<u>(+)115.0</u>	<u>(+)29.2</u>	(-)6.3	(-)2.5	45
話・談話	3131	話す・語る	(-)3.0	(+)4.5	(+)7.0	(-)1.5	0.0	(+)7.1	(+)17.9	0.2	(-)1.8	67
問答	3132	質問する・尋ねる	0.4	0.6	1.0	(-)1.9	0.7	0.0	0.6	1.0	(-)2.9	81
会議・論議	3133	議論・反論する	(+)3.9	(-)2.6	(-)1.1	0.6	(+)1.1	0.3	(+)4.6	(-)3.8	0.1	27
言論	3134	論じる	1.4	0.5	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	3
批評・弁解	3135	批判する・非難する	(+)9.1	(-)3.8	0.9	0.5	(+)1.5	0.3	0.1	(-)3.2	(-)2.2	23
説明	3136	説明する・説く	1.0	0.4	0.3	0.2	(+)7.2	0.1	<u>(+)19.9</u>	(-)1.1	(+)2.0	8
宣告・宣言・発表	3140	言い聞かせる・宣告する	(-)3.6	0.6	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	(+)16.5	7
報告・申告	3141	提案する・証言	0.0	0.7	0.6	0.3	<u>(+)40.9</u>	0.2	(+)10.6	0.0	(-)1.3	14
評判	3142	風評	0.5	(+)4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1
読み	3150	読む	1.0	0.3	0.1	0.0	0.0	<u>(+)43.9</u>	0.0	(+)1.9	0.2	2
書き	3151	書く・ある	<u>(-)19.9</u>	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	(+)12.5	0.7	<u>(+)95.8</u>	43
文章	3154	記事・条文	0.0	0.7	0.2	0.1	0.1	0.0	<u>(+)41.7</u>	0.6	1.0	4
		その他	(+)5.6	(-)2.9	(-)4.1	1.0	(-)11.1	(-)3.2	(-)12.9	0.0	0.0	6421
		全用例数	3730	1199	293	168	101	80	42	1023	704	7340

まず、「3132」の「問答」の例を確認する。「問答」全体では特定のモダリティ形式との顕著な関係性は読み取れないが、その内部ではかなり偏りが認められた。「問答」の各語を、聞き手へ質問する意味のもの（"02~04"）と、返答を意味するもの（"05"以降）の段落別に分け²¹、それぞれの用例数を示す。

表 12: "3132"「問答」中の段落別用例数

	な の い で か は	だ ろ う	れ か な い し	は ず だ	い に ち が い	ら し い	よ う だ	ほ う い が	な ら な け ら な い ば
質問類 ("02-04"の段落)	33	3	2	0	0	0	0	0	1
返答類 ("05-"の段落)	11	13	3	2	0	1	1	8	2
合計	44	16	5	2	0	1	1	8	3

表に見られるように、ほとんどの形式において (34) のように返答を意味するものが多数を占めるのに対し、〈のではないか〉においては返答を意味する (35) のような例よりも、(36) など質問の類の用例の方が多い。割合は小さいが、〈だろう〉においても、(37) など、質問類の語との共起例が認められる²²。

- (34) 外国産のカブトの♂と日本産のカブトの♀との間に子どもは誕生しますか？と質問した者です。生まれるらしいとの回答を得たのですが、その場合はお父さん似？お母さん似？ (Yahoo!知恵袋) 【返答】
- (35) 友人代表として弔辞を読むようにといわれたとき、ぼくが読んで、舟橋君が化けて出てくるのではないかと答えたが、だから是非私に読んでほしいという今日出海君の希望であったと聞いた。(丸谷才一・丹羽文雄「友を偲ぶ」) 【返答】
- (36) それで、中元の時季に、野沢とトラブルがあったのではないかと質問したのですが、まったく覚えがないという答えでした。(佐野洋「殺人買います」) 【質問】
- (37) その子の友達に「彼モテるでしょう？」と尋ねると、全然モテないしチョコをくれる女の子もいないそうです。(Yahoo!知恵袋) 【質問】

先行研究において、〈のではないか〉に聞き手からの情報を求める用法があり、〈だろう〉に「確認要求」の用法があることが指摘されている。上の表に示した、「問答」に関わる主

²¹ "01"の段落は、「自問自答する」という、双方向性のある語で、〈のではないか〉のみに認められた。

²² 他に、〈かもしれない〉〈なければならない〉にも質問を意味するものとの共起例が認められたが、次の例のように、その形式の使用だけで質問を表せるとは考えにくいものであった。この例は、「さわったかもしれない(のか?)」という意味で、上昇調などが併用される環境だと思われる。

さらにまた飯野源治証人は、つづいて「その後あなたが現場に行ってから第九の写真を撮るまでの間に警察官はだれも時計にさわっていませんか」と中田弁護人に問われて、「私はさわっていませんが、だれもさわっていないとは断言できかねます。確認の意味もありますから」と答え、「さわったかもしれない」とついで問われて、「はい」と答えるのである。(野間宏「狭山裁判」)

節述部・名詞の現れ方の違いによっても、「認識のモダリティ」に該当する形式の内〈のではないか〉〈だろう〉だけに「質問」系統の機能があることが確認された。

次に、「3135」の「批評・弁解」について確認する。コーパスからは〈はずだ〉の1例を除き〈のではないか〉の例のみが得られた。

(38) 西ドイツのシュミット前首相が、いつか、「(中略) 戦後の日本はアメリカに頼るばかりで、西ドイツが払ったような努力を、周辺の諸国に対して払ってこなかったのではないかと、批判していたのを思い起こす。(井出孫六「歴史に学ぶ」)

(39) 「今日、後輩が照明オペレーターとしてデビューするステージがあるんです。それを見てやろうと思って…」

インスは、突然ソウルに来たことを弁明しているように聞こえるのではないかと語尾を濁らせた。(吉野ひろみ「四月の雪」)

この内、「弁解」側の語と〈のではないか〉が共起しているのは「語尾を濁らせる (39)」のみであり、他の21例は「批判する」「非難する」といった、受け手への否定的態度を伴う語との共起例であった。前節で確認したように、〈のではないか〉は特に否定的感情を伴う述部・名詞との共起が多い形式であったが、「批評・弁解」における〈のではないか〉の多用にも、その性質が影響していることが見て取れる。

"3122"の「通信」や"3150"以降の「読み」「書き」「文章」に分類される例は、表現に際してどのような手段を用いるかを限定するものであり、「言う」の場合と同様、引用節の内容が持つ意味との関連性は薄いと考えられる。その中で、表11に示したように、〈なければならぬ〉では、「3151」「書き」に該当するものと共起する例が統計的に特徴的であると言え、用例数も85例中24例と、「3100」「言語活動」の36例に次ぐものとなっている。他形式に比べ特徴的なこの結果は、〈なければならぬ〉の意味を反映したものと捉えられる。

(40) 「白書」の冒頭の「総論」では、(中略)「それゆえ、当面の景気の本格回復はこれまでの経済構造やシステムを改編し、日本経済の足腰を強化することによって達成しなければならない」とはっきり書かれている。(山家悠紀夫「偽りの危機本物の危機」)

(41) 第八条についてお聞きしたいのですが、第二項、資産再評価を行った事業用土地について商法三十四条第二号の規定により帳簿価額の減額をした場合は取り崩さなければならないとありますが、商法第三十四条第二号の規定により帳簿価額の減額をした場合というのはどういう場合を想定しているのでしょうか。(衆議院142回；法務委員会)

〈なければならぬ〉においては、(40)(41)などのように、「法律・制度として記載され

ている・定まっている」という意味で「書き」にあたる語が共起していた。この点は、その他の形式と「書き」の共起例が、(42)のように単なる書記を意味するものが殆どである点と、対照的である。

- (42) 先の論文のなかで清水氏は「日本のマスコミのなかに一人でも、日本の血友病患者は大丈夫なのかという疑問を抱き、調査するものがいたならば、状況はまったく変わっていたはずだ」と書いているが、その点は、ちょっと違う。(柴田鉄治「科学事件」)

「書き」類と〈なければならぬ〉の共起例の多さは、前節で指摘した〈なければならぬ〉と「規定」類の表現との共起しやすさと連続的に捉えるべきものと考えられる。

以上、表現に関わる述部・名詞との共起例においても、引用節内のモダリティ形式の意味が共起しやすさ(あるいはしにくさ)に影響する可能性があることを確認した。

5. 本研究のまとめ

本研究では、モダリティ形式が引用節に現れる用例について、共起する主節述部・被修飾名詞の種類、またそれぞれの共起例数の分布に、各モダリティ形式の意味の違いが反映されることを論じた。本研究の特徴は、モダリティ形式の意味を論じるにあたり、その形式と共起する語の意味を判断基準とするという点である。「意味」の判断に『分類語彙表』の分類を利用し、考察の元となる用例データを、コーパスから収集したことも特徴となっている。

コーパスからの用例を用いることで事例に即した解釈ができるのはもちろん、大量の用例を分析の対象とすることで、その共起が起こるか起こらないか(その共起が自然か否か)という点だけではなく、どういった共起が他に比べて起こりやすいのか、というデータを用いて考察を行えた。その際、4.2.1で説明したような、統計的分析(カイ二乗値の多寡)に基づいて、どういった共起が特徴的なのかを見極めて論じた点も、先行研究には無かった観点である。

4.2.2節で見た〈のではないか〉〈かもしれない〉と〈だろう〉の間での、「話し手の感情(好悪)」による形式の選択傾向などは、どの形式とも自然に共起できる語の間にも、明確な傾向の違いが存在するという点を指摘したものとして、上の利点を活かした指摘が行えたものだと言える。また、4.2.3節で見た「思考・意見・疑い」の語との共起においては、先行研究の意味に基づく考察に対して、その客観的データを示すことができた箇所が多くあった。

論じる箇所によっては、データに現れた結果をもたらした理由が明確には指摘できなかった箇所も存在するが、今後理由を探るべき新たな課題を設定できたのだと考えたい。

本研究では、共起して用いられる度合いが特に顕著なものについて重点的に論じたが、

一方で共起例がほとんど得られなかったものについても、取り立てて本研究で述べはしなかったものの、「大規模コーパスを調査しても出現しない」という結果そのものが、その組み合わせの「用いられにくさ」をものがたるものだと考えることができる。

今後は個別の意味分類だけではなく、どれだけの分類項目と共起するかという分布など、より全体的な視野からの考察も必要であろう。さらには意味分類だけではなく、各形式ごとの異なり語数などを利用するなど、今後さらに分析を精密化することも可能であると考えられる。何よりも、今回得たデータの範囲でもまだ各形式に認められるすべての特徴を論じきれたわけではないので、全体を論じるためにさらに考察を進めたい。

参考文献

Narrog, Heiko (2009) *Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

国立国語研究所 (編) (2004) 『分類語彙表 (増補改訂版)』東京: 大日本図書.

佐藤雄亮 (近刊) 「〈(の) だろう〉 〈(の) だろうか〉 を含む引用節と主節述部・被修飾名詞の関連性—BCCWJ のデータから—」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』6. 東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育拠点」

高梨信乃 (2002) 「第 3 章 評価のモダリティ」宮崎 (他) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 79-120.

ナロック ハイコ (2006) 「従属節におけるモダリティ形式の使用」『日本語文法』 6-1: 21-37.

日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』東京: くろしお出版.

_____ (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』東京: くろしお出版.

藤田保幸 (1986) 「文中引用句『～ト』による『引用』を整理する」宮治裕 (編) 『論集日本語研究 (一) 現代編』 206-230. 東京: 明治書院.

_____ (2000) 『国語引用構文の研究』大阪: 和泉書院.

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.

_____ (1993) 『現代日本語文法の輪郭』東京: 大修館書店.

宮崎和人 (2002) 「第 4 章 認識のモダリティ」宮崎 (他) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 121-171.

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』東京: くろしお出版.

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』東京: 明治書院.

The correlation between modals in the quotative clause and the predicate or modified noun
in the main clause in Japanese

Sato, Yusuke

(The Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

Abstract

The present study reveals that the meanings of modals in quotative clauses are reflected in the meanings and the numerical distribution of main predicates or modified nouns with which they co-occur. Consideration is based on attested examples culled from the BCCWJ corpus, which are also analysed statistically. The result of this study will also function as the complementary data for the semantic description of the modals.

2010年度

卒業論文要旨

Abstracts of the Graduation Papers

宮城方言の条件表現 ―青森・秋田方言との対照を中心に―

内海 優

(欧米第一課程ドイツ語専攻)

キーワード：宮城方言、条件表現、「なら」の対応形式、事実的用法

0. はじめに

本稿は、東北方言に属する宮城方言の条件表現が、東北方言の条件表現の中でどのような位置にあるかを、同じく東北方言に属する青森方言・秋田方言や、共通語との対照から明らかにしようとするものである。なお、本稿の内容は、卒業論文の内容を抜粋したものである。

以下、共通語は平仮名で、方言は片仮名で表記する。例文番号及び例文中の下線は筆者による。なお、例文の表記法は原典から適宜変更することがある。

1. 条件表現とその諸用法

三井 (2002: 85) は、条件表現を「複文の中で、後件の成立について前件が何らかの関係で条件となっていることを表す表現」と定義している。本稿での条件表現の定義はこれに従う。なお、本稿では逆接の条件表現、及び順接の確定条件に位置づけられる原因・理由の表現は扱わない。よって以下特記がない限り、「条件表現」といえば順接の条件表現から原因・理由を除いた範囲を指すこととする。

条件表現は、従属節で表される前件と主節で表される後件がそれぞれ未実現の事態なのか、既実現の事実なのか、あるいは反事実なのかによって、様々な用法に分類できる。以下に、前田 (1991, 1997, 2009) の分類を三井 (1998b) が整理したものを示す。

- ・ **仮説的用法**: 未実現の事態について、実現した場合を仮定する用法
(1) あした雪が降ったら船は出ないだろう。
- ・ **反事実的用法**: 現実には実現しなかった事態を、仮に実現したものと仮定する用法
(2) あんなところに行かなければよかった。
- ・ **一般恒常用法**: 前件の下では後件がいつでも時間を超えて成り立つことを述べる用法
(3) 1に1を足せば2になる。
- ・ **反復習慣用法**: 前件に伴い後件が実現するということが繰り返し起こることを述べる用法
(4) あの人の家に行くといつもごちそうしてくれる。(現在)
(5) 昔は、稲刈りが終わるとみんなで酒盛りをした。(過去)
- ・ **事実的用法**: すでに実現した一回限りの事態について述べる用法
(6) 昨日、散歩をしていたら急に雨が降ってきた。

[三井 (2002: 86-87) を一部改変。例文は三井 (2002: 89-90) より抜粋]

なお、前田 (1991, 1997, 2009) の分類では、上記の5用法（「条件的用法」と呼ばれる）に対して「非条件的用法」が存在する。前田 (2009) によると、これは前件と後件の間にもはや「因

果関係」が見られず、慣用表現化（～したらいい、Nについて言えば、etc.）、あるいは接続詞化（そうすれば、そうすると、etc.）した類のものとされる。

共通語では、条件表現は主に「と」、「ば」、「たら」、「なら」の4形式によって表される。各形式がそれぞれどういった用法を持つかについて、前田（2009）を表1に整理する。

表1: 「と」、「ば」、「たら」、「なら」の用法（条件的用法）

		と	ば	たら	なら
条件的用法	仮説的	○	◎	◎	◎
	反事実的	△	◎	◎	○
	一般恒常	◎	◎	△	×
	反復習慣	◎	◎	△	○
	事実的	◎	△	◎	×

◎: 使用が十分に可能
 ○: 一定の用例があり、
 使えると判断できる
 △: 用例がほとんどない・近い
 用例はあるが制限がある
 ×: 使えない

[前田（2009: 40）をもとに作成]

2. 先行研究の整理（青森・秋田方言の条件表現）

卒業論文では、宮城方言の条件表現に関する先行研究に加え、青森方言と秋田方言の条件表現を扱った先行研究をとりあげた（青森: 三井 1998b, 2002/秋田: 日高 1999, 2000）。青森・秋田方言は宮城方言と同じく東北方言に属しており¹、青森・秋田両方言の条件表現に関する先行研究は宮城方言の条件表現を考察する上で有益な対照資料となる。先行研究を整理する際に、適宜『方言文法全国地図』（以下、GAJ）を参照した。

本稿では、青森方言と秋田方言の条件表現に見られた4つの共通点について、GAJの関連各図を手掛かりにしつつ整理する。

2.1. 「なら」の不使用と対応する他形式の使用

青森方言・秋田方言ともに、条件表現形式として「ナラ」という形式は存在しない、もしくはあってもほとんど用いられないようである。代わりに、「なら」に対応する形式として青森方言では「ダラ/ダバ」、秋田方言では「ゴッタラ/ゴッタバ」、「未然形+バ」、「カラ²」などが、先行研究では言及されている。このうち、秋田方言の「ゴッタラ/ゴッタバ」は「コト+ダラ/ダバ」に由来するとされ（日高 2000）、語構成上は「形式名詞+ダラ/ダバ」とみなせる。ここから、両方言で共通に用いられるのは「ダラ」と「ダバ」とであると言える。

ただし、青森・秋田両方言では、「ダラ/ダバ」の形態的なふるまいに差が見られる。「ダラ/ダバ」が用言（動詞・形容詞・形容動詞）に接続する場合、秋田方言では形式名詞を介するのが必須であるのに対し、青森方言では必ずしもそうではないという傾向が見受けられる（GAJ134図、144図、150図などの「なら」関連各図を参照）。なお、「ダラ」と「ダバ」の地域差や棲み分け、体言接続については、明確な示唆は得られなかった。

¹ 東北方言は北奥羽方言と南奥羽方言に区画される。青森・秋田方言は前者に、宮城方言は後者に属する。

² 日高（2000）によると、この「カラ」は原因・理由の「カラ」とは出自が異なるとされる。

2.2. 「ト」の不使用

各先行研究によると、青森方言と秋田方言では「と」に形の上でそのまま対応する「ト」という形式は用いられないようである。GAJ169 図「行くと (その話はだめになりそうだ)」においても、青森・秋田両県では「ト」ではなく圧倒的に「バ」の回答が目立つ。

2.3. 「タラ」の用法の狭まりと事実的用法専用形式の存在

共通語の「たら」に比べて、青森・秋田両方言の「タラ」はその用法が狭められているようである。これは次の2点から確認できる。

まず、青森・秋田方言の「タラ」は事実的用法を基本的に持たない。使えないことはないが、話者には地元のことばではない、あるいは新しい言い方であるなど感じられるようである。事実的用法には、「タキヤ／タッキヤ」(秋田では「タバ」も)が専用の形式として用いられることが各先行研究で述べられている。

- (7) アツツァ エタキヤ (中略) ミンナ モノ カブテ クルアダエナ。 (三井 1998b: 19)
 (あっちへ行ったら、みんな物 [を] 被って来るのだよな。) 【青森・事実的用法】
- (8) 或ル日、釜ガラ上ッテ来タキヤ、家ノ中ガラ煙出ハツテクルノ見エダド。 (日高 1999: 48)
 (ある日、炭焼きから戻ってきたら、家の中から煙が出てくるのが見えたそうだ。) 【秋田・事実的用法】

次に、後件が反期待性と言える内容であり、文全体で禁止や警告といった意図を表す場合でも「タラ」ではなく「バ」が用いられることがあげられる。共通語ではこういった文では「と」や「たら」、「ては」が選択されるため(蓮沼 1987)、この点でも「タラ」の意味範囲は狭められていると考えられる(次節を参照)。

2.4. 「バ」の語用論的制約の欠如

青森方言・秋田方言の「バ」は共通語の「ば」と異なり、後件が「望ましくない」事態であり、かつ文全体が禁止や警告といった意味内容を担う場合でも用いられる。

- (9) そんな暗いところで本を ?読めば／読むと／読んだら／読むでは 目を悪くしますよ。
 【後件: 反期待性→警告】(三井 1998b: 21)
- (10) 餅ナド余リ食ッテ、ハバケレバ死ヌド。 (日高 1999: 46)
 (餅などあまり食べて、のどにつかえると死ぬよ。) 【秋田・後件: 反期待性→警告】

これは、前述の GAJ169 図「行くと (その話はだめになりそうだ)」において、青森・秋田両県のほとんどの地点で「バ」が回答されていることから確認できる。

3. 調査

宮城方言で用いられる条件表現形式とその用法などを明らかにするため、宮城県内の複数の地点で収録された談話資料により調査を行った。宮城方言の条件表現についての先行研究(佐藤(亭) 1982、三井 1998a)では、宮城方言の条件表現形式には「ト」、「バ」、「タラ」、「ンダラ」「コ

「ッタラ」、「ゴッタラ」などのものがあるとされている³。調査では、談話資料からこれらの形式を抽出し、各形式がどのような用法で数量的にどの程度用いられているかを調べた。先行研究に言及のなかった形式でも、共通語訳や文脈から条件を表していると思われるものがあればそれも抽出した。以下では、使用した談話資料の詳細と調査結果について述べる。

3.1. 使用した談話資料

今回の調査で使用した宮城方言の談話資料は次の4つである。なお、各談話資料の収録地点の位置、及び情報については、紙幅の都合上省略する。

表 2: 談話資料詳細

談話名	時間	収録時	収録地点	コンサルタント	話題
根白石談話	約 10 分	1953 年 7 月 19 日	宮城郡根白石村 (現・仙台市泉区 根白石)	A: 1879 年生・男 B: 1907 年生・男 C: 1869 年生・女 D: 1901 年生・女	洪水の話 交通の今昔 など
仙台談話	約 22 分	1977 年 11 月 8 日	仙台市青葉区 八幡	L: 1902 年生・男 M: 1906 年生・男 N: 1910 年生・女	仙台の昔の様子 神仏に関する話 など
小野田 PT 談話	約 18 分	2009 年 8 月 18 日	加美町 小野田地区	W: 1988 年生・男 X: 1939 年生・女 Y: 1948 年生・女	怪我の話 孫の話 など
小野田談話	約 35 分	2009 年 9 月 7 日		上記 X,Y 及び Z: 1942 年生・女	食品の話 姉妹の近況 など

これらのうち、「根白石談話」と「仙台談話」は既刊の方言談話資料である⁴。残りの2つの談話資料は、筆者が録音した談話を文字化し、内省により共通語訳を付したものである。後者の2つの談話資料のコンサルタントには、生え抜きである60歳以上の話者3名(1939年生・女性、1942年生・女性、1948年生・女性)を選んだ。なお、小野田 PT 談話には筆者自身の発話が含まれている(話者 W)。しかし、筆者自身が生え抜きの話者であること、その発話数がわずかであることから、筆者の発話が他の話者を共通語に誘導するとは考えにくく、同談話を資料として用いることに問題はないと考える。ただし、筆者の発話は考察の対象外とする。

3.2. 調査結果

前述の調査により得られた条件表現形式について、その形態的な特徴について整理し、各形式の用法別用例数を示す。本節以降では、実際の用例を示す際に談話の種類と発話番号、発話者を

³ この他に、「ンダッタラ」、「タラバ」、「コッタラバ」、「ンダゴッタラ」といった形式についても言及されているが、本稿では前者2つを「タラ」の、後者2つを「ゴッタラ」の変異形として扱う。

⁴ 「根白石談話」は『全国方言資料 第一巻』所収の「宮城県宮城郡根白石村」を、「仙台談話」は『全国方言談話データベース 第3巻』所収の「I. 宮城県仙台市 1977」をそれぞれ指す。

併記する。談話の種類は、「n(根白石談話)」、「s(仙台談話)」、「pt(小野田 PT 談話)」、「o(小野田談話)」を付して表す。発話番号は数字で、発話者はアルファベットでそれぞれ表す。

3.2.1. 抽出形式

各談話資料から抽出した条件表現形式は、「ト」、「バ」、「タラ」、「タツケ」、「ナラ」、「ダラ」、「ゴッタラ」、「ゴッテ」の8形式である。このうち「ゴッテ」は先行研究に言及のなかった形式であるが、佐藤(忠)(1981)に記述がある。それによると、「ゴッテ」は「なら」に対応する形式であるとされ、「…事では」の意味であるという(佐藤(忠)1981:157-158)。

形態面では、共通語の形式と同形である「ト」、「バ」、「タラ」、「ナラ」は接続様式も同様であった(順に用言の連体・終止形、仮定形、連用形、連体・終止形及び体言に接続)。「タツケ」は、得られた用例全てが動詞の連用形に接続して現れた。「ダラ」は用言に接続した用例はなく、いずれも名詞に接続するか、あるいは「ホンダラ(そうなら)」として用いられていた(例文(11)参照)。

「なら」に対応すると思われる「ゴッタラ」は、名詞に接続する場合は全ての用例が「ダ」を介していた。「なら」であれば「Nなら」のように名詞に直接接続するところである。

- (11) フツーダラー ヤロッコ^ダゴッタラバ フツーダラー ミーカルグ パーンド ニゲッペッチャ
ナヤー
(普通なら、男の子だったら普通なら身軽にパーンと逃げるだろうになあ。)**【pt182Y, 名詞接続】**

この「ダ」は、日高(2000)の記述にある指定辞(断定の助動詞)の連体形語尾であると考えられ、共通語の「な」に対応するものと思われる。「ゴッタラ」の出自が「コト+ダラ」である(2.1.節参照)点も、この「ダ」が「な」に対応すると見ることを支持している。GAJ150 図「静かなら」では、宮城県内に「シズカダゴッタラ」類の回答が複数地点で見られる。

関連して、「ンダゴッタラ」という語形も談話中に2例現れた。これは、宮城方言の条件表現の先行研究である三井(1998a)にも言及のあった形である。「ダ」が「な」に対応するならば、この「ンダ」は「形式名詞+な」の類のものとも見ることができる。

- (12) ンダナー ユーガダ イグ^{ンダ}ゴッタラナー
(そうだなあ、夕方に[仙台に]行くならなあ[泊まるのは当然だ]。)**【pt131Y, 動詞接続】**
- (13) モス コノマンマ ホラマダ イッテ^{ンダ}ゴッタラ レントゲン トツカラ
(もしこのままほら、まだ[傷が]痛かったらレントゲンを撮るから[と医者が言っていた]。)
【pt4Y, 形容詞接続】

3.2.2. 各形式の用法別用例数

抽出した各条件表現形式がどのような用法で用いられているかを、その数量と併せて調査した。用法の分類は、前田(1991, 1997, 2009)及び三井(1998b)に従った(1.2.節参照)。その結果を表3にまとめる⁵。表中の太斜字は、次節で検証の対象とする数値である。なお、本稿では4つの談話の合計値のみを示す。

⁵ 「ナラ」と「ゴッテ」については、「ナラ」が小野田談話に、「ゴッテ」が根白石談話にそれぞれ1例ずつ現れたのみである。そのため、ここでは表を簡略化するために欄外にその旨を記すのみとする。

表 3: 各形式の用法別用例数 (4 談話合計)

	ト	バ	タラ	タツケ	ダラ	ゴッタラ
仮説的	4	5	3		1	7
反事実的		6				1
一般恒常	15	8	2		2	1
反復習慣	9	1				
事実的	7	5	8	12		
計	35	25	13	12	3	9
非条件的	14	13	19	6	3	4
総計	49	38	32	18	6	13

※「ナラ」:1 例 (仮説的用法)

※「ゴッテ」:1 例 (仮説的用法)

4. 宮城方言と青森・秋田両方言との対照

本節では、2 節において確認した青森・秋田方言の条件表現に共通する 4 つの特徴について、調査結果、及び GAJ 関連各図をもとに宮城方言での状況を考察する。

4.1.1. 「なら」に対応する形式

宮城方言では、「なら」に対応すると思われる形式として「ナラ」、「ダラ」、「(ンダ) ゴッタラ」の 3 つが得られた。いずれの形式も宮城方言の条件表現を扱った先行研究に記述のあったものである。これに加えて、佐藤 (忠) (1981) が「なら」に対応すると述べている「ゴッテ」も 1 例得られている。青森・秋田方言にある「ダバ」形式は、宮城方言には存在しないものと思われる。

「ダラ」については、形態的には、談話中で用言に接続した用例はなく、いずれも名詞に接続するか、あるいは「ホンダラ (そうなら)」として用いられていた。一方で GAJ の「なら」を扱った各図 (132 図、134 図、150 図など) を見ると、宮城方言の「ダラ」は用言にも接続し、その際形式名詞が必須というわけではないようである。この点は青森方言的であると言える。その一方で、青森方言では用いられない「ゴッタラ」形式が県南部を中心に分布していることから、この点においては秋田県と共通している。

用法面では、「ダラ」と「ゴッタラ」はともに仮定的な用法に偏って分布している。ここからは仮定性の強さがうかがわれ、「なら」と共通している (表 1 参照)。

一方、共通語と同形の「ナラ」形式も、1 例ではあるが談話中に現れた。先程の GAJ 各図でも、宮城県の北西内陸部に「ナラ」が分布していることが分かる。

4.1.2. 「と」対応形式の有無

今回の宮城方言の談話資料調査では、青森・秋田方言にはないとされる「ト」形式が 49 例確認できた。用法も一般恒常・反復習慣・事実的の 3 つの用法に多く分布しており、共通語と同様の傾向を示している (表 1 参照)。

ただし、この「ト」は事実的用法を表しづらい可能性がある。根白石談話以外の3つの談話では、「ト」の事実的用法の用例数は0~2例であり、一般恒常・反復習慣の各用法に比べて少ない値となっている。これは、「タラ」に加えて、「タツケ」などといった事実的用法を担う形式が複数存在するからであると予想される（後述）。

4.1.3. 「タラ」の用法の狭まりと事実的用法専用形式の有無

宮城方言では「タラ」全32例中8例(25.0%)が事実的用法として用いられていた。一方、三井(1998b)の談話資料調査では、青森方言の「タラ」に事実的用法は見られていない。日高(1999)の調査では、秋田方言の「タラ」は談話資料中で45例得られているが、そのうち事実的用法のものは8例(約17.8%)である。よって「タラ」の事実的用法としての使用率は宮城(25.0%) > 秋田(約17.8%) > 青森(0.0%)の順になる。一方で、専ら事実的用法に用いられる「タツケ」という形式が存在し(12例)、「タラ」と同じく動詞の連用形に接続する。これは青森・秋田両方言の「タキヤ/タッキヤ」との連続性を感じさせる。

- (14) バンツァン キューリー アイズー ツケッタノ アッカツツタツケ キューリナンカ
 オワリダッチャワーッテ
 (おばあちゃん、キュウリであれ、漬けておいたのはあるかって言ったら、キュウリなんか終わりだよって。) 【o91Y, 事実的用法】

「タラ」と「タツケ」は、今回の調査では用例数に大差はなかった。逆に言えば、青森・秋田方言の「タッキヤ」より「タツケ」の事実的用法としての勢力は弱いとも解釈できる。

「タラ」と「タツケ」がどちらも事実的用法としてよく用いられるということであれば、その棲み分けが問題となる。「タラ」と「タツケ」のニュアンスの差について、コンサルタントであるXに尋ねたところ、「タラ」は生起してすぐの事態に、「タツケ」は生起してから比較的時間の経過した事態に用いるということであった。これは、「ことがらの思い出し」(小林2000)を表すとされる宮城方言の文末形式「ケ」との混同が意識下にある可能性がある。「タツケ」の「ケ」は形容詞語尾の「ケレバ」が縮約したものとされるが(日高2000)、一方文末形式の「ケ」は古典語の「けり」に由来するもので、その出自は異なる。これはつまり、文末形式の「ケ」が元々過去を表す性質を持っているのに対し、「タツケ」の「ケ」はそうではないということになる。「ケレバ」が「ケ」に縮約した結果、文末形式の「ケ」と形を同じくすることによって、「タツケ」は文末形式の「ケ」が担う「ことがらの思い出し」という性質を一部共有するに至ったのではないだろうか。

- (15) エライ アガッテタツケ コンカイ
 ([墓参りに行ったら花が] たくさん供えられていたよ、今回は。) 【pt159X, タツケ→過去形+文末形式の「ケ」】
- (16) ソーステ アスグノー イギサー ヘッタツケ ビルニ ミナ スカ° ラッデ。
 (そうしてあそこの池に入ったら蛭にみんな食いつかれて。) 【s177N, タツケ→事実的用法】

4.1.4. 「バ」の語用論的制約

今回の調査の範囲内では、「バ」全38例のうち後件が反期待性を示し、かつ文全体で「警告」や「禁止」を表すものは確認できなかった。三井(1998a:91)では、宮城方言におけるこういった文での「バ」の使用は、共通語と同様に不可能であるとされている。

5. 宮城方言の条件表現の位置づけ

宮城方言では「ト」、「バ」、「タラ」、「ナラ」といった共通語と同形の形式を持ちながら、「タツケ」や「ダラ」、「ゴツタラ」といった方言特有の形式も併せ持っていることが分かる。

ただし、個々の形式を見ると、青森・秋田方言と共通する「ダラ」や「ゴツタラ」も、宮城方言では形態的に異なるふるまいを見せているようである。「バ」は、宮城方言と青森・秋田方言では使用範囲が異なる。また、共通語と同形の形式であっても、用法までが同じとは限らない。

こういったことから、宮城方言の条件表現は、全体として東北方言的な特徴と共通語的な特徴が混在して成立していると言える。地理的に宮城県は北東北と関東の間に位置するが、条件表現という文法分野においても、おおまかにみて、青森・秋田方言と共通語との間に位置するようなことが分かる調査結果となった。

6. 今後の課題と展望

今回は、形態的な面や個々の形式の用法の記述に注意した側面が強く、形式間での使い分けの諸相や、巨視的に宮城方言の条件表現がどのような体系を為しているかまでは、十分に調査・考察をすることができなかった。今後は、今回得られたデータや傾向をもとに調査票を作成し、面接調査によって各形式の使い分けを明らかにすることが必要である。その際、県内の地域差を考慮して調査地点を選定することは必須の課題である。

参考文献

- 国立国語研究所(1994)『方言文法全国地図 第3集』東京:大蔵省印刷局/_____ (1999)『方言文法全国地図 第4集』東京:大蔵省印刷局/国立国語研究所編(2006)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第3巻 宮城・山形・福島』東京:国書刊行会/小林隆(2000)「5. 文末形式「ケ」」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』:56-70./佐藤忠雄(1981)『仙臺方言攷 一音韻と語法一』東京:溪聲出版/佐藤亨(1982)「11 宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』:333-361. 東京:国書刊行会/日本放送協会編(1981)『カセットテープ 全国方言資料 第一巻 東北・北海道編』東京:日本放送出版協会/蓮沼昭子(1987)「条件文における日常的推論—「テハ」と「バ」の選択要因を巡って—」『国語学』150:1-14./日高水徳(1999)「秋田方言の仮定表現をめぐって—バ・タラ・タバ・タツキヤの意味記述と地域的標準語の実態—」秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部紀要』54:45-55./_____ (2000)「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』:74-132. 秋田:無明舎出版/前田直子(1991)「条件文分類の一考察」東京外国語大学外国語学部日本語学科『東京外国語大学日本語学科年報』13:55-80./_____ (1997)「現代日本語の条件文とその指導」AJALT 第13回日本語教師のための公開研修講座配布資料/_____ (2009)『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』東京:くろしお出版/三井はるみ(1998a)「11. 条件表現」加藤正信・遠藤仁編『宮城県中新田町方言の研究』:83-95. 科学研究費補助金研究成果報告書/_____ (1998b)「方言の条件表現—『方言談話資料』と『方言文法全国地図』からの研究の可能性—」国立国語研究所『国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集』:15-22./_____ (2002)「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』:85-101. 科学研究費補助金研究成果報告書

現代口語ビルマ語において行為・事柄を表す複合名詞主要部の機能

大西 秀幸

(東南アジア課程ビルマ語専攻)

キーワード：ビルマ語、複合、名詞形成、内部構造、意味的特徴

0. はじめに

卒業論文では口語ビルマ語¹ (以下ビルマ語) における所謂特殊主要部²のうち、特に「行為・事柄」を表す4つの名詞`Ahmu., `Aye:, `AchE, `AchiN:について検討した。問題の名詞は動詞³と複合して「～すること」という名詞を形成するが、具体的な使い分けについて明確に定義されていない。本稿では卒業論文の中から5.1節の複合語の内部構造と意味的特徴を中心に取り上げる。以下例文番号、グロスと訳、英語文献の訳はすべて筆者による。

1. 本研究に関する文法事項と用語の定義

本章では Okell (1969: 61-64) の記述を中心にビルマ語における複合についてまとめ、用語の定義を行う。

1.1. ビルマ語の複合名詞

1.1.1. 一般的な複合

複合では通常先行する補部が主要部を修飾する。

(1) ne_`EiN_ < ne_ + `EiN_
住居 いる (補部) 家 (主要部) (Okell 1969: 61)

(2) lou`kha. < lou` + `Akha.
賃金 働く (補部) お金 (主要部) (Okell 1969: 61)

(2) について、ビルマ語の名詞には`A を語頭に持つ名詞が多く存在するが、その名詞が主要部になる場合、語頭の`A は脱落する。

¹ ビルマ語はシナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、ロロ・ビルマ語群に属し、ミャンマー連邦の共通語になっている。語順は基本的にSOVで、修一被修の関係である(藪 1992: 568-569 要約)。ビルマ語は口語体と文語体に違いが見られる言語である。筆者は本稿での研究対象が口語と文語でどれほどの違いが出るのかははっきりしたことは分からないが、調査には便宜上口語体の資料を用いている。尚、口語体か文語体かの選別は主に動詞文標識の違いを基準にして筆者が選別を行った。本稿で使用する音声表記は次の通りである。[]内はIPA表記である。IPA表記のないものは、IPAと同記号である。子音: 無声無気音/p, t, s, c[te], k/ 無声有気音/ph[pʰ], th[tʰ], sh[sʰ], ch[teʰ], kh[kʰ]/ 有声音/b, d, z, j[dz], g/ 歯間音/T[t̪], D[d̪]/ 声門音/h, [ʔ]/ 鼻音/m, n, ny[n̩], ng[ŋ]/ 無声鼻音/hm[m̩], hn[n̩], hny[n̩], hng[ŋ̩]/ 側面音/l, hl[l̪]/ 半母音/w, hw[ɰ]/y[j], hy[ɛ]/ 子音と母音の間に入る介子音/-y-, -w-/ 後続する音に同化する鼻音はすべて/N/ 母音: /a[a], i, u, e, E[ɛ], O[ɔ], o/ 軽声母音は/A[ə]/ 声調: 下降調/一/ 低平調/一/ 高平調/一/ その他の記号: 境界線: スペース 句中の語境界: -(ハイフン) 複合語中の語境界: = 統語的結合による有声化: ^ 句点: || 読点: |

² 特殊主要部については1.2節で扱う。

³ ビルマ語では述語形式はすべて同じ標識をとるため日本語のような動詞と形容詞の区別はない。そのため本稿でも区別を行っていない。

1.1.2. 特殊複合

一般的な複合に対していくつかの特定の名詞を主要部にとるものを特殊複合という。特殊複合において主要部に現れる特定の名詞を特殊主要部 (special head) と呼ぶ (Okell 1969: 65 を要約)。Okell (1969: 65) で特殊主要部に分類される名詞には Tu_「人」、`AchiN_「とき」などがある。それぞれ補部と複合して「～する人」「～するとき」といった意味の名詞になる。一般的な複合と特殊複合における違いは以下の点である。

- 限定節標識を用いずに動詞節を修飾できる。
- 主要部に現れるものはある程度独立性を保ち、単独の名詞としても用いられるものから、専ら特殊主要部としてのみ働くものまでである。

1.2. 用語の定義

本稿ではOkell (1969: 65) のspecial headという用語に倣い、特殊複合における特定の主要部を特殊主要部と呼ぶ。以下Okell (1969: 61-65) を踏まえて本稿における特殊複合語と特殊主要部の定義を行う。

定義 1. 動詞語根、名詞、節を補部として特殊主要部となんらかの関係を持って複合した語を特殊複合語とする。

定義 2. 本稿での特殊主要部は名詞`Ahmu., `Aye:, `AchE', `AchiN:を指すものとする。

定義 3. Okell (1969) では補部を語の単位で分けているが、本稿では便宜上主要部にかかる補部はまとめてひとつの補部であると判断する。

以降、特殊主要部は補部と複合した後の語頭の`A が脱落した形式で記述する。

2. 先行研究

本稿では先行研究として Okell and Allott (2001) と岡野 (2007) をとりあげる。特殊複合語の意味・機能として両先行研究をまとめたものを表 1 に示す。

表 1: 先行研究のまとめ

特殊主要部	意味・機能	
	Okell and Allott (2001)	岡野 (2007)
hmu. 「事件」	<ul style="list-style-type: none"> ● 事件、犯罪、事故 ● 抽象名詞を形成 (行為、状態) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事件、案件 ● 現象
ye: 「問題」	<ul style="list-style-type: none"> ● 抽象名詞を形成 (一般的な機関の名称) ● 動詞節から名詞句を形成 	<ul style="list-style-type: none"> ● 国家や行政の取り組むべき課題 ● なんらかの対策を講じる必要のある問題
chE' 「事柄」	動詞から抽象名詞を形成	事項、点を表す名詞を形成
chiN: 「事柄」	動詞から抽象名詞を形成	事柄を表す名詞を形成

両研究とも意味的特徴の捉え方に大きな違いは見られない。先行研究に挙がっている例を特殊主要部ごとに示す。

[1] hmu.

- (3) a. kho:=hmu. 「窃盗事件」
 盗む=hmu. (Okell and Allott 2001: 172)
- b. to:tE`=hmu. 「発展」
 成長する=hmu. (岡野 2007: 139)
- c. su.^pauN:=lou`kaiN_=hlou`hya:=hmu. 「協力活動」
 集まる=活動する=活動する=hmu. (Okell and Allott 2001: 172)

(3) の a. が事件、b. が現象、c. が行為を表す抽象名詞の例である。Okell and Allott (2001: 172) で行為を表す抽象名詞としてあげていたのは c. の他に「独立運動」や、「善行」などがある。

岡野 (2007: 139) では複合語の構成として他とは違ったものがあげられている。

- (4) sE`=hmu.=lE`=hmu. 「工業」
 機械=hmu.=手=hmu. (岡野 2007: 139)

(4) は 1 つの複合語の中で特殊主要部が重複した例であるが、両先行研究ともこのような構成について詳しい記述はない。

[2] ye:

- (5) a. tO_hlaN_=ye: 「革命」
 革命を起こす=ye: (Okell and Allott 2001: 183)
- b. naiN_gaN_^Tu_naiN_gaN_^Ta: ya.-TiN.-ya.-thai`-tE.
 国民 得る-[当為]-得る-[当為]-ACMrIs
 `AkhwiN.`Aye:-mya: ya.hyi.=ye:-^ko_ sE`lE` thaN:shauN_-mE_||
 権利-pl 手に入れる=ye:-ACC 続けて 活動する-VSMrls
 「国民が当然得るべき権利を手に入れることに引き続き尽力する。」
 (Okell and Allott 2001: 184)
- c. lu`la`=ye: 「独立」
 自由だ=ye: (岡野 2007: 139)
- d. ka^kwE_=ye: 「防衛」
 防衛する=ye: (岡野 2007: 140)

a. が抽象名詞、b. が動詞節からの名詞句の形成、c. が解決すべき何らかの問題、d. が国家の取り組むべき問題の例である。a, c, d はとりあげられている例がほとんど同じものであり、Okell and Allott (2001) で抽象名詞にまとめられたものを岡野 (2007) が細分化したものと考えられる。

[3] chE`

(6) `A:nE:=^chE` 「弱点」

弱い=chE`

(Okell and Allott 2001: 35)

両先行研究であげられている例はほとんど共通しており「～点」、「～事項」を表す複合語になる。

[4] chiN:

(7) khAyi_Twa:=^chiN: 「旅行」

旅行に行く=chiN:

(Okell and Allott 2001: 42)

chiN:については、動詞を名詞化するときの最も一般的な形式という記述が両先行研究にある。

3. 問題設定

先行研究を通して筆者は以下の問題を設定した。

- a) 特殊複合語の構成について指摘することができるか ((4) のような例に関して)。
- b) 複合語の意味的特徴について、特殊主要部ごとにさらに細かく機能を定義できるか。
- c) 定義した意味的特徴をもとに特殊主要部同士を関連付けて体系的に説明することができるか。

4. 調査

4.1. 調査方法

調査は辞書から例を収集してインフォーマント⁴とともに分析する方法で行った。用いた辞書は大野 (2000) の『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』⁵ (以下辞書) である。辞書の見出し語から用例を手作業で収集した。調査対象となるのは、語尾が hmu., ye:, chE`, chiN: である語のうち、単独の名詞`Ahmu., `Aye:, `AchE`, `AchiN:と、同音異義語である hmu.「構う、拘泥する」ye:「書く」chE`「料理する」chiN:「籠」、「驚愕、憐憫等を表わす接尾辞」からなる複合語を除いたものである。品詞はほぼ辞書の品詞の分類をもとにしているが、形容詞は動詞の一部と考えられ、先行研究でも2つを分けて考えてはいないことからすべて動詞とした。

意味的特徴の調査では、辞書から抽出された複合語の日本語訳を意味ごとに分類するという作業を行った。対象となる日本語訳は見出し語の一番初めに載っている日本語訳の1単語である。用例の分類に用いたのは国立国語研究所編 (2004) の『分類語彙表—増補改訂版—』⁶ (以下語彙表) である。調査では語彙表の索引で用例の日本語訳を逆引きし、分類項目ごとに振り分けた。

⁴ ヤンゴン出身、女性、調査当時 25 歳

⁵ 1 ページ 2 段組 92 行組で 930 ページあり、ビルマ語日本語辞書の中では最も大規模な辞書といえる。

⁶ 現代の日常会話で普通に用いられる語を中心に、のべ語数 95811 語、異なり語数で 79516 語を収録している。

4.2. 調査結果

4.2.1. 複合語の構成

調査の結果得られた例は 559 例である。それらを特殊複合語の構成に着目して精査した結果、次の 3 種類が指摘できる。

- i. 補部 = 主要部
- ii. 補部 = 主要部 A = 補部 = 主要部 A
- iii. 補部 = 主要部 A = 補部 = 主要部 B

本稿では、i を単型、ii を重複 A 型、iii を重複 B 型と呼ぶ。以下にそれぞれの例を示す。

i. 単型 (542 例)

- (8) ce_`kwE:=hmu. 「悲しみ」
 悲しむ (補部) =hmu. (主要部) (辞書: 53)

ii. 重複 A 型 (16 例)

- (9) da:=ye:=hlaN_=ye: 「剣槍術」
 剣 (補部) =ye: (主要部 A) =槍 (補部) =ye: (主要部 A) (辞書: 309)

iii. 重複 B 型 (1 例)

- (10) taiN:=ye:=pyi_=hmu. 「国事」
 国 (補部) = ye: (主要部 A) =国 (補部) =hmu. (主要部 B) (辞書: 260)

先述の (4) は、重複 A 型に分類されることが分かる。

4.2.2. 複合語の意味的特徴

得られた例は hmu. で 230 例、ye: で 158 例、chE` で 105 例、chiN: で 39 例である。分類の結果指摘できる点として hmu. の物質・力・量、ye: の成員・機関は他の特殊複合語には現れず単独で現れる。

表 2: 複合語の分類結果 (() 内は頻度で少数第 2 位を四捨五入)

表 2-a: 単独で現れた分類項目

hmu.	物質 (2.2)、 力 (1.3)、量 (0.9)
ye:	成員 (2.5)、 機関 (1.9)
chE`	なし
chiN:_	なし

表 2-b: 共通して現れた分類項目

心	hmu. (20.0), ye: (3.2) chE` (25.7), chiN: (53.8)
作用	hmu. (8.7), ye: (20.3) chE` (30.4), chiN: (10.2)
様相	hmu. (3.0), ye: (1.9) chE` (3.8), chin: (5.1)
交わり	hmu. (12.1), ye: (15.8) chE` (3.8), chin: (2.6)

単独で現れる分類項目をまとめて、個々の特殊主要部の意味を定義した。さらに共通して現れる例をインフォーマントと精査して特殊主要部間での意味の違いを検討した。

以下に主に先行研究に指摘されていない特殊主要部ごとの機能を示す。日本語訳の隣の [] 内に語彙表内での分類項目を示す。

〈1〉 hmu.

● 行為や状態の事実

- (11) si:louN:=hmu. 「団結 [交わり]」
団結する=hmu. (辞書: 159)
- (12) `E:mya.=hmu. 「安らぎ [様相]」
心安らかだ=hmu. (辞書: 905)

(11) は団結の行為そのものを、(12) は安らかな状態そのものを表す。(15) と比較されたい。

● 行為・状態の結果、生じた「量」

- (13) Tei`Ti_=hmu. 「人口密度 [量]」
密集している=hmu. (辞書: 626)
- (14) mo:ywa_TuN:=hmu. 「雨量 [量]」
雨が降る=hmu. (辞書: 500)

(13) は (人が) 密集することによって生じた量、(14) は雨が降ることによって生じた量をそれぞれ表しているといえる。

〈2〉 ye:

● 目標となるべき行為・状態

- (15) si:louN:=ye: 「団結 [交わり]」
団結する=ye: (辞書: 159)

(11) と同じ補部を持つ複合語であるが、(15) は団結の行為ではなく、団結していない状態からの目標としての「団結」を表す。

● 関係者、技術

- (16) youN:sa_=ye: 「事務官 [成員]」
事務=ye: (辞書: 596)
- (17) ta`=ye: 「将校 [成員]」
軍 ye: (辞書: 271)
- (18) hnou`=ye: 「話し方 [技術]」
口=ye: (辞書: 375)

ye:には補部に関係する人や、補部に関する技術を表す複合語を形成する機能を指摘できる。関係者を表す複合語に関しては、補部に名詞しかとらないという特徴がある。

〈3〉 chE`

行為・状態の結果生じる事項という点で他の特殊主要部との違いを説明できることがインフォーマントの指摘で明らかになった。

● 行為・状態の結果生じる事項

(19) `Asi`khaN_=[^]chE` 「供述 [言語]」

取調べを受ける=[^]chE`

(辞書: 794)

(19) は取り調べの結果生じ、言語化されたものを表す複合語である。

● 空間的な点

空間としての点を chE`で表すことができることも明らかになった。

(20) tho:=[^]chE` 「跡 [空間]」

突く=[^]chE`

(辞書: 284)

(21) `AIE_=[^]chE` 「中心点 [空間]」

中央=[^]chE`

(辞書: 866)

〈4〉 chiN:

インフォーマントによると chiN:の意味機能は hmu.とほぼ同じで違いを指摘するのは難しいという。

(22) mi:^phwa:=[^]chiN: 「出産 [生活]」

出産する=[^]chiN:

(辞書: 582)

名詞の例の他に、重複 B 型で副詞に分類されるものが 1 例指摘できる。

(23) pO:=[^]chiN:=TO:=[^]chiN: 「たくさん」

多い=[^]chiN:=混ぜかえす=[^]chiN:

(辞書: 425)

5. 考察

調査結果をもとに特殊主要部の意味的特徴を図式化したものを以下に示す。行為・状態を3つの段階に分けることでそれまで個々に指摘されていた特殊主要部の意味を体系的に示すことができる。

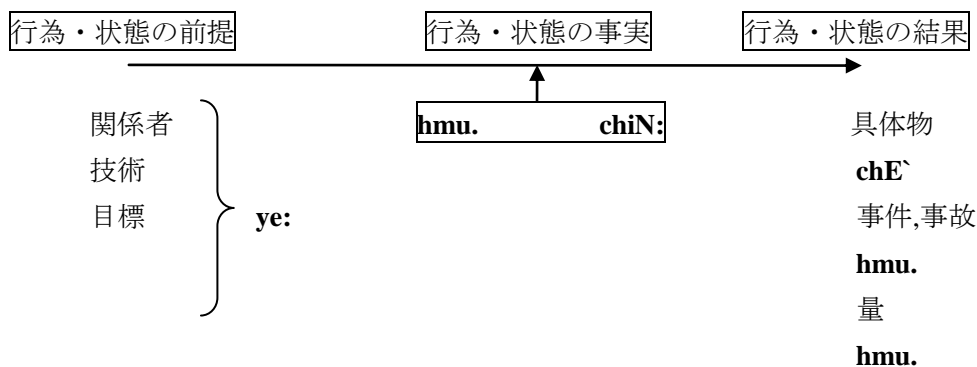


図 1: 特殊主要部の機能

hmu.において「事件・事故」、「量」に分類できるもの以外はすべて「行為・状態の事実」として分類した。筆者は特殊主要部が「行為・状態の事実」を表す hmu., chiN:を基本の形とし、そこに前提、結果などの概念が加わることで使い分けがなされていると考えている。

ye:の関係者としての機能については補部に名詞をとる例しか現れず、インフォーマントからも動詞との複合の例があがらなかったため、行為・状態の前提に分類すべきか疑問であったが本稿ではここに加えた。図に示した機能の他に個別の意味として ye:における一般的な機能の名称 (表2 参照)、chE'の空間的な点、副詞としての chiN:が指摘できる。

chiN:が副詞を形成することについて筆者は、ビルマ語において接尾辞 A による派生名詞や、動詞重複による派生名詞が副詞的な機能を果たすことと大いに関係していると考えている。

6. 今後の課題

本稿では特殊主要部名詞の内部構造と意味的特徴について扱ったが、より考察を深めるためには、ビルマ語において動詞から名詞を形成する複合以外の方法である派生との関係をみていくことが重要であると考えられる。特に chiN:が持つ機能についてインフォーマントは派生名詞との意味的に類似したものであると指摘している。さらに chiN:と補部が結びついた複合語が副詞的な働きをする例が指摘されたことで派生との関係が深いものであると筆者は考える。今回の研究ではその関係性を十分に明らかにすることはできなかったため今後の課題としたい。

略号一覧

ACC: 対格; accusative	pl: 複数; plural
ACMrls: 限定節標識・確定; attributive clause marker, realis	VSMrls: 動詞文標識・陳述/確定; verb sentence marker, realis

参考文献

[日本語で書かれたもの]

大野徹 (2000) 『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』 東京: 大学書林

岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』 東京: 東京国際語学社

国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表』 東京: 大日本図書株式会社

藪司郎 (1992) 「ビルマ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第3巻・世界言語編 (下-1)』 567-610, 東京: 三省堂

[英語で書かれたもの]

Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*, vols. I - II. London: Oxford University Press.

Okell, John and Allott, Anna (2001) *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. London: Curson Press.

マンガにおける臨時的な英語オノマトペの音韻的特徴

小檜山 紫織
(日本課程日本語専攻)

キーワード：英語、オノマトペ、音韻構造、語彙化、マンガ

0. はじめに

本研究は、日本語のマンガとその英訳版に現れたオノマトペを対象とした研究である。一般に、マンガではオノマトペが多用される傾向にある。本研究は、マンガ特有の英語オノマトペの音韻的特徴を、数量的データに基づいて整理することを目的とする。

1. オノマトペとは

オノマトペについての定義は各研究においてさまざまである。本研究では、語彙化したもの・語彙化していないもの両方を扱う。そのため、それらをまとめた総称と、語彙化していないものの名称を確認する。

1.1. 用語の定義

田守・スコウラップ (1999) は、オノマトペの定義について以下のように述べている。

オノマトペは、もっとも一般的な定義では、現実の音をまねている語、あるいは少なくともそのように見なされる語を指す (ぎしぎし、quack 等)。しかしながらこの術語は、声を含む音を表す語に対してだけでなく、動作の様態 (くねくね、zigzag) や、肉体的 (ぼっちやり、plump) あるいは精神的 (もさっ、sluggish) な状態を描写する語に対しても、用いられることがある。

[田守・スコウラップ (1999: 10)]

田守・スコウラップ (1999) は、個人的な使用例としてのオノマトペが存在することも指摘しており、そのような語彙化していないオノマトペを「臨時語」と呼んでいる。本研究では、声や音、様態や状態を表す語の総称を「オノマトペ」とし、辞書に記載されておらず、十分に語彙化していないと判断されるオノマトペを「臨時的なオノマトペ」とする。

2. 先行研究

英語オノマトペの音韻形態的特徴、一般的な英語語彙の音韻構造について概観する。

2.1. 英語オノマトペの音韻形態的特徴

ジョーデン (1982: 135-138) は、英語オノマトペの音韻形態的特徴として反復をあげており、そのパターンを以下①～③のように示している。

①同じ音列がそのまま繰り返されるもの (hush-hush 「こっそり」)

- ② 始めの部分と二つ目の部分の第一子音が交替、あるいは子音が付け加えられるもの (teeny-weeny 「とても小さい」、itsy-bitsy 「小さい」)
- ③ 始めの部分と二つ目の部分で母音交替 (特に「狭母音→広母音」が多い) が起こるもの (jingle-jangle 「チャリンチャリン」)

また、田守・スコウラップ (1999) は、英語オノマトペの音韻形態的特徴として、反復以外に2つの接辞 -ety や ker- (ka-) をあげている。

2.2. マンガに見られる英語オノマトペの音韻形態的特徴

ジョーデン (1982) は、マンガにおける英語オノマトペの音韻形態的特徴を以下のようにまとめている。

表 1: マンガにおける英語オノマトペの音韻形態的特徴

(1) 語尾の「母音+k」、「母音+kt」、「母音+sht」
(2) 「同一母音または子音の連続」
(3) 「英語の綴り字の規則から逸脱したもの」

[ジョーデン (1982: 139-140) を要約]

2.3. 一般的な英語語彙の音韻構造に関する先行研究

御園 (2001) は、一般的な英語語彙に見られる音韻構造について以下のようにまとめている。C は子音、V は母音を表す。

表 2: 英語一般語彙に見られる音韻構造の頻度

音韻構造	頻度
CV	34%
CVC	30%
VC	15%
V	8%
CVCC	6%

[御園 (2001: 46) に基づき、筆者が作成]

3. 調査

本研究では、マンガ作品中のオノマトペから辞書に記載されているかどうかによって臨時的な英語オノマトペを選び出し、その音韻構造と語頭・語末子音の出現頻度を分析した。紙幅の都合上、ここでは音韻構造の調査についてのみ取りあげる。

3.1. 調査資料

調査に用いた資料は以下の 3 作品である。オノマトペが多用され、訳者が英語母語話者であるマンガ作品を選んだ。なお、以下では () の略号を用いる。

Alexander O. Smith (2005) *DR.SLUMP* Vol.1 (計 185 ページ) (D)

DeConnick, Kelly Sue (2008) *SLAM DUNK* Vol.1 (計 192 ページ) (S)

Lance Caselman (2003) *ONE PIECE* Vol.1 (計 207 ページ) (O)

3.2. 抽出方法

本研究では、以下 5 点の基準を設け、マンガ作品から用例を抽出した。

- ・セリフと地の文におけるオノマトペは一切扱わず、手書きの「文字」表現として背景に書かれたものを対象とする。
- ・「!」や「?」などの感嘆符や「…」は、音韻構造に含まれないものと考え、抽出しない。
- ・1 コマの中に手書きで描かれた同じ字体のオノマトペを 1 単位とするが、同様の字体のオノマトペであっても、場面から別個の音や様子を表現していると判断できるものについては、それぞれを 1 単位とする。
- ・同一の音や様子を単純な反復で表しているものは、音韻構造が同一であると考えられるため、反復部分を除いて 1 単位とする。
- ・オノマトペの抽出は、異なり語数で行う。既出のオノマトペが再度現れても抽出しない。

3.3. 分類方法

抽出したオノマトペが臨時的かどうか判断するために、2 冊の辞典を用いた。

- ・松田徳一郎 (2007): 英語オノマトペ辞書、語数は 846 語
- ・_____ (1999): 英和辞典、語数は約 27 万語

A, B の辞書への見出し語としての記載の有無によって、オノマトペを以下の 4 つに分類し、I に分類されたものの音韻構造を分析した。各分類の名称は筆者による。

- I: 臨時的な英語オノマトペ: 英語オノマトペ辞書・英和辞典どちらにも載っていないもの
- II: 英語オノマトペ: 英語オノマトペ辞書にのみ載っているもの
- III: 準英語オノマトペ: 英語オノマトペ辞書・英和辞典どちらにも載っているもの
- IV: 一般英語語彙: 英和辞典にのみ載っているもの

3.4. 母音・子音の分析基準

本研究では臨時的なオノマトペを対象とするため、問題の語が英語において一般的な音形を持っているかを判断する必要がある。母音・子音それぞれの分析基準として、竹林・桜井 (1985) による英語の発音と綴り字の関係を参照し、オノマトペの音韻構造を分析した。例えば、oooh 「オオッ」や dsh 「ゴツ」のような場合には、下記の分析基準に従って、oo | oh →VV 型、d | sh →CC 型のように音韻構造を分析した。

(1) 母音の分析基準

- ・ 基本的には母音字 1 字を 1 単位とする。
 - ・ 以下のスペリングが生じた際には、まとめて 1 単位とする。
- ai, ao, au, ah, al, ar, aw, ay, ach, air, are, ie, ir, ier, iew, igh, ir, ire, ui, ur, ure, uy, ee, ea, ei, eo, eu, er, ew, ey, ear, eau, eer, eir, ere, eur, eye, oa, oe, oi, ou, oo, oh, or, ow, oy, oar, olo, oor, ore, our, ough, ower, wo, yre, y (子音字の後), yr

(2) 子音の分析基準

- ・ 基本的には子音字 1 字を 1 単位とする。
 - ・ 子音字が連続した場合、以下のスペリングが生じた際には、まとめて 1 単位とする。
- pp, bb, tt, dd, gg, ff, ss, zz, mm, nn, ll, rr, ch, ck, dg, dj, ed, gh, ng, ph, rh (語頭), sc (e, i, y の前), th, tch, ci, ge, gi, qu, si, su, sci ssi, ti

4. 調査結果

調査結果を表・図を用いて以下に示していく。なお、表・図中の C は子音、V は母音、- は長音記号と考えられるもの、+ は 2 つ以上の語が組み合わさっていること、= はハイフンでつなげて表記されていたことを表す。

4.1. 全用例の分類結果

抽出した全オノマトペの分類結果を以下に表で示す。なお、表 3 中の < > 内は各作品の全オノマトペ数に対する I: 臨時的な英語オノマトペの割合を表す。

表 3: 全用例の分類結果 (異なり語数)

作品	オノマトペ数 ／ページ数	I: 臨時的な英 語オノマトペ	II: 英語オノ マトペ	III: 準英語オ ノマトペ	IV: 一般英語 語彙
D	227／185	118<52.0%>	6	80	23
S	249／192	93<37.3%>	10	111	56
O	248／207	170<68.5%>	6	52	20
計	724／584	381<52.6%>	22	243	78

今回得られたオノマトペは、マンガ作品 3 作品 584 ページ中 724 例である。作品ごとに得られたオノマトペの全用例数に大きなばらつきはなかったが、分類別に見てみると、I: 臨時的な英語オノマトペが全体の半数を超える結果となった。また、作品ごとの全用例数に対する、I: 臨時的な英語オノマトペが占める割合は、最高で (O) の 68.5%、最低で (S) の 37.3% となり、作品によって臨時的なオノマトペが出現する度合いに大きな差が生じた。

4.2. 臨時的な英語オノマトペに見られる音韻構造

今回の調査で抽出した I：臨時的な英語オノマトペの総数は、381 例であったが、複数の作品で重複した例が 25 例あったため、これらについては重複分をまとめて 1 例として音韻構造を分析した。さらに、日本語版で既にアルファベット表記されていたものをそのまま英語版で用いたと考えられる例が 2 例 (DOM 「DOM」、BAKOOM 「BAKOOM」) があったため、これらについては分析の対象外とした。よって、ここでは、366 例の音韻構造を見ていく。今回抽出した I：臨時的な英語オノマトペ 366 例の音韻構造の内訳は以下のとおりである。なお、() 内の数値は、総数に対する割合を示す。

表 4: I：臨時的な英語オノマトペの音韻構造の内訳

音韻構造	数
母音のみで構成されるもの	11 (3.0%)
子音のみで構成されるもの	85 (23.2%)
母音と子音で構成されるもの	270 (73.8%)
合計	366 (100.0%)

4.2.1. 母音のみで構成される臨時的な英語オノマトペ

母音のみで構成される臨時的な英語オノマトペは 11 例しか見られず、全体の約 3% にとどまった。表 5 に母音のみで構成される臨時的な英語オノマトペの音韻構造を示す。

表 5: 母音のみで構成される臨時的な英語オノマトペの音韻構造

音韻構造	数	例「日本語版での表記」
VV	1	ooh 「オオッ」
VVV	1	aaah 「キヤー」
VVVV	2	aaaa 「あああああ」、aaaah 「あああああ」
VVVVV	2	aaaaah 「ああああああ」、oooooh 「ドオオオッ」
VVVVVV	3	aaaaaa 「あああああ」、aaaaaah 「ズッコーン」
VVVVVVVV	1	aaaaaaa 「あああああ」
VVVVV+VVVV+VVV	1	oooo oooo ooo 「オーオーオー」
合計	11	

母音のみで構成される臨時的な英語オノマトペは、全体数が少なく、明確な音韻構造の特徴はつかめなかった。しかし、その多くが人の叫び声や歓声を表す、「あああああ」「オオッ」などの間投詞的な日本語オノマトペに対応した例であった。そのため、音韻構造は多様であったが、すべての例に用いられる母音字は、a と o のみであった。

4.2.2. 子音のみで構成される臨時的な英語オノマトペ

子音のみで構成される臨時的な英語オノマトペは 85 例見られ、全体の約 2 割を占めた。以下に、単純な反復回数を除いた、オノマトペ 1 単位内の音韻構造の割合を図に示す。なお、1 例しかなかったものはまとめて「その他」として示す。

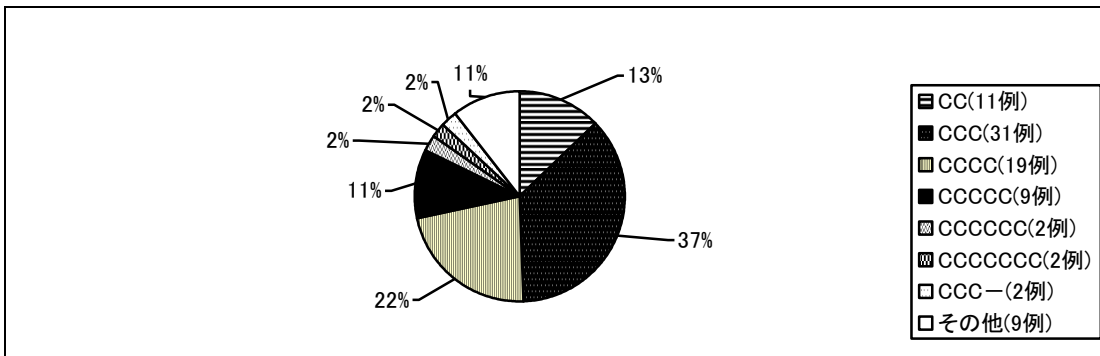


図 1: 子音のみで構成される臨時的な英語オノマトペ 1 単位内の音韻構造

オノマトペ 1 単位内の音韻構造を見てみると、CC 型は全体の約 13%、CCC 型は全体の約 37%、CCCC 型は全体の約 22%を占めており、CCC 型>CCCC 型>CC 型の順に子音のみで構成される臨時的な英語オノマトペが創出される傾向にあると考えることができる。

また、CC 型・CCC 型・CCCC 型を除く残りの 28%の用例については、2 点の特徴を見出すことができた。1 つ目は、**bzzzz**「ブーン」や **ppffffff**「プププーッ」のように音韻構造の 2 子音目以降に 3 つ以上の同一子音の連続を持つものである。同一子音の連続はジョーデン (1982) が既に指摘している特徴であるが、今回の調査で得られた 3 つ以上の同一子音連続は、**f, m, r, s, z** のいずれかであった。これらの子音字は、竹林・桜井 (1985) による英語の綴り字の規則によれば、いずれも **ff, mm, rr, ss, zz** のように、2 つの同一子音の連続が許される子音字であり、このことが 3 つ以上の同一子音連続を創出することに影響を及ぼしていると考えられる。この点から、ジョーデン (1982) が指摘した同一の子音連続は、全ての子音字において起こりうる現象ではない可能性が考えられる。2 つ目は、長音を表そうとする際に、ジョーデン (1982) が指摘したように同一の子音字や母音字を重ねるのではなく、**mrph—**「どよーん」のように、通常の英語表記では用いられない長音記号を使用する例である。これは、日本語版で使用されている長音記号の影響を大きく受けていると考えられ、日本語版を英訳したマンガ独特の表現である可能性も高い。

4.2.3. 母音と子音で構成される臨時的な英語オノマトペ

母音と子音で構成される臨時的な英語オノマトペは 270 例見られ、全体の約 7 割を占めた。以下に単純な反復回数を除いた、オノマトペ 1 単位内の音韻構造の割合を図に示す。1 例のみ現われる音韻構造が非常に多かったため、数が 5 例以下の音韻構造は「その他」としてまとめて図中に示す。

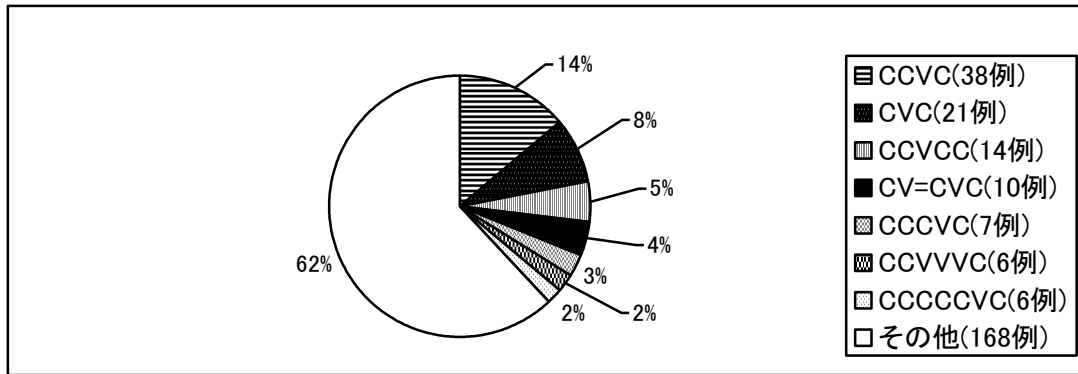


図2: 母音と子音で構成される臨時的な英語オノマトペ1単位内の音韻構造

今回得られた音韻構造と、2.3.に示した一般的な英語語彙に見られる音韻構造の頻度を比較してみると、一般的な英語語彙が CV 型>CVC 型>VC 型であるのに対し、臨時的な英語オノマトペでは、CCVC 型>CVC 型>CCVCC 型であった。CVC 型は両者に共通しているものの、一般的な英語語彙では出現頻度の低い CCVC 型や CCVCC 型は、臨時的な英語オノマトペ特有の音韻的特徴であると考えることができる。

また、母音と子音で構成される臨時的な英語オノマトペの中には、2点の特殊な形態を見出す事ができた。1つ目は、*cha-ching* 「カシャ」、*fa-wak* 「ザクッ」などの、ハイフンを含む音韻構造である。複数例得ることができた音韻構造のうち、ハイフンを含むものは13種類あった。このうち、田守・スコウラップ (1999) が英語オノマトペの音韻形態の特徴としてあげた、衝撃・爆発などを表す接辞 *ker-* (*ka-*) を用いている例は *ka-blash* 「ドゴオン」、*ka-klik* 「ガチャ」、*ker-ploosh* 「ザザーン」、*ka-wak* 「ドキヤ」、*ka-wap* 「ボカ」の5種類であった。これらの語は、接辞 *ka-* (*ker-*) に後続する部分が臨時的な語であるものの、接辞として語彙化している *ka-* (*ker-*) と結びつける事で、衝撃音を表すオノマトペとして十分に認識されうると訳者が考え創出したのではないかと考えられる。他の8種類については、ハイフンの前要素の語が A, B いずれの辞書にも記載されておらず、接辞としての機能が確認できなかった。しかし、この8種類の形態を見てみると、*ba-bamm* 「ババン」、*ba-bing* 「ギラギラ」、*cha-ching* 「カシャ」、*da-boom* 「どどんっ」、*da-doon* 「どーん」、*da-dum* 「ずどーん」、*fa-wak* 「ザクッ」、*ga-cheen* 「ガチーン」と、いずれも、ハイフンの前要素 CV の部分の母音が a であった。2つ目は、2つの異なる語が組み合わせられた音韻構造である。複数例得ることができた音韻構造のうち、2つの異なる語が組み合わせられたものは6種類で、*da dum* 「がらん」、*ta dum* 「ズーーン」、*bam slam* 「ばんっばんっ」、*ching klang* 「キキン」、*clatter clack* 「ガチャガチャ」、*klata klak* 「ババシッ」であった。これらの例を見てみると、前要素と後要素において、*t*→*d* や *ch*→*kl* のような第一子音の交替、*a*→*u* や *i*→*a* のような母音交替が起こっていることが分かる。これらの交替は、ジョーデン (1982) が英語オノマトペの音韻形態的特徴としてあげた反復のパターン (始めの部分と二つ目の部分の第一子音が交替、あるいは子音が付け加えられるもの・始めの部分と二つ目の部分で母音交替 (特に「狭母音→広母音」が多い) が起こるもの) に含まれるものである。

5. まとめと今後の課題

今回の調査で明らかになったことを以下にまとめる。

①臨時的な英語オノマトペがとりうる音韻構造の傾向

- ・子音のみで構成される音韻構造 — CCC 型>CCCC 型>CC 型
- ・母音と子音で構成される音韻構造 — CCVC 型>CVC 型>CCVCC 型

②臨時的な英語オノマトペがとりうる特殊な形態

- ・通常の英語表記では用いられない、長音記号の使用
- ・一般的な英語オノマトペの音韻形態的特徴としてあげられる、反復（母音交替・子音交替を伴う）や接辞（ka-, ker-など）の利用

③ジョーデン (1982) が既に指摘している「同一子音の連続」について

- ・2つの同一子音連続が綴り字の規則上可能な子音字 (ff, mm, rr, ss, zz, など) に限って起こりうる。

本研究では、マンガにおける臨時的な英語オノマトペの音韻構造に注目し分析を進めた。英語のオノマトペには明確な音韻形態的基準がない、とした先行研究が多い中で、複数の作品から同一の音韻構造を持つ用例を多数抽出できたという点で、今回の調査は有益なものであったといえるだろう。また、調査を進めていく上で、ジョーデン (1982) によるマンガにおける英語オノマトペの3つの特徴が、臨時的な英語オノマトペの創出にどれほど影響を及ぼしているのか、ということが疑問として生じた。今後は、今回得られたデータをもとに、3つの特徴の影響度についても分析していきたい。

参考文献

- ジョーデン, E. H. (1982) 「擬声語・擬態語と英語」 國廣哲彌編『日英語比較講座第4巻』, 111-140, 東京: 大修館書店.
- 竹林滋・桜井雅人 (1985) 『英語の演習第1巻 音韻・形態』 東京: 大修館書店.
- 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ (1999) 『日英対照研究シリーズ オノマトペー形態と意味一』 東京: くろしお出版.
- 御園和夫 (2001) 『英語の音節—構造と分節—』 東京: 北星堂出版.

参考辞典

- 松田徳一郎監修 (1999) 『リーダーズ英和辞典 第2版』 東京: 研究社.
- _____ (2007) 『マンガで楽しむ英語擬音語辞典 新装コンパクト版』 東京: 研究社.

参考資料

- Alexander O. Smith (2005) *DR.SLUMP* Vol.1 English translation. San Francisco: VIZ Media.
- DeConnick, Kelly Sue 訳 (2008) *SLAM DUNK*. Vol.1. English translation. San Francisco: VIZ Media.
- Lance Caselman 訳 (2003) *ONE PIECE* Vol.1. English translation. San Francisco: VIZ Media.

現代口語ビルマ語の助詞-kou_とゼロ助詞-φについて
—人物目的語の-φ標示を中心に—

五島俊太郎

(東南アジア課程ビルマ語専攻)

キーワード：ビルマ語、-kou_、ゼロ助詞、下降調化

0. はじめに

ビルマ語¹には、格助詞がゼロ形態で標示される現象が多く観察される。本稿ではその中から格助詞-kou_とゼロ助詞-φに関して、人物の目的語が-kou_ではなく-φで標示される場合について詳細に記述する。

例文番号、グロス、例文の訳、英語文献の日本語訳は、筆者による。ビルマ語の音転写は Sawada (1995) のものを使用し (脚注 1 参照)、出典にかかわらず表記を統一する。

1. 先行研究

先行研究として、Okell (1969)、藪 (1992)、Sawada (1995) の 3 つを扱う。

1.1. -kou_の機能

以下に、-kou_の表す意味機能²についての 3 つの記述をまとめる。各々の使っている用語は異なるものの、指す内容から同一のものと考えられるものはまとめ、以下の表に示す。

¹ ビルマ語は、シナ・チベット語族のチベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語群に属する、ミャンマー連邦の公用語である。ミャンマー連邦の総人口約 5000 万人の約 70% を占めるビルマ族が母語とし、その他の少数民族も第二言語としてビルマ語を話す。語順は SOV。文は動詞文と名詞文に分かれ、述語句が文末にくる。動詞文は動詞文標識 (Verb Sentence Marker=VSM) を伴う。口語と文語が存在し、文体によって区別される。本稿で扱うのは口語ビルマ語である。本稿では以下の表記を用いる。[] 内は IPA による。子音は全部で 33 個ある。/ p, t, s, c[tɕ], k, tx[t], ph[pʰ], th[tʰ], sh[sʰ], ch[tɕʰ], kh[kʰ], b, d, z, j[dz], g, dx[d], m, n, ny[n], ng[ŋ], hm[m̥m], hn[n̥n], hny[n̥j], hng[ŋŋ], h, l, hl[l̥l], w, hw[mw], y[j], hy[ɕ], -[ʔ] / である。子音と母音の間に入る介子音には / -y-[-j-] // -w- / を挿入する。後続の音に同化する鼻音 / N / はすべて / n / で表記する。母音には / a, ei[e], i, ou[o], u, e[e], o[ɔ] / の 7 種類がある。また、母音が軽声化することがあり、この場合の母音は後ろに声調記号を伴わないことで表す (例: be^txu_ > ba^txu_ 「誰」)。この軽声化母音には声調・母音の対立が無い。声調は、下降調 / -[N] /、低平調 / -[H] /、高平調 / -: [T] ~ [V] / の 3 つがある (高平調は、「高く平らで長く、末尾で下降する。ただし、音節連続の先行音節と文中の音節においては、下降しない」(藪 1992: 568) ため、2 種類表記した)。これに声門閉鎖音節を加えて四声調とする見方もある。声調の呼称は加藤 (2001) による。形態素境界は / - / で表すが、後続音が有声化する場合は / ^ / で表す。

² Sawada (1995) は正確には「-kou_の表す意味機能」ではなく「-kou_のマークする名詞句の種類」であるが、ここでは便宜上意味機能としてまとめる。

表 1 : -kou_の機能・まとめ

	Okell (1969)	藪 (1992)	Sawada (1995)
A	着点	向格 (空間的着点)	着点句
A'	(強調) ³	? ⁴ (時間的未来)	-
B	直接目的語	対格	非主語の主題
C	間接目的語	与格	受領者
D	配分的意味	-	-

同じアルファベットの欄に書かれているものが、同一の意味機能と考えられるものである。藪 (1992) の「時間的未来」は、時間的な未来を表す -kou_ は強調の用法のひとつであるという Okell (1969) や Sawada (1995) の記述を鑑み、本稿の対象から除外する。Okell (1969) の「配分的意味」についても、Sawada (1995) で「数量詞句内の構成素としての使用である」(Sawada 1995: 156) として扱っていないのになら、本稿では対象外とする。したがって A, B, C の 3 つの機能が残り、その 3 つの機能は 3 つの記述すべてで触れられていることがわかる。

1.2. -kou_使用の要因

-φではなく -kou_ が使用される要因については、Okell (1969)、Sawada (1995) とともに、「あいまいさ回避」と「強調」の二つをあげている。このうち、より詳細に触れている Sawada (1995) の記述を、以下にまとめる。

表 2 : Sawada (1995) による -kou_ の機能のまとめ

-kou_ のつく名詞句	機能
生物の非主語の主題 ⁵ ・受領者	あいまいさ回避
無生物の非主語の主題	強調
着点句	着点標示

藪 (1992) では、「主格、対格、与格、向格は、ゼロ助詞によって示される場合が少なくない」(藪 1992: 586) と述べられているのみで、-kou_ が使われた場合との違いにまでは言及されていない。唯一 -kou_ と -φ に関する記述と思われるのは、「ひとつの単文において、(1) 与格・対格、(2) 向格・対格の組み合わせが存在することが考えられるが、格助詞 -kou_ は、ひとつの単文中にひとつしか用いられない。そのため、もうひとつは、ゼロ助詞を用

³ Okell (1969) では、subordinate marker の -kou_ ではなく、sentence-medial postposition の -kou_ の強調の機能のところで "especially with expressions of time" (Okell 1969: 326) と述べており、藪 (1992) の言う「時間的未来」と同じものについての記述と考えられるため、表に載せた。

⁴ 藪 (1992) が時間的未来を表す -kou_ を格助詞と捉えているのかどうかは不明である。格助詞の -kou_ に関する記述の箇所での -kou_ について説明しているが、例文に〔対格〕や〔向格〕などの記述がない(空間的着点の例には〔向格〕とグロスがある)ため、ここでは「?」とした。

⁵ Sawada (1995) はビルマ語に「目的語」(object) を認めず、それに当たるものを「非主語の主題」(non-Subject theme) と表現している。

いることになる」(藪 1992: 588) という部分である。しかし、以下のような例が存在することから、この記述は完全に正しいとはいえない。

- (1) maun_maun_ man:dalei:^kou_ maun_ba.^kou_/*-φ hlu'te_ (Sawada 1995: 179)
(人名) マンダレー-KOU (人名)-KOU 派遣する-vsm
「マウン・マウンはマンダレーにマウン・バーを遣った」

1.3. -kou_と関連する下降調化について

ビルマ語における下降調化現象は、Allott (1967) や Okell (1969) などさまざまな機能を持つことが指摘されている。その中でも代表的なものとして、下降調化による「所有の用法」(Allott 1967: 159, Okell 1969: 19, 58 etc.) があるが、ここでは-kou_と関連する下降調化についてのみをまとめる。

Okell (1969)

- ・目的語が人物を指示する語で、なおかつ下降調⁶になりうる音節 (高平調か低平調の音節 (Okell 1969: 18)) で終わるとき、-kou_は通常は下降調を引き起こす。下降調に変化した場合、-kou_がない形も許される。

藪 (1992)

- ・人称代名詞およびそれに準ずる普通名詞・固有名詞が、属格、対格、与格、於格の関係に立つとき、それ自体が一定の格表示をとる。格表示は、単語末尾の音節の母音が緊喉化する (第3声 [去声⁷] になる) ことによる。入声音節は、そのまま変化を受けない。上声音節の緊喉化は、義務的でない。

Sawada (1995)

- ・低平調で終わる人称代名詞や親族名称、あるいは人名などが非主語の主題に用いられたとき、最後の音節が下降調になる。下降調化した"Oblique" form の場合、-kou_の使用は任意である。

下降調化する名詞については、3つの記述はすべて人物に関するものであるという点で一致している。ただし、具体的な下降調化の条件にはずれが見られる。便宜上、低平調を1、高平調を2、下降調を3、声門閉鎖音節を4として、それぞれの記述をまとめると、以下のようになる。

⁶ Okell (1969) の言う、creaky tone, heavy tone, level tone を、それぞれ加藤 (2001) にならい、下降調、高平調、低平調と訳すことにする。

⁷ 藪 (1992) での声調の呼称と本稿での呼称の対応を以下に示す。左が藪 (1992)、右が本稿である。【平声：低平調、上声：高平調、去声：下降調、入声：声門閉鎖】

表 3：各記述の下降調化の条件

Okell (1969)	藪 (1992)	Sawada (1995)

Okell (1969) は 1 と 2、藪 (1992) はすべて、Sawada (1995) は 1 のみが下降調化するという主張である⁸。藪 (1992) は、形式上の変化のあるなしにかかわらず声調変化は起きているという立場だと思われる。

下降調化した形では-φによる標示も可能であるという主張は、3つの記述すべてで共通して見られる。

2. 問題提起

Okell (1969) と Sawada (1995) では、-kou_にあいまいさ回避の機能がある、としている。つまり、ひとつの単文内においてある要素が主語であるか目的語であるか判断できない場合に-kou_が用いられる、というものである。Sawada (1995) では、対象が人間の名詞句の場合このあいまいさ回避の必要があるとし、それが-kou_や下降調化によってなされることがある、と述べられている。

ここで疑問となるのが、目的語が人間の名詞句でも、あいまいさ回避の必要がないケースでは-φ標示も認められるのではないかということである。これに関して、Soe (1999) で似たような指摘がなされている。

- (2) txu.-mein:ma. kho_ ma-la_ ^phu:-la: (Okell 1969: 329)
 彼^[F]妻 呼ぶ [否定]-来る-vsm-[疑問]
 「彼の妻 () 呼んでこなかったのか」

例文 (2) は、これ単独では「彼の妻が (誰かを) 呼んでこなかった」のか、「彼の妻を (誰かが) 呼んでこなかった」のかが判断できない (これは Soe (1999: 104) の例文であるが、出典元は Okell (1969: 329) である。Okell (1969) ではこの文の訳を "Won't (he) bring his wife?" としている)。ところが、前に「ポー・ポーは来た」という文が与えられると、この文は「(ポー・ポーが) 彼の妻を呼んでこなかったのか」と解釈され、逆に「ポー・ポーは来なかった」という文が与えられれば「彼の妻が (ポー・ポーを) 呼んでこなかったのか」と解釈されるという。Soe (1999) は、それ単独では意味のあいまいな文も、上記のように特定の文脈が与えられれば意味の判断が可能になることを指摘している。

⁸ 卒業論文では下降調化の条件についても調査・考察したが、紙幅の都合上、ここでは割愛する。

⁹ グロスで「[F]」を付した名詞は、下降調化していることを表す。

本稿でも、人物の目的語が-φによってマークされていても認められる文について検討を試みる。具体的には、Soe (1999) において指摘されている「文脈」の関与のほか、「常識から判断可能か」という観点からも-φ標示が可能なケースがあると考えられる。前後の文脈がなくても、「どちらがどちらを」という点を常識的に判断できる場合である。次の例文を見てほしい。

- (3) di_-mane' aphei_ cama. yai'-te_ (コンサルタントによる作例)
 この朝 父親 私(女) 殴る-vsm
 「今朝、父親が私を殴った」

この例文 (3) は、目的語に当たる cama、「私」が-kou_で標示されていないにもかかわらず、許容される。それは、ミャンマー社会において「父親が娘を殴る」ことは想像できても「娘が父親を殴る」ことが極めて想像しづらいため、「娘が父親を殴る」という解釈が排除されるということであろう。

3. 調査方法

目的語が-φ標示される場合について詳しく調べるため、調査を行った。筆者が作成した文章を、許容度によってチェックしてもらった。許容度を記入してもらった後、それについてインタビューを行った。なお、コンサルタントはビルマ語を母語とする 40 代のミャンマー人男性である。

4. 質問内容と結果

以下、具体的な文とその許容度を抜粋して示す。文の右に示したものが判断してもらった許容度である。○は「使う」、△は「使わないが許容できる」、×は「まったく許容できない」をそれぞれ表している。

4.1. 文脈からも常識からも判断されない文

A.~D.はいずれも人物の目的語が下降調化しているが、A.とC.は-kou_、B.とD.は-φで標示されている点で異なる。また、A.とB.はSOV語順、C.とD.はOSV語順である。

- A. cano_ nyi_nyi.^kou_ yai'-te_ (○)
 僕 (人名)^[F] -KOU 殴る-vsm
 B. cano_ nyi_nyi.-φ yai'-te_ (△)
 「僕はニー・ニーを殴った」
 C. nyi_nyi.^kou_ cano_ yai'-te_ (○)
 D. nyi_nyi.-φ cano_ yai'-te_ (△)
 「ニー・ニーを僕は殴った」

結果は、-kou_標示されている A.と C.の許容度が高かった。

4.2. 文脈によって判断可能と思われる文

【状況 (文脈)】 (ma.su.^ka. ngou_-nei_^te_ kou_sou:^ka.^to. sei'-shou:-nei^te_)
 (人名)-が 泣く-いる-vsm (人名)-が-[対比] 心-悪い-いる-vsm
 「マ・スーが泣いている。コー・ソーは怒っている」

E. kou_sou: ma.su. yai'-txa-la: (○)
 (人名) (人名) 殴る-vsm-[疑問]

「コー・ソー () マ・スー () 殴ったのか」

F. ma.su. kou_sou: yai'-txa-la: (×)
 「マ・スー () コー・ソー () 殴ったのか」

EとFは、まずある状況 (文脈) があり、それに続くものとして人物の目的語が-φ 標示で出てくる文である。状況 (文脈) は「(女) が泣いている。(男) は怒っている」というもので、「(男) が(女) を殴ったのか」という文が続く。Eは許容されたが、主語と目的語の語順を入れ替えたFはまったく許容されなかった。

4.3. 常識によって判断可能と思われる文

G. di_-mane' aphei_ cama. yai'-te_ (○)
 この朝 父 私 殴る-vsm

「今朝、父 () 私 () 殴った」

H. di_-mane' cama. aphei_ yai'-te_ (△)
 「今朝、私 () 父 () 殴った」

Gは例文 (3) と同じものである。Hは主語と目的語の語順を入れ替えたものである。結果、EとFの文と同じく、目的語が主語より先にくる文では許容度が下がった。

5. 考察

5.1. 人物が-kou_ 標示される場合

人物を指す名詞句が直接あるいは間接目的語になり、なおかつそれが-kou_ 標示される場合は、-kou_ がその名詞句と他の名詞句の間の差異化、もしくはあいまいさ回避の機能を果たしている。人物が-kou_ 標示されるのは、もっとも一般的な現れ方である。

5.2. 人物が-φ 標示される場合

人物の-φ 標示が認められるのは、下降調化によるものと下降調によらないものの2つの場合がある。

[1] 下降調化によるもの

下降調化した名詞句は、-φ による標示も可能であるというのが、先行研究の共通した主張だった。

調査の結果を見る限り、確かにその主張に間違いはないようである。ただし、あくまで「可能である」というだけで、4.1の結果からわかるように、下降調化していても-kou_を伴う形の方が受け入れられやすい。

[2] 下降調化によらないもの

下降調化していなくても、人物の-φ標示が許容される場合がある。それらは下降調化がなくても聞き手が判断可能なものであり、以下の2つに分けられる。すなわち

1. 文脈から判断できるもの

2. 常識から判断できるもの

の2つである。

ただし、文脈から判断できるものと常識から判断できるもののいずれも、語順による制約は受ける。すなわち、主語（とみなされると思われるもの）が目的語（とみなされると思われるもの）の前にある場合の方が、逆の語順の場合よりも許容されやすい。このことは4.2.および4.3の結果から明らかである。

5.3. 人物の標示に関するまとめ

これまで見てきたように、人物が目的語の文において文意を決定する上でその要因となるものがいくつかある。それらは

- ・マーキング (-kou_, -φ (+下降調化))
- ・文脈
- ・常識
- ・語順

の4つである。5.の結論として、これらの優先順位の決定を試みる。

今回の調査結果からだけでは、文脈と常識の優先順位を決定することは難しい。文脈と常識が衝突する文（文脈から判断できる関係と常識から判断できる関係が正反対の文）を訊いていないからである。ただし、文脈は常識よりも優先されることが予想される。文脈の方が個別性・場面性が高いからである。常識が文脈によってキャンセルされることは考えられても、文脈が常識によってキャンセルされることは考えにくい。よって本稿では、文脈は常識よりも優先されるという立場をとる。

語順に関しては、ビルマ語の基本語順を確認しておく必要がある。ビルマ語においては述語句のみが文の必須要素であり、verb-finalな言語であるということしか言えない。ただし、類型論的に verb-finalな言語のほとんどはSOV語順であり、Sawada (1995: 178) や Wheatley (1990: 124) などいくつかの記述で指摘されているように、SOVの並びがOSVの並びより標準的と受け取られるのは確かなようである。よって、本稿ではビルマ語の基本語順はSOVであるとみなす。

4.2.および4.3.でOSV語順の文がSOV語順よりも低い許容度を示していたことから考えて、語順による制約は文脈や常識よりも文意決定に強い力を持っていると言える。

4.1の結果から、-kou_標示は-φ標示(+下降調化)よりも強い力を持つ。-φ標示(+下降調化)が語順よりも強い力を持つことも4.1の結果から分かる。ゆえに-kou_による標示は、他のどの要因よりも優先されると言える。

よって、文意を決定する上で考慮される要因は、以下の順に強い力を持っている、と結論づけられる。

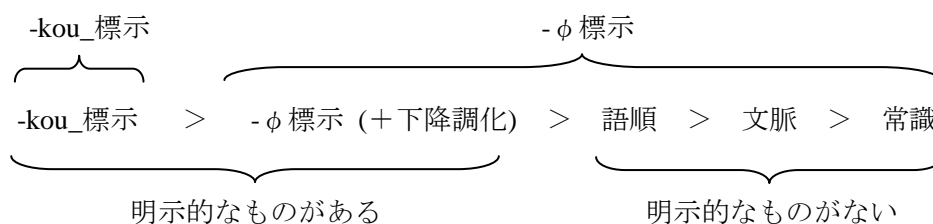


図1：他動詞文における文意決定の要因の階層構造

6. 今後の課題

今後の課題としては、無生物と着点につく-kou_と-φについても問題提起し、調査を行って一定の記述をすることが考えられる。また、-kou_と関連する下降調化だけでなく、Allott (1967) や Okell (1969) などで触れられている下降調化現象全体について考察し、より深く記述することが求められる。

参考文献

- Allott, Anna J. (1967) "Grammatical Tone in Modern Spoken Burmese." *Wissenschaftliche Zeitschrift der Karl-Marx-Universität Leipzig, Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe* 16: 157-161, Leipzig: Der Rektor der Karl-Marx-Universität Leipzig.
- 加藤昌彦 (2001) 『エクスプレス ビルマ語』東京：白水社
- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』東京：国際語学社
- Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*, vols. I - II. London: Oxford University Press.
- Sawada, Hideo (1995) "On the Usages and Functions of Particles -kou_/ka. in Colloquial Burmese." *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax* 41: 153-187, Osaka: National Museum of Ethnology.
- Soe, Myint (1999) *A Grammar of Burmese*. Ph.D. Dissertation, University of Oregon.
- Wheatley, Julian K. (1990) "Burmese." in B. Comrie (ed.) *The Major Languages of East and South-east Asia* 106-126, London: Routledge.
- 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 (第3巻世界言語編)』567-610, 東京：三省堂

中国語における「点儿 (dianr)」とそれが共起する語との相関関係

栄山 如

(東アジア課程中国語専攻)

キーワード：中国語、副詞、共起、使用頻度、下位分類

0. はじめに

本稿では、普通話における“点儿 (少し)”の現れ方と、その同一文中に出現する語との共起について論じる。

“点儿”は、量詞の中でも特殊な性格を示す。数量や程度、名詞を修飾する際は名量詞となるが、動詞や形容詞に後続すると、名量詞も程度を表すことになる。この現象はやや複雑で、動詞および形容詞の語彙的特徴と密接に関係している。

本稿では、まず初めに“点儿”の概説を行い、次に句中での使用状況をコーパスを用いて分析し、最後に他の語や語句との関連性をみていく。同時に、“点儿”の使用における制約がどのようなものであるのかを考えていく。

1. 先行研究

表 1: 先行研究のまとめ

唐先容・加藤久雄 (2003)
<ul style="list-style-type: none"> “有点儿”類と共起する形容詞の性質の関与 “有点儿”が多く使用される根拠は構文上の制約にあり、性質形容詞が述語になる場合、必ずしも程度副詞の役割を果たすとは限らない。
大島吉郎 (2004)
<ul style="list-style-type: none"> 対話文中における“有点儿”の機能を研究 (実用例と共起状況を調査) 動詞との共起は、心理活動・思考・判断・身体部位の動作・身体部位の状態の意味を意味するものが多くみられる。
卢涛 (2005)
<ul style="list-style-type: none"> 副詞全般に関する誤用例と、それに対する正確な用法 依頼の語気を示したい場合、通常の疑問句に点を挿入する。“一点儿”は量を表す副詞であり、基本的に述語の後に置かれる。また、マイナスの状態、あるいは状態の程度を表す際は、“有点儿”を用いる。“有点儿”は述語の前に置かれ、限定された程度を修飾する。

謝平 (2007)
<ul style="list-style-type: none"> 日本語の「ちょっと」と中国語の“有点”における用法・共起制限を分析 <p>“有点”は動作動詞と共起できない。中性的・マイナスの意味を持つ性質形容詞・心理動詞との共起のほか、一部の動詞と状態形容詞とも共起。モダリティを表す場合、「勧誘・要求」を表せない。主観性の強い「願望・意思」「判断・評価」を表す場合、高い程度を表すことも可能。</p>

表 2: 先行研究における“点儿”の分類

不定量詞	黎锦熙、刘世儒 (1959) / 房玉清 (1992) / 卢福波 (1996)、刘月华 (2001)
部分量詞	赵元任 (1979)
疑量詞	郭绍虞 (1979) / 何杰 (2000)
名量詞・程度量詞	刘叔新 (2002)

表 2 に示すように、先行研究には見解に違いがあり、「不定量詞」と「その他の量詞」の二つに大きく分かれていると分かる。本稿では共起の出現結果から、どのような基準に基づいて下位分類ができるのかを考える。

2. コーパス資料による調査

2.1. 調査方法

「中日対訳コーパス (試用版) CD-ROM (2001.6) (北京日本学研究中心)」という小説コーパス資料に基づいて、共起する語や語句、および、出現頻度を調査する。コーパスを構成する小説 (19 作品) の一覧については稿末に示した。まず、Em editor でコーパスを読み込み、“点儿”にマーカーをつける。次に、マーカーがついた原文を Microsoft Excel に各文一行ずつに振り分ける。その後、“点儿”の前後関係が見やすくなるよう、“点儿”を縦列で揃える。共起する語や語句をみるために、同一文中に共起する語や語句の品詞を右端に入力する。最後に共起する語や語句を品詞順に並べ替えて、その頻度を計算する。

2.2. 調査対象

本稿で扱う“点儿”の諸表現には、接尾辞“一儿 (er)”がつくものとそうでないものがある。相原茂 (2002) によると、「“一儿 (er)”は接尾辞であり、単語につく発音変化を“儿化 (er2 hua4)”日本語では“r 化”という。北方方言を土台にした共通語に見られ、とくに北京方言では顕著である。“r 化”のニュアンスと品詞区別機能に関しては、名詞について語気を和らげる働きをもつ。また、品詞を区別する機能を持ち、主に動詞を名詞化する。」とある。

本稿では、発音変化に関する詳細や語気を和らげる働きに関する詳細は、研究と直接の関わりがないため言及しない。本稿で現れる“r 化”は、主に口語において用いられる意味を持たない接尾辞とみなし、重複した表現は手作業で調査対象から外した。

2.3. 調査結果

“点儿”を含む語句を用いた例文のコーパス検索結果を以下に示す。その後、“一点儿”“有点儿”“差点儿”がそれぞれ、どのような形式で出現したのかをみる。

表 3: 19 作品に出現した“点儿”を含む語句の用例数

書名	ファイル名	“有点儿”を含む語句
遙かなる大地	34 chadui.txt	8
棺を蓋いて	35 guaiguana.txt	0
丹鳳眼	36 guaiguanb.txt	3
胡同	37 guaiguanc.txt	6
女の人について	38 gynr.txt	5
応報	39 hgl.txt	17
赤い高粱	40 hgl.txt	1
輝ける道	41 jgdd.txt	45
家	42 jia.txt	13
彷徨	44 pnghuag.txt	3
青春の歌	45 pczg.txt	39
棋王	46 qigchng.txt	2
傾城の恋	47 qiwang.txt	0
北京女医	48 rdzn.txt	5
霜葉紅似二月花	49 syhsryh.txt	23
天雲山伝記	50 tysheq.txt	8
小鮑莊	51 xiangzi.txt	14
駱駝祥子	52 xiangzi.txt	12
鐘鼓楼	53 zgl.txt	22
合計		226

19 作品に出現した“点儿”を含む語句は、合計 226 例あった。うち、全く出現しなかったのは 2 作品（「棺を蓋いて」、「傾城の恋」）である。このような用例数の違いは、個々の小説の内容が関係していると考えられる。“点儿”は、口語的な形式であるので、小説など会話の多い書籍で頻出した。

表 4: 19 作品に出現した“点儿”を含む語句の出現形式・用例数・割合

語句	共起する主な品詞	出現形式	用例数	割合
一点儿	動詞との共起	他動詞 + ~	16	7.1
		状態動詞 + ~	10	4.4
		多/少/早/晩 + ~	4	1.8
	形容詞との共起	形容詞 + ~	4	1.8
		形容詞 + ~ + 了	4	1.8
		形容詞 + 了 + ~	4	1.8
		形容詞 + ~ + 的	8	3.5
		形容詞 + ~ + 形容詞	4	1.8
	動詞と形容詞との共起	形容詞 + ~ + 動詞	14	6.2
		動詞 + 形容詞 + ~	16	7.1
有点儿	~ + 性質形容詞	44	19.5	
	~ + 状態形容詞	28	12.4	
	~ + 動詞 + 形容詞 + 了	19	8.4	
	~ + 願望の助動詞 + 動詞	27	11.9	
差点儿	~ + 動詞	16	7.1	
	~ + 形容詞	8	3.5	
合計			226	100

この表から明らかになることは、“有点儿”の用例数が他のそれに比べ多いということである。以下、特に頻出した“有点儿”の例文を示す。

“有点儿” + 性質形容詞

汉语发音 **有点儿** 难。
 Chinese pronounce difficult.形
 (中国語の発音は少し難しい。) -44 pnghuag.txt 734

“有点儿” + 状態形容詞

“有点儿”の後ろは、一般に状態動詞しか後続しないとされている。状態動詞とは、心理状態の動詞と生理状態の動詞をさす。

以下、心理動詞と生理動詞の例をそれぞれ示す (唐先容・加藤久雄 (2003))。

- 生理動詞 : 困 (こまる)、病 (やむ)、饿 (おなかがすく)、醉 (酔う) など
 心理動詞 : 想 (思う / (~がなくて) 寂しく思う)、怀疑 (疑う)、了解 (分かる)、

关心 (関心を持つ)、同情 (同情する)、爱 (愛する)、恨 (うらむ)、喜欢 (好む)、讨厌 (嫌う)、希望 (きぼうする)、重视 (重視する)、懂 (理解する)、明白 (理解する) など

“有点儿” は心理動詞の前におかれ、程度が低いことを示す。

我 有点儿 想 家。
I miss.動 home
(私は少し家が恋しい。) -42 jia.txt 85

“有点儿” + 願望を表す助動詞 + 動詞

“有点儿” は願望を表す助動詞 “想 (～したいと思う)” または “愿、愿意 (喜んで～する)” の前におかれる (“要 (～したい)” の前にはおけない)。この場合、願望の度合いが低いことを表す。

我 有点儿 想 去游泳, 你 去 吗?
I want to go swimming.動 you go.動 疑問
(私はなんだか泳ぎに行きたいんだけど、君も行く?) -51 xbz.txt 38

2.3.1. “点儿” とアスペクト (“了” “过” “着”) との相関関係

2.3.1.1. “点儿” と “了”

“(一) 点儿” “有点儿” “差点儿” を用いる句では、“了” を使用している。

I) “(一) 点儿” と “了”

我 买 了 点儿 水果。
I buy.動 完了 fruit
(私は少しフルーツを買った。) -37 guiaguanc.txt 152

II) “有点儿” と “了”

有点儿 累 了。
tired.形 完了
(少し疲れた。) -42 jia.txt 389

III) “差点儿” と “了”

A: 差点儿 忘 了 带 作业本。
forget.動 完了 bring.動 homework.名
(もう少しで宿題を忘れるところだった。) -39 hdbxr.txt 24

B: 差点儿 死 了。
die.動 完了
(もう少しで死ぬところだった。) -41 jgdd.txt 23

“(一) 点儿”の例文では、完了の“了”と共に用いられた場合に程度量を示す例文が確認された。また、名量詞・形量詞のどちらも示すことができるとわかった。“有点儿”に関しては、消極的な内容に用いられていると考えられる。話者の意志・願望・期待とはずれた結果が生じたことを表している。これに関しては、先行研究の多くが指摘している「“有点儿”は、話者の意図に反して発生した状況に対して用いられる」という説明が確認できたといえる。“差点儿”に関しては、肯定の場合に“了”と共に起することで、より肯定の意味が強まることが確認できた。

2.3.1.2. “点儿”と“过”

“一点儿”は一般に肯定の句で用いられ、否定の句においては、“一点儿也没有”の形で用いられる。

我 以前 学 过 **一点儿** 英语。

I before learn.動 經驗 English

(私は以前**少し**英語を勉強したことがある。) -41 jgdd.txt 75

我 **一点**也没 学 过 英语。

I 否定 learn.動 經驗 English

(私は**少し**も英語を勉強したことがない。)

経験を示す“过”とともに用いられることで、経験した動作量が“一点儿”を用いて示されている。この例文からは、「英語を勉強したことはあるが少しである。」と示されていることから、経験はあるが、実際の英語の習得状況や成果までは示されていない。

2.3.1.3. “点儿”と“着”

“着”は動作の継続を示し、進行の意味を表すこともできる。しかし、“点儿”の句中では進行の意味を示すことはできず、結果の継続を表す。

2.3.2. “点儿”と特殊な句との関係

今回の調査において用例を収集するなかで、特徴的な語句との共起の例が一定以上見出された。ここで扱うものは、兼語句、受動句、“把”構文、命令文・願望文である。本節では、こうした特殊な句における“点儿”“有点儿”“差点儿”のふるまいを観察する。その際、否定文・疑問文・命令文などの句における現れ方や語法などに注目する。

2.3.2.1. 兼語句

兼語句とは、名詞が動作主を表すタイプの、動詞あるいは動詞性構造が連続した句である。特徴は、動詞の後の名詞が目的語であり、同時に後に出てくる動詞にとっては主語であるというように、二重の役割を備えているところにある(朱徳熙(1981: 217))。

- ① “一点儿”は、兼語句中において命令文・肯定句で用いられることが多く(13例中13例)、否定句中では用いられない。
- ② “有点儿”は、兼語句中において、“叫”や“让”の前で句を修飾し、また、兼語成分の後に兼語成分の心理状態や生理状態を修飾している例が多くみられた(11例中10例)。“有点儿”も兼語句の否定句では用いることはできない。
- ③ “差点儿”は兼語中において、常に“叫”や“让”の前で句を修飾し、兼語成分の後に置かれることは極めて少ない(8例中1例)。また、“一点儿”“有点儿”とは異なり、“差点儿”は兼語句の否定句において用いることができる。

2.3.2.2. 受動句

- ① “(一) 点儿”を伴う受動句は多く肯定文で用いられ、否定句や疑問句で用いることはできない。完全否定の“一点儿也不(没)”は受動句で現れる。
- ② “有点儿”を伴う受動句では、肯定句あるいは疑問句が一般的である。否定句では用いられない。
- ③ “差点儿”を伴う受動句には特に制限はなく、肯定句・否定句・疑問句のすべてにおいて用いることができる。

2.3.2.3. “把”構文

- ① “一点儿”を伴う“把”構文は肯定句であり、否定句や疑問句では用いられない。
- ② “有点儿”を伴う“把”構文も一般には肯定句において用いられ、否定句や疑問句では用いられない。“有点儿”は“把”の前後どちらにもおくことができる。
- ③ “差点儿”を伴う“把”構文は、肯定句・否定句のどちらにも用いられ、肯定句中の“差点儿”は“把”の前後どちらにもおくことができるが、否定句中では、“差点儿”は“把”の後ろにしか置けない。

2.3.2.4. 命令文・願望文

“有点儿”と“差点儿”は命令文中で用いることができない。“(一) 点儿”は命令文において、“動詞+(一) 点儿!”で示される。動詞の前に“多”“少”や副詞の“再”に後続する形であれば使用できる。その他の動詞+“点儿”の後に再び述語が現れるとき、命令句は用いることができる。

形容詞と動詞との共起に関しては、思考・判断・身体部位の動作・身体部位の動作の状態の意味を有するものが多く共起するとわかった。“有点儿”と性質形容詞の共起に関しては、比較・対照の判断として多く用いられていた。また、状態形容詞は具体的な状況描写に用いられ、文を成立させるためにも命題に対する話し手の認定の気持ちを表す部分が必要、という考えに関しては、同一文中での共起がなくとも、前後の文脈にその内容と判断できる文があった。「願望・意思」「判断・評価」を示す場合、高い程度を示すとしていたが、今回の調査では、必ずしも高い程度を示すとは結論付けられないと考えた。高い程度を表す例文も確認できたが、多くが相手の依頼や意見に対して賛同でき

ない場合、語調を弱めるものとして使用されていると考えられるためである。

表 5: “(一) 点儿”“有点儿”“差点儿”の文中における形式と意味のまとめ

表現	形式	意味
一点儿	形容詞の後	後続する名詞の数量が少ないことを示す。
有点儿	形容詞の前	形容詞の性質や状態が良くないことを示す (不本意・不満足・好きではない事柄に使用)。
	動詞の前	
	状態動詞の前	程度差を示す (不本意等の意味はもたない)。
差点儿	動詞の前 ※命令文では用いない	肯定文の形で否定の意味を示す。

3. おわりに

卒業論文では、“点儿”が出現する句の形態や句中での語彙の相関関係を分析することどまった。“点儿”と動態助詞の関係性や“点儿”の下位分類と語彙特徴の分析など、本稿でとりあげた形式以外にも、実際に使用されている形を検証したい。また、語用論的な“婉曲”や“語調のやわらげ”を示すような形式に関しても、詳しく分析を進め、体系的な分析を行っていくことが課題である。

【参考文献】

- 《日本語文献》大島吉郎 (2004) 「対話文中における“有点儿”の機能」『語学教育研究論叢 21号』: 1-19. 大東文化大学 / 謝平 (2007) 「日本語の“ちょっと”と中国語の“有点”について」『ことばの科学 20号』: 85-100. 名古屋大学言語文化研究会 / 朱德熙著, 杉村博文・木村英樹訳 (1981) 『文法講義』東京: 白帝社 / 唐先容・加藤久雄 (2003) 「中国語・日本語パラレルコーパスを用いた小さな程度を表す副詞に関する考察」『奈良教育大学紀要 第52巻 第1号 (人文・社会)』: 1-16. 奈良教育大学 《中国語文献》郭绍虞 (1979) 『汉语语法修辞新』商务印书馆 / 赵元任著 (1979) 吕叔湘編 『汉语口语语法』商务印书馆 / 黎锦熙・刘世儒 (1959) 『汉语语法教材』商务印书馆 / 何杰 (2000) 『现代汉语量词研究』民族出版社 / 陆俭明 (2005) 『现代汉语语法研究教程 (第三版)』北京大学出版社 / 李宇明 (2000) 『汉语量范畴研究』华中师范大学出版社 / 刘月华 (2001) 『实用现代汉语语法 (增订本)』商务印书馆 / 卢福波 (1996) 『对外汉语教学实用语法』北京语言大学出版社 / 卢涛 (2005) 「汉语副词使用错误分析」『広島大学総合科学部紀要 V 言語文化研究 31号』: 159-185 / 刘叔新 (2002) 『现代汉语理论教程』高等教育出版社 / 马庆株 (2005) 『汉语动词和动词性结构』北京大学出版社 / 朱德熙 (1959) 『说“差一点”』中国语文 / ____ (1979) 『汉语句法中的歧义现象』中国语文 / 陈保亚 (1999) 『20世纪中国语言学方法论』山东教育出版社

【用例出典】

「中日対訳コーパス (試用版)」CD-ROM (2001.6) (北京日本学研究中心)

愛知県尾張方言における終助詞の記述的研究—「ンダッテ」を中心に—

高見 あずさ

(日本課程日本語専攻)

キーワード：愛知県尾張方言、ンダッテ、終助詞、ワ

0. はじめに

本研究は、実例に基づいて、愛知県尾張方言¹の終助詞²「ンダッテ」の用法を明らかにし、その意味・機能を記述することを目的としている。

(1) キョー ブカツダッタンダッテ メッチャ ツカレタ

(1) の「ンダッテ」は「(私は) 今日部活があった。とても疲れた。」という意味で用いられており、いわゆる共通語の同形式「～(んだ) って」とは用法が異なる。

卒業論文では、尾張方言話者3世代を対象に談話の録音調査を行い、各談話の文字化資料を作成した。それを基に「ンダッテ」の使用話者層を確認し、形態統語的特徴およびその用法を記述した。さらに、談話に現れた「ンダッテ」以外の終助詞と対比することで、「ンダッテ」の意味・機能をより客観的に記述した。最後に、「ンダッテ」のピッチを測定し³、尾張方言話者による「ンダッテ」の発音と用法との関係を考察した。

本稿は、そのうち「ンダッテ」の意味記述に関する2009年の調査結果を中心にまとめたものである。表・例文番号は筆者によるものであり、共通語は漢字かな混じり、方言はカタカナで表記する。

1. 先行研究

「(んだ) って」に関する研究として、愛知県方言の「～ダッテ」を扱った井上・鎌水(編)(2002)と、共通語の「(んだ) って」を研究対象とした許(1999)、辻(2001)をとりあげる。

1.1. 井上・鎌水(2002)

井上・鎌水(編)(2002)は、管見の限り「ッテ」を方言形式として扱った唯一の記述である。

¹ 愛知県の方言は県内でも、尾張と三河では共通する面を多くもちながらも対比するものがある。尾張・三河の方言の境界は、旧尾張の国、三河の国の国境とみてよい。(芥子川1983: 212-214を要約)

本稿では、尾張内部での大きな方言差はないものと考え、芥子川(1983)のいう尾張地方で話されている方言を愛知県尾張方言とみなし、以下、尾張方言とする。

² 本研究は、談話資料から得られた文末形式を、一般に終助詞とされていない形式も含めて広く取り扱う。そのため、文末に現れる助詞の類いについては、一貫して終助詞という用語を用いる。

³ 卒業論文では「ンダッテ」のイントネーションについて、音響音声学的な観点からも調査・考察したが、本稿では紙幅の都合上、割愛する。

本研究とは、形式に若干の違いがあるものの (§ 3.2. で後述)、筆者が本稿で指摘する尾張方言の「ンダッテ」と同一の形式として扱っており、以下のような特徴を挙げている。

- ◆ 「～ダッテ」は、女性が使用し、男性はほとんど使用しない。
- ◆ 「～だけど」の意味で使用する。
- ◆ 自分のことについて話す際に使用する。

(井上・鎌水 (編) 2002: 120-121 を要約)

1. 2. 許 (1999)

許 (1999) によれば、従来の研究で文末の「って」は、引用／伝聞・問い返しを表すとされてきた (下記の I, II の用法)。しかし下記の III の用法も存在し、結果として 3 つに分類されるという。

- I < 第三者の話を伝える >
- II < 相手に働きかける (問い返しまたは、相手の話に反発する) >
- III < 自分の考えを引用して説明する >

(許 1999: 84-85 を要約)

1. 3. 辻 (2001)

辻 (2001) は「ッテ」を、類似した用法をもつ「ッテバ」と対比し、次のように述べている。

「～ッテ」は、下降イントネーションを伴い伝聞を、上昇イントネーションで質問を表す。伝聞用法以外の話し手の心的態度を表す「ッテ」には、「発話 (内容・行為指示) を強く押し出す作用があり説得の発話態度の指標となる」機能がある。「ッテバ」はこれとほぼ同じ作用を持つ。

(辻 2001: 77 を要約)

2. 先行研究の検討と本研究が取り組む課題

許 (1999) では、III : 自分の考えを引用して説明する用法を、I : 引用／伝聞の用法と区別している。しかし本稿では、「とっていた」や「と聞いた」と置換えられる「って」に加え、「と違って」に置換え可能なもの (許 (1999) の言う 3 つ目の用法) も「引用／伝聞の用法」として考える。

さらに許 (1999) は、II の用法として主張の用法を挙げている。辻 (2001) のいう「って (ば)」は、許 (1999) の主張の用法にほぼ当てはまるものと解釈できるため、本稿では「主張の用法」の 1 つと考える。ここまでに取り上げた先行研究をふまえ、本研究の課題を提示し、目的を再確認する。

- 課題 1: 愛知県尾張地域における「ッテ」の性別・世代による使用状況を確認する。
- 課題 2: 談話資料から「ッテ」の用例を挙げ、「ッテ」の前後に共起する形式等、生起環境を確認する。
- 課題 3: 「ッテ」が同形式である共通語の「(んだ) って」と、どのような点でどのように意味・機能が異なっているのかを記述する。特にイントネーションの違いにも注目する。
- 課題 4: 尾張方言における他の終助詞との対比により、「ッテ」の意味・機能を客観的に記述する。

3. 「ッテ」に関する調査〔2008〕の概要

2009年の調査に先立ち、2008年に尾張方言話者を対象とした談話録音調査を行なった（以下、調査〔2008〕）。調査〔2008〕については、紙幅の都合上、概要のみを示す。

なお調査〔2008〕は、以下の3点を主な目的としたものである。

- ・「ッテ」⁴が、愛知県尾張地域においてどの性別・世代に使用されるのかを確認する。
- ・共通語の「(んだ) って」とは、出現の仕方がどのように異なるのか記述する。
- ・どのような用法で使用されるのか、談話資料から用例を挙げる。

3.1. 調査方法〔2008〕

2008年8月に愛知県尾張地域で、世代差を考慮して⁵3つの談話（以下、談話1, 2, 3）を録音し、各談話で文末に「ッテ」が出現した箇所を書き起こした⁶。談話に現れた文末形式の「ッテ」を、第2節で先述した通り、以下のような基準により、用法を分類した。

- 《1》「と言っていた」「と聞いた」や「と思って」に置換え可能な場合 → 引用／伝聞の用法
- 《2》明らかに発話者の心的態度を表しており「ってば」と置換え可能な場合 → 主張の用法
- 《3》上記以外で、発話者が自分のことについて話している場合など → 尾張方言独特の用法

3.2. 調査〔2008〕の結果と考察

調査〔2008〕では、談話1のみに「ッテ」が頻出し、談話2で1例、談話3では0例であった。談話1〔2008〕では、60分間の談話の中で文末形式の「ッテ」が約52例見られた。

「ッテ」に関する調査〔2008〕で明らかになった事項を、以下にまとめる。

- <使用状況>
- ◆ 愛知県尾張地域では、若年層が頻繁に「ッテ」を終助詞的に用いる。
 - ◆ 「ッテ」は女性だけではなく、男性にも使用される。 cf. 井上・鎌水（編）(2002)
- <生起環境>
- ◆ 「ッテ」は「のだ」に接続し、「ンダッテ」の形で現れる。
 - ◆ 「ッテ」は他の終助詞を後接しない。
- <用法>
- ◆ 自分のこと、又は自分の体験に基づく情報を述べる際に使用する。 cf. 井上・鎌水（編）(2002)

⁴ 調査〔2008〕を行う時点では、文末の「ッテ」を対象形式としていた。

⁵ 談話1：20代（60分）、談話2：40代（36分）、談話3：70代（42分）の談話を録音した。インフォーマントは全員尾張地域外での居住経験がなく、両親のうちいずれか、または両方が尾張地域出身者である。

⁶ 表記方法は、国立国語研究所（2005）を参考にした。

調査〔2008〕では、尾張方言独特の「ッテ」が、必ず「のだ⁷+ッテ」の形で現れることが判明した。その結果を考慮し、以下、本研究の対象形式及びその表記を「ンダッテ」に統一する。調査〔2008〕では「ッテ」の共通語の用法との違いを中心に考察したが、筆者は「ッテ」の意味・機能は、その他の終助詞との意味の棲み分けを観察することで、明確になると考える。第4節では、2回目の調査（調査〔2009〕）を行い、他の終助詞との対比から「ンダッテ」の記述を試みる。

4. 尾張方言に現れる文末形式に関する調査〔2009〕

第4節では、調査〔2008〕の結果を確認し、「ンダッテ」の意味・機能をより明確にするために、調査〔2009〕で録音した談話資料を基に考察する。以下に、調査〔2009〕の主な目的を示す。

- ・調査〔2008〕で明らかになった「ンダッテ」の形態的・統語的特徴を確認する。
- ・調査〔2008〕では十分に得られなかった中年層による「ンダッテ」の使用と男女の使用差を確認する。
- ・「ンダッテ」とその他の終助詞とを対比し、「ンダッテ」の意味・機能を明らかにする。

4.1. 調査方法〔2009〕

2009年に、愛知県尾張地域での談話録音調査を行った。調査〔2009〕では、収録した談話4, 5, 6をすべて書き起こし⁸、文字化したテキスト⁹に共通語訳をつけた。

まず、「ンダッテ」の使用状況・生起環境等を観察し、調査〔2008〕で得られた結果を確認した。さらに、談話の文字化資料から抽出した「ンダッテ」と、その他の終助詞との置換え検証を行った。以下、表1に収録状況とインフォーマントに関する情報を示す。

表1: 調査〔2009〕の収録状況とインフォーマントに関する情報

	談話4〔2009〕	談話5〔2009〕	談話6〔2009〕
収録地点	愛知県名古屋市中村区	愛知県名古屋市内	愛知県愛知郡長久手町
収録日時	2009年11月21日	2009年8月16日	2009年8月14日
収録場所	喫茶店	話者の自家用車内	話者の自宅
収録時間	30分	30分	29分23秒
話題(自由)	中学校時代の思い出	墓参り・カーナビ	先祖・ケーブルテレビ
話者 (話者記号, 生年, 性別, 出身)	A: 女 1987 愛知郡 B: 男 1987 愛知郡	M: 女 1958 名古屋市 N: 女 1959 名古屋市 O: 女 1987 愛知郡	W: 男 1933 名古屋市 X: 男 1930 名古屋市 Y: 女 1932 名古屋市 Z: 女 1934 名古屋市
成育環境	尾張地域外での居住経験なし。両親のいずれか、又は両方が尾張地域出身者。		
録音機器	カセットレコーダー (TCM-47)		ICレコーダー (ICD-U60)

⁷ 談話では「ンダ」「ノダ」「ダ」「ンヤ」の形で現れた。ここでは、最も多かった「ンダ」で代表させる。

⁸ 文字化の表記については、調査〔2008〕と同様に国立国語研究所(2005)を参考にした。

⁹ 文字化した談話資料は、約140頁に及ぶため、本稿では掲載を省略する。

調査〔2009〕では、まず、3つの談話の中から、「ンダッテ」と、意味機能的に「ンダッテ」に隣接していると考えられる、①【終助詞「ノ」を含む形式】、②【「のだ」に後接する形式】を抽出し、世代ごとに各形式の出現数を記録した。抽出した①②の形式と、「ンダッテ」とが置換え可能かどうかを検証する。以下、置換え調査の手順を簡潔にまとめる。

- 手順1 談話の文字化資料の中から、「ンダッテ」に関わる終助詞を抽出する。
- 手順2 2-1 「ンダッテ」の用例に、抽出された終助詞を入れる。
2-2 抽出された終助詞の用例に、「ンダッテ」を入れる。
- 手順3 各終助詞との交換可能性から、「ンダッテ」の意味・機能を記述する。

置き換えの可否や、置換えの際に生じる意味のズレについては、尾張方言を母方言とする筆者の内省により判断した。ただし、判断が難しい場合には、筆者以外の尾張方言話者の意見を参考にした。なお、各例文に付した〔〕内の発話番号及び話者記号は、談話資料のものと同一である。

4.2. 調査対象とする形式

調査〔2009〕で録音した3つの談話からは、①【終助詞「ノ」を含む形式】の用例が、談話4で20例、談話5で12例、談話6で4例の計36例見られた。一方、②【「のだ」を含む形式】の用例については、談話4で59例、談話5で50例、談話6で15例の計124例得られた。

本稿では、「ンダ+ワ (ネ)」について考察した箇所のみを抜粋する。なお、卒業論文では「ノ (カ/カネ/ヨ)」と、「ンダ」に後接する、「ワ (ワネ)」、「ヨ (ネ)」、「ネ」、「ガン/ガネ」、「φ (何も後接しない)」の全用例について同様に置換え検証を行い、「ンダッテ」の意味・機能を記述した。

4.3. 調査〔2009〕の結果と考察

「ンダッテ」は、若年層が頻繁に使用し、高齢層では、全く使用されないことがわかる (表2参照)。文末の「ンダッテ」全42例を調査〔2008〕と同様の方法 (§3.1. で先述) で分類したところ、3例が引用/伝聞、7例が主張、32例が尾張方言独特の用法と判断できるものであった。

若年層の談話4では、男性話者と女性話者が「ンダッテ」を同程度の頻度で使用していることが確認できる。さらに、談話5で中年層にも若干の使用があることがわかる。

表2: 「ンダ+ワ (ネ)」及び「ンダッテ」の話者別出現回数

	談話4		談話5		談話6				合計
	A	B	M	N	W	X	Y	Z	
ワ	—	—	2	4	2	—	1	1	10
ワネ	—	—	1	4	—	2	—	—	7
合計	0		11		6				17
ンダッテ	19	17	1	5	—	—	—	—	42
合計	36		6		0				

談話 4~6 の中には、「ンダ」に後接する終助詞「ワ (ネ)」が 17 例見られたが、談話 4 には現れず、若年層にはあまり使用されていないと考えられる。§ 4.3. では、談話に現れた終助詞「ワ」について、共通語の終助詞「わ」と対比しながら考察し、「ンダッテ」との置換え検証を行う。

4.3.1. 終助詞「ワ」を含む形式についての考察

日本語教育学会 (編) (2005) では、共通語の終助詞「わ」について以下のように述べている。

上昇音調の「わ」は主として女性によって使われる。知り合いを見つけて「あら、田中さんだわ」のように認識の成立を独話的に表す。対話では「うれしいわ」や「私、もう行くわ」のように感情表出や意志の表明を和らげる機能をもつ。

(日本語教育学会 (編) 2005: 147 を要約)

さらに「わ」について詳しく述べられた記述に上野 (1972) がある。以下に要点をまとめる。

- a. 女性もしくは女性を意識する話し手に用いられ、聞き手は自分自身か他者である。
- b. 「デス・マス」体にも普通体にも用いられる。用いられる文のタイプは平叙文のみである。「わ」は単なる想像による判断の場合には使用できない。
- c. 「わ」は、他の終助詞「ね」「ねえ」「よ」と共起する。
- d. 「*あたしにだって出来るわなと思った。」のような用法は、いわゆる標準語にはない。

(上野 1972: 68-70 を要約)

以上の記述をふまえ、談話 5, 6 現れた「ワ」を含む形式とその用例を考察する。

まず、表 2 からわかるように、尾張方言において「ワ」を含む終助詞は、(2) のように男性によっても多く使用される。

(2) キョー ハジメテシッタガー オーガゾレカラ デトルヒトナンダワネ [談話 6 9X]

「ンダ」に後接して現れなかったために分析の対象としなかったが、談話 5, 6 には「ワサ」「ワナ」などの文末形式も頻出した。「ンダ」に接続しない「ワ (ネ/サ/ナ)」を含めると、談話 6 からは計 51 例得られ、そのうち 35 例が男性によって発話されたものであった。

談話資料からは、「ワ」を含む形式が男性によってかなり多く使用されること、3 つの談話を通して、男女共に上昇イントネーションの「ワ」が一度も見られないことなどが確認できた。

このことから、本調査で得られた尾張方言の「ワ」は、共通語の終助詞「わ」と生起環境や機能が異なり、方言独特の用法で用いられていると考えられる。

§ 4.3.2. では、「ンダッテ」と「ワ (ネ)」とでは、どのように意味の棲み分けが起きているのかを明らかにするため、§ 4.1. で述べた方法で終助詞の置換え調査を行う。

4.3.2. 「ンダッテ」と「ワ（ネ）」の置換えによる検証

「ンダッテ」と「ワ（ネ）」との置換え調査では、《1》引用／伝聞の3例を除く38例の「ンダッテ」が「ンダ+ワ」と置換え可能であり、ニュアンスにも違いがないように感じられた。

- (3) ワタシモサー オカーサンガ カスガイナ {ンダッテ [談話4 40A] /ンダワ/ンダワネ}
(2') オーガゾレカラ デトルヒトナ {ンダワネ [談話6 9X] /ンダッテ/ンダワ}

(3) で示したように「ンダ+ワネ」についても「ンダッテ」と置換え可能であったが、《2》主張の用法で用いられている7例の「ンダッテ」とは置換えることができない点で「ワ」とは異なる。《3》尾張方言独特の「ンダッテ」の用例32例についても、「ワ」と置換えた場合と「ワネ」と置換えた場合とを比べると、後者の方が、聞き手に認識させようとする意図がやや強いように感じられる。しかし(3)のように、「ンダ+ワ（ネ）」の用例に「ンダッテ」を置換えた場合には、いずれの形式についても、違和感なく置換え可能であった。ただし、この場合の「ンダッテ」は《3》尾張方言独特の用法としてしか解釈し得ない。

以上をふまえると、「ンダッテ」が「ワ」～「ワネ」のもつ機能を担っている可能性がある。

4.3.3. 談話4, 5, 6についての考察

調査〔2009〕で明らかになった尾張方言の「ンダッテ」について、調査〔2008〕では、データが不十分であった〈使用状況〉・〈生起環境〉・〈用法〉の3点を含めて考察する。

<使用状況>

尾張方言の「ンダッテ」は、若年層だけでなく中年層にも、ある程度の頻度で使用されていた。

談話4では、男性の話者Bが女性の話者Aと同じくらいの頻度で「ンダッテ」を使用していたことから(表2参照)、男女ともに用いられる形式であることも確認できた。

<用法>

調査〔2009〕でも尾張方言の「ンダッテ」は、「自分のことについて述べる(井上・鏑水(編)(2002))」だけではなく「自分の身の回りの人物・物事について、話し手の経験に基づいてよく知っていることを述べる」ときにも用いられていた。話の前置きとしての発話で使用されることも多かった。

<他の終助詞との置換え調査>

調査〔2009〕では、他の終助詞との置換え調査により、尾張方言において「ンダッテ」は、終助詞「ワ（ネ）」に類似した機能を持っていることが明らかになった。

調査〔2009〕では、若年層を調査対象とした談話4の中で「ワ（ネ）」の使用が見られず、反対に高齢層の談話6では、「ンダッテ」が1度も現れなかった。ただし筆者の経験では、若年層の尾張方言話者も、日常的に終助詞「ワ（ネ）」を用いる。談話4の話者Aにインタビューをしたところ、共通語の文脈で会話をする際には、終助詞に「ンダッテ」もしくは「ノ」を用いることが多く、「ワ（ネ）」を使用しにくいというコメントが得られた。このことから、「ンダッテ」と「ワ（ネ）」は、同様の機能を持ちながら、場面や年齢によって使用されていると考えられる。

5. おわりに

5.1. 本研究のまとめ

本研究では、談話資料からの実例に基づき、尾張方言における終助詞「ンダッテ」の用法と意味・機能を記述した。本研究の調査〔2008〕、〔2009〕で明らかになった事項を以下に示す。

<使用状況>

- ◆ 愛知県尾張地域では、若年層及び中年層が「ンダッテ」を終助詞的に使用する。
- ◆ 「ンダッテ」は、男性・女性ともに使用する。
- ◆ 若年層に頻繁に使用され、中年層にも若干の使用がみられる。高齢層には使用されない。

<生起環境>

- ◆ 「ンダッテ」は、他の終助詞を後接しない。

<用法>

- ◆ 自分のことを述べる、又は自分の経験に基づく情報を聞き手に提供する機能がある。
- ◆ 話の前置きとして使われることが多々ある。

本研究では、調査の一環として、「ンダッテ」と「ワ(ネ)」との意味の棲み分けを観察することを試みたが、§4.4.でも述べたとおり、実際には両形式はほぼ同様の機能を担っている。しかし談話調査の結果から、両者の棲み分けが使用者層にあることが明らかになった。これまで尾張方言では物事を叙述する際に「ワ+他の終助詞」が多く用いられてきたが、共通語の形式「ンダッテ」や終助詞「ノ」が入ってきたことにより、現在では使用されにくくなったと考えられる。

高齢層は専ら「ワ」を使用するが、若年層の話者が、「ンダッテ」を「ワ」に代わる共通語と認識して使用しており、中年層はその移り変わりの過渡期に存在しているのではないだろうか。

5.2. 今後の課題

本研究では、現在の20代、40～50代、70～80代を対象に談話調査を行ったが、「ンダッテ」の使用／不使用の境界となる世代を明らかにするためには、さらに1940年代生まれの話者に対しても調査を行う必要がある。また、本研究では愛知県尾張地域のみを対象としたが、他の地域での使用実態や用法の違いなどについて調査することも課題として残る。

本研究における調査の1つとして、尾張方言の他の終助詞と「ンダッテ」とを対比させた。しかし、方言終助詞には意味記述が十分にされていないものも多い。「ンダッテ」の意味・機能をより明確にするためには、尾張方言におけるその他の終助詞の意味・機能を記述する必要がある。

参考文献

- 井上史雄・鎌水兼貴(編)(2002)『辞典 新しい日本語』東京: 東洋書林。/ 上野田鶴子(1972)「終助詞とその周辺」日本語教育学会(編)『日本語教育』17: 62-77 / 許夏玲(1999)「文末の「って」の意味と談話機能」日本語教育学会(編)『日本語教育』101: 81-90 / 芥子川律治(1983)「愛知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(編)『講座方言学6 中部地方の方言』207-241, 東京: 図書刊行会。/ 国立国語研究所(編)(2005)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第9巻 岐阜・愛知・三重』東京: 国書刊行会。/ 辻加代子(2001)「東京方言「ッテ」と「ッテバ」の用法について一文末詞的用法を中心に」大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室(編)『阪大社会言語学研究ノート』3: 77-93 / 日本語教育学会(編)(2005)『新版日本語教育事典』東京: 大修館書店。

移動動詞「行く」の直前に現れる「に」と「へ」の使い分けについて
—1940年代、1950年代の文学作品から—

多胡 友梨恵

(ロシア・東欧課程ロシア語専攻)

キーワード：日本語、格助詞、移動動詞、二格、へ格

0. はじめに

本稿では、移動動詞「行く」と共起している二格をとる句とへ格をとる句をコーパスから収集し、分類、分析をすることで、格助詞「に」「へ」にどのような違いが見られるのかを研究することを目的とする。資料としては1940年代から1950年代の文学作品のコーパス資料を用いる。この2つの年代を比較することによって、「に」「へ」と共起する直前の名詞がどのような特徴をもっているのか、またその特徴によって「に」と「へ」が使い分けられているのか、「に」と「へ」の使用頻度に時代的特徴があるかなどを調べる。

なお、格助詞「に」および「へ」は、本稿で中心的に取り上げる先行研究、奥田(1962)を参考に「二格」「へ格」と表記する。

1. 先行研究

卒業論文では、奥田(1962)、鈴木(1972)、鈴木(1977)、森田(1982)、中畠(2005)、日高(2006)の6つの先行研究を挙げた。しかし本稿では紙面の都合上、卒業論文に関係の深い奥田(1962)と鈴木(1977)の一部分を挙げる。

1.1. 奥田(1962)

奥田(1962)は二格をとる句と動詞との関係をまとめたものである。奥田(1962)は二格の名詞と動詞との組み合わせは(1)対象的なむすびつき、(2)規定的なむすびつき、(3)状況的なむすびつきを表していると述べ、二格名詞と動詞との関係からさらに下位カテゴリーに分けることができるとしている。

そのうち、(1)対象的なむすびつきの下位カテゴリーの1つである「ゆくさきのむすびつき」では以下のようなことを述べている。

- ① かざりになる名詞は空間的なニュアンスをもった具体名詞であるとしながらも、かざり名詞が空間的な意味をもたない具体名詞であった場合「への方に」「へのそばに」などのように空間化の手続きをうけるとしている。
- ② 語彙的な意味に空間性をもたない具体名詞(あるいは抽象名詞)と移動動詞との組み合わせについて、フレジオロジカルな言い回しになっているものがある。

(奥田1962: 291-295)

本稿では上記の点に注目し、調査していくことにする。

1.2. 鈴木 (1977)

鈴木 (1977) は、「玄関に集まる」「玄関へ集まる」というように二格もへ格も用いることのできる状況に注目し、二格・へ格それぞれのもつニュアンスの違いを比較している。鈴木 (1977) によれば、昔はへ格が動詞の表す動作の進行する方向を示し、二格が動詞の表す動作の到着点を示していたようである。しかし現代ではその意味役割の違いも希薄になり、現代語では慣用句的な表現を除き、ほとんどの二格とへ格が置き換え可能であると述べている。

さらに鈴木 (1977) では、「現代雑誌九十種 (3)」という資料を用いて、二格およびへ格と動詞の結合度を順位別に次のようにまとめている。なお、表の () 内は結合度数であり、下線は筆者による。

表 1: 二格・へ格と動詞との結合度数

順位	に	へ
1	はいる (39)	<u>行く (44)</u>
2	<u>行く (38)</u>	くる (22)
3	入れる (36)	帰る (21)
4	付ける (26)	はいる (17)
5	着く (19)	出る (7)
6	くる (18)	着く (6)
7	帰る (17)	上がる (5)
8	掛ける (16)	歩く (5)
9	向かう (16)	出す (5)
10	出る (15)	出かける (5)

(鈴木 1977: 80)

このように二格、へ格とも、本稿が対象とする動詞「行く」ともっとも共起しやすいことがわかる。

2. 問題設定

へ格が用いられる範囲はかなり狭く、へ格の代わりに二格で表すことのできる場合も少なくない。そこで本稿では二格をとる句とへ格をとる句をコーパス資料をもとに調査し、二格とへ格の用法にどのような違いがみられるのか調査する。

二格とへ格の用法をコーパスから抽出するにあたり、便宜上直後に移動動詞「行く」と共起しているものに限定した。これは、「1.2. 鈴木 (1977)」の表 1 からわかるように二格・へ格ともに「行く」と結合することが多いこと、移動動詞と共起したへ格は二格に置き換えられる場合が多いことを理由としている。

3. 調査

3.1. 調査に用いるコーパス

調査には小学館コーパスプロジェクトの『日本語コーパス』を用いる。これは、青空文庫のテキストをデータ化したものである。

本調査では、検索をかける単語指定の空欄に「に|へ」と、後ろに付属する動詞の活用語指定の空欄に「行く|いく」とそれぞれ入力し、検索をかけるという方法をとった。この方法でヒットした対象を、次に述べる「3.2. 調査の対象と範囲」にしたがって調査対象になるものとそうでないものとに手作業で分別した。

3.2. 調査の対象と範囲

調査をするにあたり、以下の点に注意した。

- ①「行く」だけではなく、その活用形も調査対象となる。また、「行く」がひらがな表記されている場合を考慮し、「いく」およびその活用形も抽出の対象とする。「ゆく」は調査対象から除外する。
- ②ただし、「行かれる」「行ってもらう」のような補助動詞を伴う「行く」は調査対象としない。さらに、「行き渡る」や「行き会う」のような複合的な動詞も調査対象から除外する。
- ③「～に行く」「～へ行く」の用法の調査にあたり、二格・へ格の直前部分に着目する。また「への」や「には」などの複合的な助詞は調査対象から除外する。
- ④「東京へ働きに行く」のように「行く」がへ格とも二格とも共起しているようなものがあつたとしても、便宜上「行く」の直前の句のみを調査対象とする。
- ⑤「～に行く」において、二格の直前部分が「一緒に」などのように様態規定的なものであつたり、「夕方に」などのように情勢的なむすびつきを表すものであつたり、「三時に」などのように時間的なむすびつきを表すものであつたりする場合、それらは調査の対象としない。
- ⑥「前に行く」という語は、「前」が文脈から時間的なものを表す場合は調査対象から外し、空間的なものを表す場合は調査対象とする。
- ⑦「音楽会なるものに行く」の「なるもの」など、二格・へ格の前にあいまいさを発生させるような語句は対象としない。
- ⑧調査対象とする語を現代語（戦後（1945年～））に限定する。その中でも、著作権問題から、1940年代と1950年代の文学作品を対象に調査をする。なお、作品の発表年が1944-45年と年をまたいでいる場合は、調査対象となる年（1945年以降）が含まれていれば調査の対象とする。

上記の条件をもとに検索をかけた結果、調査対象となったコーパスのデータを以下に示す。

著者数：27人（一部、同一著者で別ペンネームのものを含む）

1940年代：107作品

1950年代：25作品

3.3. 調査結果の分類

「1. 先行研究」であげた奥田 (1962) を参考に、抽出された二格・へ格の直前の句を以下の分類基準に基づいて分類する。分類の手順を以下に示す。

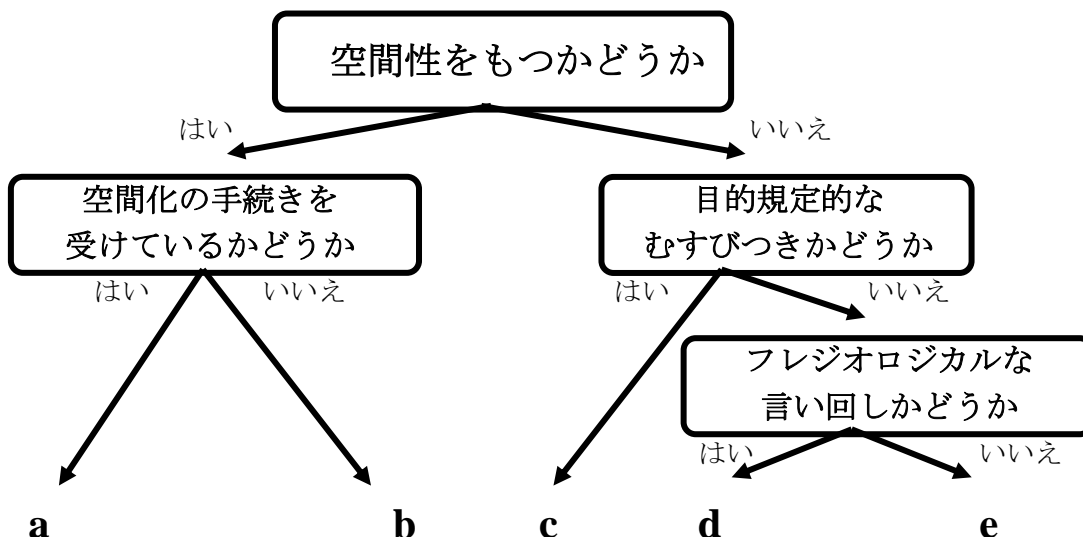


図1: 調査結果の分類基準

したがって **a**~**d** の典型的な例は次のようなものとなる。(筆者作例)

- a**: お母さんの方に行く。
- b**: 学校に行く。
学校の方に行く。
- c**: 勉強をしに行く。
- d**: お嫁に行く。

a と **b** について、空間化 (上記の「~の方」にあたる) を受けているものでも、空間化されている語句が **a** の例の「お母さん」ように空間性をもたないものと **b** の例の「学校」のようにもともと空間性をもっていたものとして分類をする。**a** の「お母さん」のように空間性をもたない語句を空間化する場合には **a** に分類し、**b** の「学校」のように空間性をもっていたものに空間化する語句がつく場合は、筆者はそれを空間化しているとはみなさずに **b** に分類する。

なお **e** は上記 **a**~**d** のどれにも分類されないものが入ることになる。

さらに、単語を **a**~**e** に分類するにあたり、基準のあいまいさをなくすために **a**~**e** を次のように規定する。

- ・ **a** (空間性をもち、空間化の手続きを受けているもの)
「～のそば」「～のもと」のような空間化の手続きを受けているもの。ただし、「～のところ(もしくは「～とこ」)」「～の前」「～の方」については、付属する名詞部分が「学校」や「教会」などの空間性をもつ名詞か、「お母さん」などの空間性をもたない名詞かによって分類基準を判断する。もし空間性をもつ名詞なら **b** に、空間性をもたない名詞なら **a** に分類する。
- ・ **b** (空間性をもち、空間化の手続きを受けていないもの)
建物や地名などのほかに、「どこ」「どっか」「あっち」「そこ」「そっち」「ここ」「こっち」も空間性をもっているとみなし、**b** に分類する。また、「遠く」「向こう」などの単語は、「遠くの場所」「向こうの場所」と言うことができることから、空間性をもっているものとみなす。
- ・ **c** (空間性をもたず、目的規定的なむすびつきがあるもの)
動詞の連用形のほかに、動詞派生であると思われる単語(水浴び、茶摘など)も **c** に分類する。動詞派生か否かは、単語の直後に「する」という語をつけてみて自然かどうかで判断する。「する」という語を共起することができれば目的規定的であると判断する。
- ・ **d** (空間性をもたず、目的規定的なむすびつきもないが、フレジオロジカルな言い回しであるもの)
基本的に **c** に分類できなかつた名詞を **d** に分類する。ただしそのときに、筆者が日常的に使わない組み合わせだと判断した場合には辞書をひいてみて、その言い回しが記載されているかを確認する。辞書に記載があった場合は **d** に分類し、記載がなかった場合には **d** には分類せず、**e** (その他) に分類する。

4. 調査結果まとめ

ここでは「3. 調査」での結果をまとめ、二格とへ格の使い分けの特徴が見られるかを考察する。なお、「3.3. 調査結果」の分類にしたがって、分類結果を **a** (空間性をもち、空間化の手続きを受けているもの)、**b** (空間性をもち、空間化の手続きを受けていないもの)、**c** (空間性をもたず、目的規定的なむすびつきがあるもの)、**d** (空間性をもたず、目的規定的なむすびつきもないが、フレジオロジカルな言い回しであるもの)、**e** (その他) と表示する。調査の結果抽出された、それぞれ **a**～**e** の例をいくつか挙げておく。

分類 **a**

京吉が陽子の傍へ行こうとした途端、(織田作之助「土曜夫人」)
私は奥で揚物をしているご亭主のところへ行き、(太宰治「ヴィヨンの妻」)
二十年後の世界の本当の僕がこのこ現れて妻君のそばへ行く。(海野十三「海底都市」)

分類 b

同じ方角に行く者について、自由に行つたらよからう、 (折口信夫「文學に於ける虚構」)
 北へ行く汽車をつかまえて、 (太宰治「たずねびと」)
 「どちらに行っておいででした？」 (松濤明「一つのエチケツト」)
 この船はいったいどこへ行くのか。 (太宰治「パンドラの匣」)
 そこに行きたいと言ひ張ってきかない。 (田中英光「野狐」)
 うるさい！あっちへ行け！ (太宰治「春の枯葉」)
 私に背を向けてお部屋のほうへ行き、 (太宰治「おさん」)
 本郷町の方へ行きたいと思った。 (原民喜「廢墟から」)

分類 c

近所へ長靴を借りに行つたところで、 (海野十三「海野十三敗戦日記」)
 病気というものはどの程度のものなのか、見舞いに行つてみたが、 (太宰治「惜別」)
 鬼に踊りを見せに行くのだから、鬼退治に行くのだから、 (太宰治「お伽草紙」)
 軍勢をひきつれて、すぐに討ちとりに行つてくれ (鈴木三重吉「古事記物語」)
 かならずあなたのところさ、知らせに行きます。 (太宰治「嘘」)

分類 d

その二、三年前に大学を出てすぐ海軍へ行き、 (太宰治「薄明」)
 卒業と同時に兵隊に行くかも知れん。 (太宰治「未帰還の友に」)
 「お友達のお通夜に行っていました」 (織田作之助「土曜夫人」)

分類 e

百年昔へ行くことも出来るし、 (海野十三「海底都市」)
 二十年先の未来へ行くことも出来るんだ。 (海野十三「海底都市」)
 怨念は更に強く燃え上がらないわけに行かなかつた。 (海野十三「大脳手術」)

卒業論文では年代別調査結果、分類別調査結果、会話／非会話別調査結果、作家別調査結果とカテゴリーごとに調査結果を詳しく載せたが、本稿では紙面の都合上、調査結果のまとめのみを記載する。

表の中の () 内の単位はパーセントで、便宜上小数点第二位を四捨五入した。なお特に着目してほしい数値は斜体・太字にした。

表 2: 調査結果 (まとめ)

	年代	a	b	c	d	e	計
二 格	1940	9 (0.9)	115 (11.0)	211 (20.2)	24 (2.3)	29 (2.8)	388 (37.1)
	1950	5 (0.5)	182 (17.4)	111 (10.6)	12 (1.1)	8 (0.8)	318 (30.4)
へ 格	1940	23 (2.2)	268 (25.6)	0 (0.0)	1 (0.1)	2 (0.2)	294 (28.1)
	1950	3 (0.3)	53 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	56 (5.4)
		40 (3.9)	618 (59.1)	322 (30.8)	37 (3.5)	39 (3.7)	1056 (100.0)

5. 考察

表1を参考に総合して見てみると、まずニ格の使用範囲の方が、へ格の使用範囲よりも広いことがみてとれた。このことにより、へ格の用法はかなりせまいということがわかった。

分類a(空間性をもち、空間化の手続きを受けているもの)、分類b(空間性をもち、空間化の手続きを受けていないもの)においてニ格が年代別にみても平均的に使用されているのに対し、へ格は1940年代と1950年代に大きな使用差がみられた。これにより、おそらく1950年代からニ格が使用されることがより多くなったのではないかと推測できる。

また、分類c(空間性をもち、目的規定的なむすびつきがあるもの)、分類d(空間性をもち、目的規定的なむすびつきもないが、フレジオロジカルな言い回しであるもの)に関していえば、調査結果からへ格と共起するものはほぼないといっていだろう。これにより、現代日本語では目的規定的なものもフレジオロジカルなものもニ格で示されると考えた。

以上のこともふまえてニ格・へ格ごとにまとめると次のようになる。

ニ格

- ・aにおいて、1940年代ではあまり使われることはなく、1950年代ではさらに使用頻度が下がった。
- ・bについて、どの年代でも平均的な使用がみとめられた。ただ、1940年代に関しては、bとして分類されたニ格名詞には、「教会」「研究室」のような建物や部屋を表すもの、「東一番丁」など地名を表すものが多く、逆に「どこ」「あっち」「そこ」といった漠然とした場所を表す語はへ格に比べて少なかった。
- ・cとdの結果より、慣用句的な表現や目的規定的な表現はほとんどニ格で表されることがわかる。フレジオロジカルな表現は、「里子(になり)に行く」や「兵隊(になり)に行く」などニ格の名詞になるためにいくという表現のものが多かった。
- ・eに分類されてしまう語がなるべく少なくなるように分類基準を細かくたてたが、結果として全体で3.7%ほどeに分類されるものが出てきてしまった。これは、分類基準のあましさもあるのかもしれないが、奥田(1962)で述べられていたように、ニ格におけるむすびつきの違いはさまざまなむすびつきのずれであることが多いのが原因ではないとも考えた。

へ格

- ・aにおいては、1940年代ではよく使われていたが、1950年代ではほとんど使われなくなった。
- ・bについては、1940年代では建物や地名など狭い範囲を表す語句と共起することが多かったニ格とは違い、「東京」「火星」など比較的広い範囲を示す語句と共起することがよくあった。また、1940年代でみられた特徴として、「どこ」「そこ」などの語とよく共起することもあげられる。

・cやdにみられるように、現代語においては目的規定的なものやフレジオリジカルなものは二格で示される。

6. おわりに

以上、本稿では奥田 (1962) の先行研究を主に用いることによって、コーパス調査から現代日本語における二格とへ格を抽出し、分析、考察した。その結果、目的規定的な表現やフレジオリジカルな表現については、へ格とはあまり共起せず、二格で表されることが多いという結論に至った。しかし空間化された語句やもとから空間性をもつものについてははっきりとした結論は導き出せず、年代ごとの特徴を捨うに留まってしまった。

反省点としては、コーパス資料の著作権の問題により、1960年代および1970年代のデータが圧倒的に少なく、調査ができなかったこと、分類基準にあてはまらずに結果としてe(その他)に分類せざるを得なくなったものが3.7%もあったことがあげられる。

より多くのデータを収集しているコーパスを用いて、分類基準をより明確化することによって、さらに細かい二格とへ格の使い分けの定義を調査することを、今後の課題とした。

参考文献

- 奥田靖雄 (1962) 「に格の名詞と動詞のくみあわせ」言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 281-323. 東京: むぎ書房.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 東京: 三省堂.
- 北原保雄編 (2002) 『明鏡国語辞典』 東京: 大修館書店.
- 新村出編 (1998) 『広辞苑 第五版』 東京: 岩波書店.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 東京: むぎ書房.
- 鈴木忍 (1977) 『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法I』 東京: 凡人社.
- 中畠孝幸 (2005) 「目的地を表すニとへ」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』 101-102. 東京: 大修館書店.
- 日高水穂 (2006) 「特集・地図に見る方言文法 東の方へ (行け)」『言語』 35-12: 28-31. 東京: 大修館書店.
- 森田富美子 (1982) 「「に」と「へ」<目的の場所・方向>」日本語教育学会編『日本語教育事典』 455. 東京: 大修館書店.

参考資料

ウィキペディア フリー百科事典
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>) (閲覧日 2009. 12. 22)

コーパス資料

日本語コーパス (<http://cqs3.lingua-world.com/~jcp/>) (閲覧日 2009. 11. 10)
紙面の都合上、調査対象となった著者・作品一覧は省略する。

2. 先行研究

従来の研究によると、-tul2 はその結合範囲が広く、主語の複数を表す機能を持っているという。남기심・고영근 (1985: 95) は -tul が可算名詞と代名詞に後続して、それが指す対象が複数であることを表すが、不可算名詞あるいはその他の成分に接続して主語が複数であることを表す機能も持つと述べている。さらに、홍기선 (1994: 113-115) は、-tul2 が主語だけではなく、目的語の複数を表す場合があることを指摘している。

최동주 (2000) は、-tul2 が出現位置に関係なく同じ意味に解釈されること、主語が複数であっても -tul2 が出現できない場合があること、主格助詞 (-i/-ka)、目的格助詞 (-ul/-lul) の後に現れること、一部の補助詞や副詞格助詞との配列順序が一定でないことなどをあげて、-tul2 が談話論的な要素であるとみなしている。

3. 先行研究の検討と問題提起

先行研究の多くが -tul2 の統語的な特徴に関して述べているが、その説明の例外と言えるものに関しての説明は不十分である。また、-tul2 が目的語の複数を表す場合に関しては、現象の指摘にとどまっていて、具体的な記述はほとんどされていない。

4. 研究方法

-tul2 の出現は話しことば的な性格が強いという 최동주 (2000) の指摘に基づき、用例抽出には『21 세기 세종계획 균형 말뭉치 (21 世紀世宗均衡コーパス)』³ の“spoken”を用いる。“spoken”は実際の発話と発話を前提に書かれたドラマ、演劇、映画の台本などで構成されていて、コーパス全体の約 10% を占めている。

まず、索引コーパスの“spoken”から形態素検索機能を使って -tul を含む用例を抽出した。その後、抽出した 15,730 の用例を手作業で前接要素の複数を表す -tul1 と前接要素以外の要素の複数を表す -tul2 に分けた。その結果、15,730 例の内 665 例が前接要素以外の複数を表すものであった。中には以下の例のように主語の複数と前接要素の複数、どちらにも解釈できる場合があった。

- (3) swul pyeng-tul tul-ko cwupang ccok-ulo...
 酒 瓶 (-tul1/-tul2) 持つ-Cvb 厨房 方-All
 酒の瓶を持って厨房の方へ... [CJ000233]

例 (3) のような場合、前接名詞の pyeng (瓶) の複数にも解釈でき、主語が複数であるという意味にも解釈できる。このような例 (25 例) も 665 例に含まれている。665 例を除いた残りの 15,065 例は前接要素が複数であることを表している。本稿では、665 例の -tul2 を主な対象として取り扱うが、-tul1 と -tul2 の違いを見るために前接要素の複数を表す 15,065 例の内 1,000 例も検討した。

³ 『21 세기 세종계획 균형 말뭉치 (21 世紀世宗均衡コーパス)』は、新聞、雑誌、本など様々な分野のテキストで構成された、約 1000 万語節規模の韓国語コーパスである。

なお、『21 세기 세종계획 균형 말뭉치 (21 世紀世宗均衡コーパス)』のファイル番号を例文の末尾に付する。例文末尾にファイル番号がないものは筆者による作例である。作例の文法性および自然さの判断は筆者の内省によるものであるが、他に 2 人の韓国語母語話者にも確認した。

5. 考察

用例分析の結果に基づき、まず 5.1 節では、主語の複数を表す場合について、-tul2 の前接要素を品詞別に分類し、その特徴について述べる。次に 5.2 節では、目的語の複数を表す -tul2 について考察を行う。

5.1. 主語の複数を表す -tul

-tul2 が主語の複数を表しているものは、660 例であった。以下の表 1 は、-tul2 の前接要素を品詞別に分類した結果である。

表 1: -tul2 の前接要素の品詞による分類

-tul2 の前接要素	用例数	割合
名詞	380 例	57.6%
副詞	211 例	32.0%
助詞	49 例	7.4%
動詞	17 例	2.6%
代名詞	2 例	0.3%
感嘆詞	1 例	0.1%
形容詞	0 例	0%
数詞	0 例	0%
冠形詞	0 例	0%
合計	660 例	100%

5.1.1. 名詞との結合に見られる特徴

남기심・고영근 (1985: 95) は「-tul は可算名詞と代名詞に後続して、それが指す対象が複数であることを示すが、不可算名詞、あるいはその他の成分に接続して主語が複数であることを表示する機能も持っている」と述べている。しかし、用例の中には次のような例が見られる。

- (4) neykthai-tul nusunhi may-n chay...
 ネクタイ-tul2 ゆるく しめる-Adn まま
 (人々は) ネクタイをゆるくして...

[CJ000225]

- (5) hangsang mesci-n mal-tul-ul cwunpiha-y twu-n-ta.
 いつも 格好いい-Adn 言葉-tul1-Acc 用意する-Cvb 置く-Prs-Ind
 いつも格好いい言葉を用意しておく。 [CK000141]

- (6) otcang yel-e neykthai-tul po-si-lako...
 箆笥 開ける-Cvb ネクタイ-tul1 見る-Hon-Quot
 箆笥を開けてネクタイをご覧くださいと... [CJ000227]

例 (4) のように neykthai (ネクタイ) などの可算名詞に付いて主語の複数を表したり、例 (5) のように mal (言葉) などの不可算名詞に付いて前接名詞の複数を表したりする例が見られる。さらに、例 (4)、(6) のように同じ可算名詞に付いた -tul が前接名詞の複数を表したり、主語の複数を表したりする場合は、名詞の可算性だけでは説明できない。今回収集した用例の中に、可算名詞の後に付いて主語の複数を表している例は 27 例 (7%) であった。

同じ名詞に付いた -tul が -tul1 と -tul2 にその解釈が異なる原因としては発話が行われている場面の違いが -tul の解釈に影響していることが考えられる。例 (4) は複数の人が締めているネクタイを緩める場面で、例 (6) は収納されているネクタイを見せるという場面である。ネクタイ、シートベルト、箸、靴などの名詞は身につけたり、手に持ったりする場合、通常は一人に一つというような認識を持っているのが普通である。一人の人が複数のネクタイをしているのは特殊な状況でない限り考え難いことから、自然に複数の人がネクタイをしているという意味に解釈されると考えられる。

5. 1. 2. 副詞との結合に見られる特徴

홍용철 (2003: 266-267) は副詞と -tul2 の結合について、-tul2 がすべての副詞と結合できるのではなく、文副詞とは結合できないことを指摘している。

- (7) ama (*-tul) ai-tul-i pelsse tolaw-ass-ul ke-yeyyo.
 たぶん (*-tul2) 子供-tul1-Nom もう 戻る-Past-Infer こと-Hon.Ind
 たぶん子供たちはもう戻ってきていると思います。
 (홍용철 2003: 266)

しかし、今回調べた用例の中には、次のような例が見られる。

- (8) hoksi-tul mos-po-sye-ss-eyo?
 もしかして-tul2 Neg-見る-Hon-Past-Interr
 もしかして見かけませんでしたか。 [CJ000263]

例 (8) の hoksi (もしかして) も文副詞だと考えられるが、-tul2 との結合が許される。韓国のインターネットサイト naver.com (2009 年 11 月 17 日) で検索してみると selma (まさか)、ceypal (是非)、cengmal (本当に) などの文副詞も -tul2 と結合して使われている例が見られる。

(9) i pi-ka o-nunde selma-tul nakksi ka-n ke-n ani-kess-ci?
 この 雨-Nom 来る-Cvb まさか-tul2 釣り 行く-And こと-Cvb ない-Infer-Interr.Ind
 まさか、この雨で釣りに行ったわけじゃないよね？

例 (9) は文副詞 selma (まさか) に -tul2 が付いたものであるが、自然な文である。次の例 (10) は、筆者が例 (7) から主語を削除した文であるが、許容度が高くなる⁴。

(10) ama-tul pelsse tolaw-ass-ul ke-yeyyo.
 たぶん-tul2 もう 戻る-Past-Adn こと-Hon.Ind
 たぶん、もう戻ってきていると思います。

今回分析した副詞と -tul2 が結合した 211 例の中で、主語が省略されていない例が 15 例で、さらに -tul2 が主語に先行して現れたのは 1 例のみである。このように -tul2 と述語の間に主語が現れると許容度が落ちるといえることができる。

5.1.3. 助詞との結合に見られる特徴

この節では格助詞と -tul2 の位置関係にどのような特徴が見られるかについて考察する。韓国語の格助詞は、남기십・고영근 (1985) に倣って「主格、叙述格、目的格、補格、冠形格、副詞格、呼格」に分類する。格助詞の種類とそれに結合した -tul2 との位置関係によって分類した結果を以下の表 2 にまとめておく。

表 2: -tul2 と結合する格助詞の位置関係と種類

格助詞の種類	格助詞 + -tul2	-tul2 + 格助詞
主格	0 例	64 例
目的格	0 例	88 例
副詞格	47 例	4 例
叙述格	0 例	37 例
補格	0 例	1 例
合計	47 例	194 例

⁴ 文法性を判断するために韓国語母語話者 2 人に確認した結果、例 (7) の場合は答えが分かれたが、例 (10) は 2 人とも言えると答えた。

格助詞と -tul2 の配列順序において、他の格助詞が -tul2 と一定の配列順序で現れるのに対して、副詞格助詞と -tul2 の場合は配列順序が一定でない。副詞格助詞をそれが表す意味と -tul2 との位置関係によって、さらに詳しく分類すると次のような分布を示す。

表 3: 副詞格助詞の意味による -tul2 の分布

副詞格助詞の意味	格助詞+-tul2	-tul2+格助詞
引用 (-ko,-lako)	35 例	0 例
着点 (-lo,-ey)	9 例	0 例
道具 (-lo)	1 例	4 例
比較 (-chelem)	1 例	0 例
出発点 (-eyse)	1 例	0 例
合計	47 例	4 例

Lee (1991: 515-516) は、-tul2 と副詞格助詞⁵ との配列順序に関して、-tul2 が副詞格助詞の前に来ることはないとしているが、表 3 にみるように道具を表す副詞格助詞の場合は -tul2 が前に付く傾向が見られる。

以下の例文は、収集した例のうちから出発点を表すものを選んで、筆者が副詞格助詞と -tul2 の位置を入れ替えてみた文である。

- (11) cemsim mek-ko cwupang (-eyse-tul/??-tul-eyse) na-wa ant-nun...
 昼 食べる-Cvb 厨房 (-Loc-tul2/??-tul2-Loc) 出る-Cvb 座る-Adn
 昼を食べて、厨房から出て座る... (出発点) [CJ000229]

例 (11) の出発点を表す副詞格助詞は -tul2 と位置を変えると不自然な文⁶ になる。着点、比較を表す副詞格助詞の場合も同じである。しかし、次のように道具を表す副詞格助詞の場合は、5 つの例すべてが -tul2 と位置を変えても自然な文になる。

- (12) kop-ci anh-un sisen (-tul-lo/-ulo-tul)...
 やさしい-Cvb Neg-Adn 視線 (-tul2-Ins/-Ins-tul2)
 やさしくない視線で... [CJ000225]

道具を表す副詞格助詞の前接名詞として現れたのは「顔、気持ち、服装、視線、目」で、これらの名詞は、それを利用して何かをするというわけではない。意味的には「～の状態で～をする」と解釈される。これらは「何かを使って～をする」という意味に解釈される

⁵ Lee (1991) は、「副詞格助詞」ではなく「後置詞」という用語を用いている。최동주 (2000) は、「副詞格助詞」と「後置詞」を同じ意味で用いており、本稿でも최동주 (2000) に倣って、区別しないことにする。

⁶ ここでいう不自然な文とは、あくまで -tul2 と解釈できるかどうかに関する判断であって、文法的に非文であるという意味ではない。

合すると目的語までしか影響が及ばないということができる。

例えば、例 (14) で、結婚させるのは母親であるが、実際に結婚するのは子供であるため -tul2 は直接行為者である目的語 (子供たち) の複数を表すことになる。仮に主語が複数 (親たち) であるとしても、主語は -tul2 の影響を受けないため目的語の複수에解釈される。

6. おわりに

本稿では取り上げることができなかったが、今回の用例から得られた着脱動詞述語文のすべてが主語の複数を表している点、また先行研究で目的語の複数を表している例としてあげている文の述語が ttayli- (叩く)、tak- (拭く)、ponay- (送る)、khiwu- (育てる)、cwu- (与える) など、いわゆるプロトタイプ的な他動詞である点は -tul2 の解釈に述語動詞が大きく影響していることを伺わせる。これらの問題に関しては今後の課題とする。

略語一覧

Acc:	accusative	対格	Ind:	indicative	直説法	Past:	past	過去
Adn:	adnominal	連体形	Infer:	inferential	推量	Pl:	plural	複数
All:	allative	向格	Ins:	instrumental	具格	Prs:	present	現在
Caus:	causative	使役	Interr:	interrogative	疑問	Quot:	quotative	引用
Cvb:	converb	副動詞	Loc:	locative	位格	Top:	topic	主題
Dat:	dative	与格	Neg:	negative	否定	- :		形態素境界
Hon:	honorific	敬称	Nom:	nominative	主格			

参考文献

- 남기심・고영근 (1985) 『표준 국어 문법론』 탐출판사
 임홍빈 (2000) 「복수 표지 ‘들’과 사건성」 『애산학보』 Vol.24, 3-50
 최동주 (2000) 「‘들’삽입 현상에 대한 고찰」 『국어학』 35, 국어학회, 67-92
 홍기선 (1994) *Subjecthood Tests in Korean*, 『어학연구』 30-1, 99-136, 서울대학교
 어학연구소
 홍용철 (2003) 「비해석성 복수표지 “들”」 『프랑스어문교육』 제 15 집, 253-285
 Lee, Han-Gyu (1991) *Plural Marker Copying in Korean*, Harvard Studies in Korean Linguistics IV, 513-528
 Martin, Samuel E. (1992) *A Reference Grammar of Korean*, Tokyo: Chales E. Tuttle Company.

コーパス

- 국립국어연구원 (1999) 『21 세기 세종계획 균형 말뭉치』 국립국어연구원

熊本方言における強調語使用の世代差・男女差について

豊田 瑤子

(欧米第二課程フランス語専攻)

キーワード：熊本方言、強調語、若者ことば、世代差、男女差

0. はじめに

熊本方言には「とても」「大変」の意味を表す強調語が豊富にあり、日常会話で多用されている。しかし、熊本方言の強調語について詳しく研究している論文は少なく、その使用実態は明らかになっていない。本稿では熊本方言の各強調語において世代間・男女間でどのような使用差があるのかを明確にすることを目的とする。ここで言う熊本方言とは、飯豊・野元(編)(1984)に基づき、熊本県北部方言(熊本市およびその周辺地域)とする。なお、筆者は熊本県都市部の方言話者であり、以下ことわりがない限り熊本方言の強調語の部分は片仮名で表記することとする。

1. 先行研究

熊本方言の主な強調語として、井上(1998)では「タイガイ」から派生した「タイギャ」「タイナ」「タイニャ」、「マウゴツ」から派生した「マーゴツ」「マーゴ」「マッゴ」「ウマンゴツ」「ムシャンゴツ」を挙げている。また吉岡(1992a, 1992b, 1993)では、「タイニャ」は熊本市の10代で最も高い使用率(61%)でほぼ県下全域に浸透しており、「ダゴ」は熊本の若者特有の強調の副詞と述べられている。村上(1996)では、「ひじょうに」「すごく」と強めて言いたいとき「マーゴツ」「マッゴツ」という語を使うかどうかをたずねる面接形式の調査を行い、表1のような結果を得ている。

表1: 「マーゴツ・マッゴツ」を「使う」と答えた割合の高い地域と世代

	都市部	北部	東部
10代	66%	40%	32%
20~30代	43%	21%	39%

(村上1996: 78-79を要約)

筆者の内省から他にも「マゴ」「バゴ」という語も使用されていると考える。この二つの強調語は、筆者の管見が及ぶ範囲ではどの先行研究にも記述がなかった。「バゴ」に関しては、「バリ」という強調語と「ダゴ」が混合してできたのではないかと考える。井上・鎌水(編)(2002)で「バリ」は山口県の一部の若年層、長崎・福岡で使用されていることからそのことがうかがえる。「マゴ」は「マッゴ」「マーゴ」という強調語があることから、その派生形だと考えられる。

2. 調査方法

調査は紙面によるアンケート形式であり、仲間内だけで使う強調語をうまく引き出すために親しい相手との会話にするという設定を行った。調査範囲は熊本市およびその周辺地域（県北部）の玉名・菊池・宇土・上益城・下益城であり、調査は全て熊本市内で行った。調査対象は、調査地域で生まれ育ちかつ5年以上別の土地で生活した経験のない人である。

アンケート作成で用いた強調語は、先行研究と井上・鎌水（編）（2002）を参考に選出した。質問の種類と回答方法は以下の通りである。

- ・質問[1]・・・各文でどの強調語を使うのかを選択肢から一つ選ぶ方法
- ・質問[2]・・・すでに強調語が入った文に対して「普段使う」「たまに使う」「自分は使わないが聞いたことはある」「聞いたことがない」のいずれか一つを選ぶ方法

例文は全て熊本方言を使った自然な会話文を使用し、全て筆者が作例した。質問数は質問[1]で7問、質問[2]で8問設け、回答はすべて選択肢から一つだけ選択する形式をとった。これは「一つだけ」を選択することで普段使用している強調語の中でも最も使用頻度の高いものを必然的に選ぶことになり、よりはっきりとした結果を得やすいと考えたからである。アンケート作成では、語彙の選択肢や例文を並べる際は、誘導的にならないように若者が使う語と高年層が使う語を混ぜて並べた。質問[1]だけでは、使うことはあるが「最もではない」と判断された強調語が少なからず出てくる可能性がある。そのような語を出さないため、また若者の使用する強調語がどの世代まで使用されているかをより詳しく調査するために質問[2]のような形式の問題を用意した。世代は10代・20代・30代・40代・50代・60代以上の6つに分けて分析を行う。表2は質問[1]と[2]で選出した強調語である。

表2: アンケート調査で選出した強調語

質問[1]	タイギヤ・マウゴツ・タイナ・マゴ・タイニヤ・マツゴツ・ダゴ・バゴ・マツゴ・ムシャンゴツ・マーゴツ・ウマンゴツ・その他（ ）
質問[2]	タイギヤ・マツゴツ・ダゴ・タイニヤ・マゴ・マウゴツ・タイナ・バゴ

3. 調査結果

以下の表は、世代別・男女別のアンケート回答数を表にしたものである。一部詳しく回答をしていない人を含んでおり、そのため質問[1]と質問[2]で合計人数に差が出ていることをあらかじめ断っておく。回答数に男女差があることを考慮した上で考察を行う。また、熊本市とその周辺地域での差はほとんどみられなかった。

表3: 質問[1]の世代・男女別アンケート回答数

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
男性	17	9	9	5	4	3	47
女性	34	24	8	8	7	12	93

表 4：質問[2]の世代・男女別アンケート回答数

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
男性	17	9	8	7	4	3	48
女性	34	24	9	8	7	9	91

3.1. 最も使用する強調語の世代差・男女差

質問[1]では計 140 名の回答が得られた。質問数 (7 問) ×各人数を全体数として、それに対し各項目の回答がどれくらいの割合を占めているのかを百分率 (%) で表した。割合の数値は小数点第三位を四捨五入した。表 5 は質問[1]のアンケートの例文とその標準語訳をまとめたものである。【 】内には選択肢から選んだ強調語が入り、標準語訳は強調語を入れて訳している。___は高年層、()内は若者が使いやすい語であり、回答者が普段使っている言葉により近い状態で回答できるようにした。

表 5: 質問[1]のアンケートの例文とその標準語訳

例文	標準語訳
昨日歩きすぎたけん【___】足ん痛かー (いちゃー)。	昨日歩きすぎたからとても足が痛いよ。
今日は【___】あちー (暑かー)。クーラーもあんま効いとらんもん。	今日はとっても暑いねー。クーラーもあんまり効いてないもん。
全速力で走ったけん【___】きつかったばい。	全速力で走ったからとてもきつかったよ。
お祭りだったけん【___】人が来とったばい。	お祭りだったからとても (たくさん) 人が来ていたよ。
こころ辺は【___】蚊がおるね。	この辺りはとても (たくさん) 蚊がいるね。
(相手に向かって) あたは支度【___】暇んかかる (時間かかる) もんな。	あなたは支度にとっても時間がかかるもんね。
寝坊したけん【___】急いで来たったい (つたい)。	寝坊したからとても急いできたんだよ。

以下は、特に世代差や男女差がはっきりと出た「タイギヤ」「ダゴ」「タイナ」「タイガ」について、世代・男女別に棒グラフにまとめたものである。

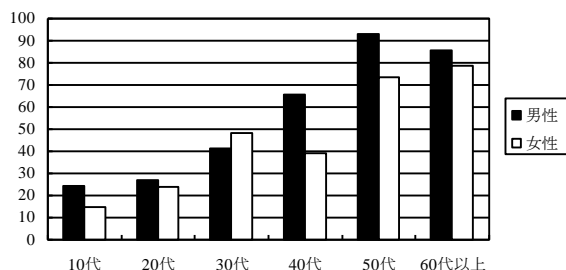


図 1: 「タイギヤ」の年代・男女別割合

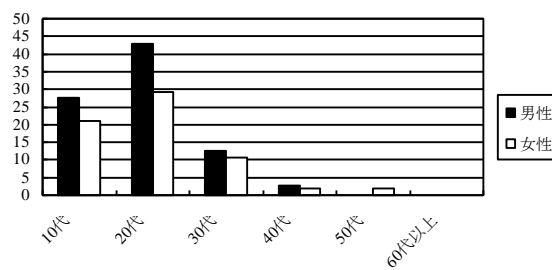


図 2: 「ダゴ」の年代・男女別割合

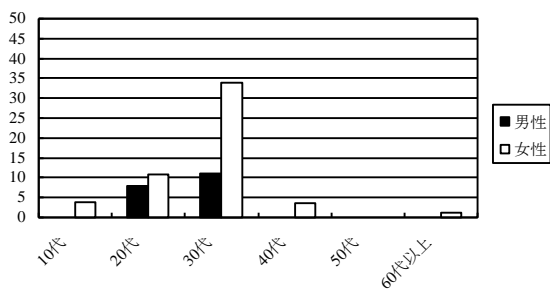


図3: 「タイナ」の年代・男女別割合

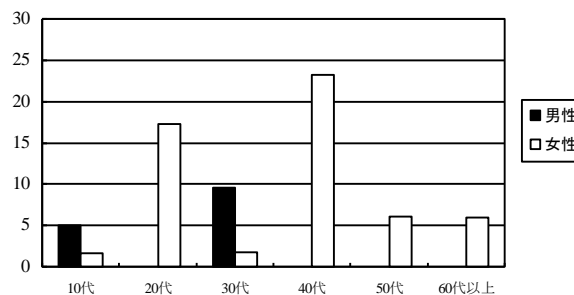


図4: 「タイガ」の年代・男女別割合

図1から、「タイギヤ」は全ての世代で使用されており、年代が上がるごとに使用率が増えることから伝統的な方言語彙と認識されていると考えられる。

図2を見ると、「タイギヤ」とは逆に、「ダゴ」の使用率は男女ともに40代以上からの使用率が一気に低くなり、60代以上の使用率はどちらも0%となった。「ダゴ」は主に10～20代(30代まで)が使用する若者語であると考えられる。

図3では「タイナ」は男女差が顕著に表れており、男性は20・30代にしか使用が見られないが、女性は50代以外の全年代で使用が見られ、特に30代での使用率が圧倒的に高い。これは吉岡(1993)で当時の10代は「タイニヤ」が最も使用率が高かったということから、今の30代が10代だった時の「タイニヤ」が「タイナ」に変化して現在定着しているのではないかと考えられる。「タイナ」の使用率が女性に多かったのは、伝統的方言形の「タイギヤ」に比べると音がやわらかく、女性が使いやすかったからではないだろうか。

図4の「タイガ」は、選択肢に挙げていなかった項目だが、「その他」での記述に「タイガ」の回答が多く見られた。井上(1998)の記述にあった、強調語のものの言い方「タイガイ」を短縮した派生形、もしくは「タイギヤ」の下線部の拗音が直音化した形だと考えられる。「タイナ」同様に男女差が大きく、男性は10代・30代にしか見られないが女性は全世代での使用が見られる。以上から、「タイガ」は「タイナ」と同様に女性がよく使う強調語であり、30代の使用する「タイナ」と世代的にも並列して存在している。その結果「タイナ」があまり使用されない20・40代に使用が広まったのではないかと考えられる。

これらに加え、10代女性では50%近くの回答が方言語彙以外という特徴が見られた。

3.2. 強調語使用頻度の世代差・男女差

質問[2]では計139名から回答が得られた。質問毎に各世代の男女の人数をそれぞれ全体数として、4つの選択肢それぞれで何人中何人がその割合を占めているかを百分率(%)で表した。質問[1]と同様に、割合の数値は小数点第三位を四捨五入し、小数点第二位までの数を入力した。表6は、質問[2]のアンケートの例文とその標準語訳をまとめたものである。

表 6: 質問[2]のアンケート調査の例文とその標準語訳

例文	標準語訳
小さいころは「 <u>タイナ</u> 」泣きよったろー。	小さいころは <u>とても</u> (たくさん) 泣いていたでしょー。
そぎゃん人がくるなら「 <u>タイニャ</u> 」いっぱい作らなんたい。	そんなに人が来るなら <u>とても</u> いっぱい作らないといけないじゃない。
見て!あの車「 <u>ダゴ</u> 」速えー!	見て!あの車 <u>とても</u> 速い!
今これが「 <u>マゴ</u> 」流行っとるらしいけん。	今これが <u>とても</u> 流行っているらしいよ。
あの海「 <u>バゴ</u> 」きれいだったー!水の透き通っとって。	あの海 <u>とても</u> きれいだったー!水が透き通っていて。
生まれたての赤ちゃんは「 <u>タイギヤ</u> 」かわいかなー。	生まれたての赤ちゃんは <u>とても</u> かわいいね。
このアイス「 <u>マゴツ</u> 」うまか!	このアイス <u>とても</u> おいしい!
朝から「 <u>マウゴツ</u> 」セミ鳴きよるたい。暑かなー。	朝から <u>とても</u> (たくさん) セミが鳴いてるよ。暑いねー。

以下の図は、若者層が使うと考えられる強調語である「ダゴ」「マゴ」「バゴ」の使用頻度の割合を円グラフにしたものである。

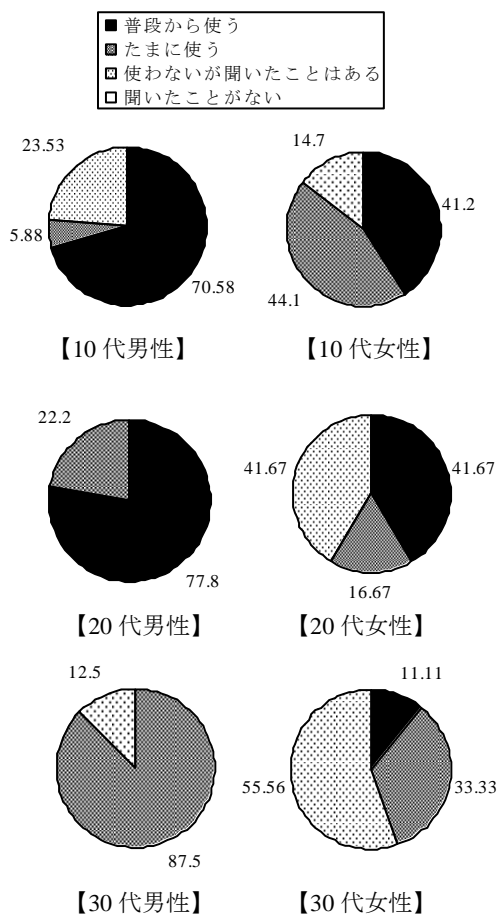


図 5: 10~30代男女の「ダゴ」使用頻度

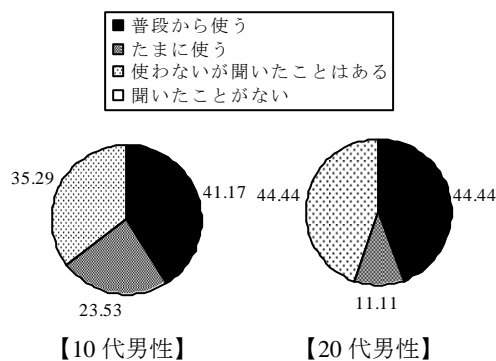


図 6: 10・20代男性の「マゴ」使用頻度

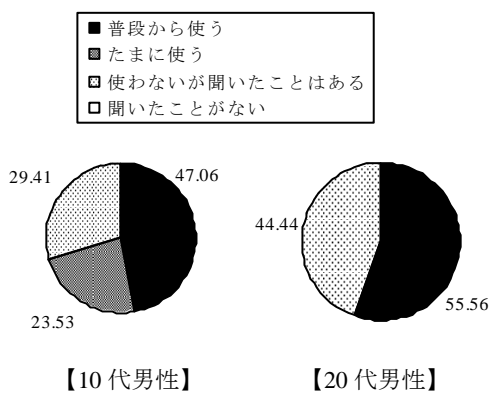


図 7: 10代・20代男性の「バゴ」使用頻度

図5を見ると、男性の使用頻度の方が圧倒的に高く、特に20代男性では「普段から使う」が80%近くもあり、「使わない」と答えた人はいなかった。普段でもよく使うのは男女とも10代・20代であり、女性では「ダゴ」は年齢が上がるにつれて段々と使わなくなる。

図6に関して、「マゴ」は10・20代が主に使用しており、使用範囲の年代は「ダゴ」と同じ結果になった。図6の男性の結果や、女性では10～30代のどれも「使う」と回答した割合が50%以下であることから、「ダゴ」よりも使用頻度が低いと言える。

図7の「バゴ」は、10・20代での使用頻度は「マゴ」と比較的差はないが、30代での回答を比較すると、「マゴ」では50%あった男性の使用頻度が「バゴ」では約12%、女性では約20%から0%と大きく差が出ている。このことから、「バゴ」は「マゴ」よりも使用頻度が低いと言える。

以下の図は、女性の使用率が高いと考えられる「タイナ」と「タイニャ」の使用頻度の割合を円グラフにしたものである。

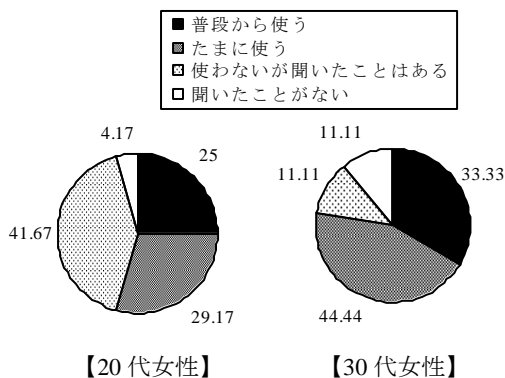


図8: 20・30代女性の「タイナ」使用頻度

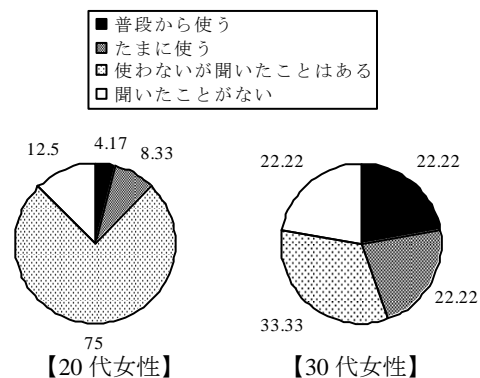


図9: 20・30代女性の「タイニャ」使用頻度

「タイナ」は質問[1]では男性の使用率が極端に低かったが、使用頻度では女性と大差なく使用しているという結果になった。これは、男性は「タイナ」も使用してはいるが、他の強調語の方をよく使うため、質問[1]では選択されなかったということになる。「タイニャ」は「タイナ」と同様に10代・50代・60代以上での使用頻度が極端に低く、60代以上は90%近くが「聞いたことがない」と回答している。20代では男性の方が使用頻度が高いという結果になった。

図8・図9から、20代・30代ともに「タイナ」の使用頻度が高いと言える。「タイナ」も「タイニャ」も30代での使用頻度が最も高い。

以下は、男性の使用頻度が高いと考えられる「マゴツ」「マウゴツ」の使用頻度の割合を円グラフにしたものである。

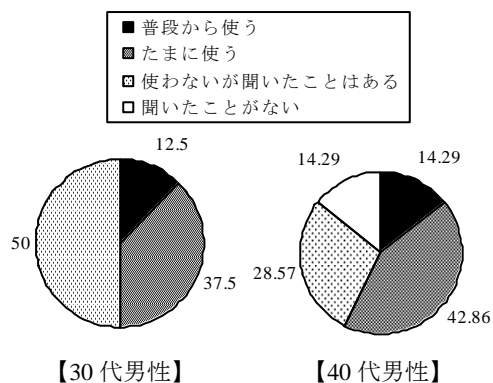


図 10: 30・40代男性の「マウゴツ」使用頻度

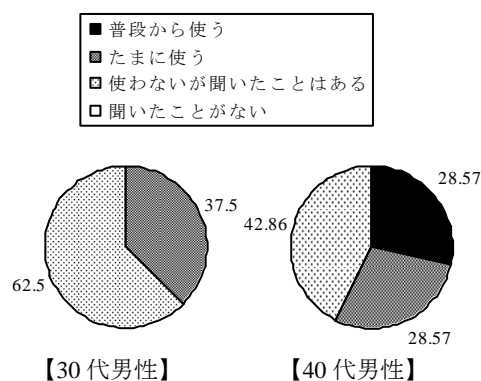


図 11: 30・40代男性の「マッゴツ」使用頻度

図 10 の「マウゴツ」は、男女とも 20 代までは「使う」の割合は 10% 程度で、若者層にはあまり使われていないという結果になった。60 代以上の高齢層には「聞いたことがない」の回答も多く、伝統的方言形の中でも使用頻度の低い強調語だと言える。40 代の使用頻度が最も高く、質問[1]で「マウゴツ」の使用率は 40 代が最も高い (約 18%) という結果が出ていることから「マウゴツ」は 40 代で最も使用されるということが言える。質問[1]では全世代で使用率が極端に低かった図 11 の「マッゴツ」だが、質問[2]では 10～40 代と幅広い世代で「使う」の回答が見られた。特に男性での使用頻度が高く、10・20 代では約 20% が「使う」と回答している。「マウゴツ」に比べると若者層も使用するという結果になった。先行研究の村上 (1996) で「マッゴツ」を「使う」と回答した当時の 10～30 代が現在も使用していることで、若い世代での使用頻度が高まったと考えられる。

以上より、「マウゴツ」よりも「マッゴツ」の方が使用頻度が高いと言える。

また、伝統的方言形である「タイギヤ」は全ての世代で「使う」の回答が見られた。40 代女性を除けば 20 代以上の男女で「使う」の割合が 50% 以上であり、50 代・60 代以上の男性では 100% だった。年代が上がるごとに使用頻度が上がり、60 代以上では約 90% 近くが「使う」と回答している。質問[1]の考察で述べたように、「タイギヤ」は全世代で使用される最も一般的な熊本方言の強調語であると言える。

4. まとめ

質問[1]と質問[2]のまとめから、本稿で明らかになったことを以下の表 7 でまとめた。

表 7: 強調語使用の世代差・男女差のまとめ

◎ 「タイギヤ」は全世代で使用され、使用率・使用頻度は年代に比例して高くなる。
◎ 強調語の世代別の主流⇒10～20 代は「ダゴ」、30 代～60 代以上は「タイギヤ」である。

- | |
|--|
| ●男性 (30~40 代) が使用傾向にあるのは「マウゴツ」「マッゴツ」 (使用頻度の高い順)。
●男性 (若者層) が使用傾向にあるのは「ダゴ」「マゴ」「バゴ」 (使用頻度の高い順)。
⇒「ダゴ」「マゴ」は 10~30 代、「バゴ」は 10~20 代である。 |
| ○女性 (20~40 代) が使用傾向なのは「タイナ」「タイガ」「タイニャ」である。
⇒「タイナ」は 20~30 代、「タイガ」は 20・40 代、「タイニャ」は 30 代である。
使用頻度は「タイニャ」→「タイナ」の順に高くなる。 |
| ○若年層 (特に女性) のほうが方言語彙を含め使用する強調語の種類が多い。 |

先行研究と今回の結果を比較すると、まず吉岡 (1993) で 10 代の若者に支持されている「タイニャ」、村上 (1996) で 10~30 代が主に使用している「マッゴツ」は、今回「タイニャ」は 30 代、「マッゴツ」は 30~40 代が最も使用しているという結果が出たことから、その時代に使用していた世代が現在でも使用していることが言える。しかし、その使用頻度は当時と比べて低くなっており、年を重ねるにつれ伝統的方言形である「タイギャ」を使用するようになるという傾向があることがわかった。

以上から言えることは、まず熊本方言の強調語の中では、「タイギャ」という伝統的な強調語が地域共通語としての役割を果たしているということである。そしてその時代の若者を中心に時代の流れとともに語句が変化しながら、それぞれの世代ごとに異なった強調語が定着しているということである。よって、これが熊本方言における強調語の特徴であると言えよう。

5. おわりに

反省点として、アンケート調査の男女数に偏りが出てしまい、男性のデータが不足してしまった点がある。割合でデータを出すとしても、ある程度同じくらいの回答数にしなければデータにも偏りが出てくる可能性は無視できない。しかし、若年層のデータが多かったことで、現在の若者が実際にどんな強調語を使用しているのかを明確にすることができたことは良かった点であると考えている。このような結果を出せたのは、アンケートに協力して頂いた方々の力があってのことである。回答者の方、また指導して下さいました方へ感謝の意を表したい。

参考文献

- 飯豊毅一・野元菊雄 (編) (1984) 『講座方言学 2—方言研究法—』 東京: 国書刊行会。
井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』 東京: 岩波新書。
井上史雄・鎌水兼貴 (編) (2002) 『辞典 (新しい日本語)』 東京: 東洋書林。
村上敬一 (1996) 「若者層の先導する新しい地域方言体系の形成—熊本方言を例に—」『大阪大学 日本学報 15』, 77-91, 大阪: 大阪大学文学部日本学研究室。
吉岡泰夫 (1992a) 「おもしれーけん若者語イノベーション 〈2〉」『言語』 21 (7), 19, 東京: 大修館書店。
_____ (1992b) 「おもしれーけん若者語イノベーション 〈3〉」『言語』 21 (8), 112, 東京: 大修館書店。
_____ (1993) 「おもしれーけん若者語イノベーション 〈9〉」『言語』 22 (1), 110, 東京: 大修館書店。

ウズベク語の補助動詞構造
《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b)+ket-, qol-, qoy-》について

日高 晋介
(日本課程日本語専攻)

キーワード：ウズベク語、補助動詞、完了副動詞、動詞分類

0. はじめに

ウズベク語¹には以下のような文が存在する。英訳は Waterson (1980) による。

- (1) “ozbekiston-dan **čiq-ib** **ket-**yap-miz-mi?”
ウズベキスタン-ABL 出る-CVB.PF ket-PROG-1.PL-Q (BBCuzbek.com)²
「我々はウズベキスタンから出ていますか？」
- (2) men **čarča-b** **qol-**di-m.
私は 疲れる-CVB.PF qol-PAST-1.SG (Waterson 1980: 165)
(I've got tired.)
- (3) soat-im-ni **buz-ib** **qoy-**di-m.
時計-1.SG.POSS-ACC 壊す-CVB.PF qoy-PAST-1.SG (Waterson 1980: 168)
(I broke my watch.)

本稿は、上掲 (1)~(3) のような、ウズベク語の補助動詞構造《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b)+ket-, qol-, qoy-》の用法を、BBC のウェブページからの用例収集とネイティブへのインタビュー調査によって考察することを目的とする。《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b)+ket-, qol-, qoy-》を複合動詞、あるいは、この場合の ket-, qol-, qoy- を助動詞としてみなす先行研究がある。本稿では一貫して《完了副動詞 (動詞語幹-(i)b)+ket-, qol-, qoy-》を「補助動詞構造」、完了副動詞 (動詞語幹-(i)b) の後の ket-, qol-, qoy- を「補助動詞」として扱う。

なお本動詞として用いられる際の ket-, qol-, qoy- の意味はそれぞれ「行く、去る」、「残る」、「置く」である³。

¹ チュルク語の1種。主にウズベキスタン共和国内で話される。話者数は約1660万人。東方またはチャガタイと呼ばれる言語グループに属する。子音音素は36個、母音音素は6個。SOV語順である。1940年にキリル文字正書法が制定された(庄垣内1988:829要約)。1995年にはラテン文字正書法が制定された。現在後者へ移行中である。

² 「2.1. 用例検索」で用いた「BBCuzbek.com」から収集したことを表す。

³ Krippes (1996) によると、ket- では「to go away, leave, depart (p. 77)」、qol- では「to stay, remain (p. 230)」、qoy- では「1. to place, put, set; 2. to leave, set aside; to release from one's grasp, embrace, safekeeping; 3. to oversee,

先行研究によると、補助動詞構造《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b) +ket-, qol-, qoy-》は「完了」の意味を持つとされることがある (Krippes 1996: gs25)。しかし、先行研究内でも「完了」のみならず多様な用法が存在する (伊達 2008: 112 では、- (i) b ket- は「不意に起こる意味」、「完了の意味」があるとしている)。筆者が調査を行う中で、この 3 者が先行する動詞の性質を反映している、ということが明らかになった。

本文中のグロス、日本語訳、例文番号、囲い線はことわりがない限り筆者による。本稿はウズベク語の表記に対してキリル文字正書法の転写を用いる⁴。ket-, qol-, qoy-のグロスは現段階ではそれらの用法が不明であるため、そのまま ket-, qol-, qoy- と表記する。

1. 先行研究

先行研究は、以下に挙げたものを参照した。

Waterson (1980) と、Krippes (1996) は、ウズベク語-英語辞典である。Sjoberg (1963) はウズベク語について英語で解説している文法書であり、Raun (1969)、Ismatulla (1995) は、英語で書かれたウズベク語の学習書である。伊達 (2008) は日本人向けに書かれたウズベク語の初級教科書である。

いずれも、用例数が少なく、用法が不明である、という問題点が指摘できる。

2. 調査

2.1. 用例検索

BBC ウズベク語のウェブページ (「BBCuzbek.com」 <http://www.bbc.co.uk/uzbek/>) にて、2009年6月18日から7月18日までの記事を集めた。データの分量は約 1.2MB である。文字数は約 21,300 文字であった。

そして、《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b) +ket-, qol-, qoy-》の用例を MS WORD の検索機能で抽出した。同時に先行する本動詞の動詞語幹も記録した。

抽出後、本動詞の動詞語幹を「移動」、「主体変化」、「客体変化」、「意志」の 4 つに分類した。これらの分類は以下の仮定に基づいている。

- ket- に関して、本動詞で「移動」を表すので、「移動」動詞が用いられるのではないかと。
- qoy- に関して、先行研究で意志性が問題となっており (Krippes 1996: gs26)、「意志」動詞が用いられるのではないかと。

to survey; to herd or graze animals; 4. to overlook, to not consider (e. g. the result, consequences), to not keep in mind (p. 235)」という記述がある。

⁴ ウズベク語のキリル文字正書法に対応する転写文字を以下に示す。

A=a, Б=b, В=w, Г=g, Д=d, Е=e, Ё=yo, Ж=z, З=z, И=i, Ў=y, К=k, Л=l, М=m, Н=n, О=o, П=p, Р=r, С=s, Т=t, У=u, Ф=f, Х=x, Ц=ts, Ч=ç, Ш=š, Ъ=ʔ, Ь=なし, Э=e, Ю=yu, Я=ya, Ў=yo, Қ=q, F=y, X=h (庄垣内 1988: 829 より一部引用)

- Waterson (1980)、Krippes (1996)、伊達 (2008) では、《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b)+ket-, qol-, qoy-》が「完了」を表すとしている。そこで、本稿では日本語のAspect研究の代表的なものである工藤 (1995) の枠組みを採用して、「客体変化」動詞、「主体変化」動詞という用語を採用する。これら「客体変化」動詞、「主体変化」動詞の2つが副動詞語幹として多く現れるのではないか。

以下、表1に、《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b)+ket-, qol-, qoy-》の用例分布を「のべ」、「ことわり」に分けて記す。

表1: 《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b)+ket-, qol-, qoy-》の用例分布

	動詞語幹- (i) b ket-	動詞語幹- (i) b qol-	動詞語幹- (i) b qoy-	計
のべ	52	37	21	110
ことわり	32	23	17	72

2.1.2. 分析

次に、ket-, qol-, qoy-の前の完了副動詞の語幹をそれぞれ表2-1、表3-1、表4-1に一覧にした。単語の後の括弧は、2回以上出現した用例数を表わす。日本語訳の丸カッコ内の凡例は次のとおりである：移=移動、主=主体変化、客=客体変化、意=意志、丸カッコなし=該当なし

そして、表2-2、表3-2、表4-2にデータを示した。斜線の左側がそれぞれの分類に該当した数で、右側が全体に対する割合である。パーセントは、小数点第2位を四捨五入した後の数値である。

まず ket- の副動詞語幹を以下に挙げる。下線部、囲い線については考察で詳しく述べる。

表2-1: ket- の副動詞語幹と分類結果

<p>ol- (8) 「取る、得る、持つ (意)」、<u>čiq-</u> (8) 「出る (移、主、意)」、bol- (4) 「なる (主、意)」、qol- (2) 「残る (主)」、tuš- (2) 「おりる、下る (移、主、意)」、buylan- (2) 「蒸発する (主)」、oš- 「高まる、増える (主)」、yizilla- 「さっと動く (移、主、意)」、ozgar-tir- 「変わる-CAUS (客、意)」、tuš-ir- 「乗る-CAUS (客、意)」、ot- 「進む、行く (移、主、意)」、eskir- 「古くなる (主)」、qorq- 「恐れる」、čozil- 「広がる、伸びる (主)」、tašla- 「投げる、投げ出す (主、意)」、kučay- 「増える (主)」、ešit- 「聞く、聴く (主)」、sudra- 「引きずる、曳く (客、意)」、teg- 「触れる」、aralaš- 「混ざる (主)」、qoriš- 「混ぜ合わす、攪拌する (客)」、sarayay- 「黄色くなる (主)」、uč- 「出る (移、主、意)」、soçay- 「回復する (主)」、soçay-la-š- 「冷たい-VBLZ-RECP (主)」、il- 「掛ける (客、意)」、quwla- 「追う、追跡する (移、意)」、bošlan- 「始まる (主)」、tiklan- 「回復する (主)」、qil- 「する (意)」、tala- 「襲う (客、意)」、oxša- 「似る (主)」</p>
--

表 2-2: ket- 副動詞語幹分類データ

		移動	主体変化	客体変化	意志
のべ	52	14 / 26.9%	34 / 65.4%	6 / 11.5%	34 / 65.4%
ことなり	32	6 / 18.8%	21 / 65.6%	6 / 18.8%	16 / 50.0%

次に qol- と qoy- の副動詞語幹と分類データを以下に挙げる。

表 3-1: qol- の副動詞語幹と分類結果

saqla (n) - (6) 「維持する、守る (客、意)」、toxta (t) - (5) 「止める、中止する (客、意)」、bol- (4) 「なる (主、意)」、kut- (2) 「待つ、期待する (意)」、tuš- (2) 「(ある状態に) ある」、bor- 「行く (移、主)」、huwilla- 「空になる (主)」、qəç- 「逃げる (移、主、意)」、qayt- 「変わる (主、意)」、sora- 「問う、尋ねる (意)」、nihəya-la- 「終わり-VBLZ- (主)」、yoqol- 「消える (主)」、aylan- 「なる (主、意)」、organ- 「慣れる、習熟する (主)」、kučsizlan- 「無力になる、弱くなる (主)」、arala- 「参加する (意)」、qara- 「向かう (移、主、意)」、silkin- 「振られる、揺れる (主、意)」、kor- 「見る」、bil-dir- 「知る-CAUS-」、piš- 「定まる (主)」、xiralaš- 「暗くなる (主)」、ket- 「行く (移、主、意)」

表 3-2: qol- 副動詞語幹分類データ

		移動	主体変化	客体変化	意志
のべ	37	3 / 8.1%	18 / 48.6%	11 / 29.7%	21 / 56.8%
ことなり	23	3 / 13.0%	15 / 65.2%	2 / 8.7%	11 / 47.8%

表 4-1: qoy- の副動詞語幹と分類結果

toxtat- (2) 「止める、中止する」、ol- (2) 「取る、得る、持つ」、böyla- (2) 「結ぶ、縛る、つなぐ」、qama- (2) 「囲む、閉じ込める」、ta?qiqla- 「述べる」、belgila- 「規定する」、tayyorla- 「用意する」、tiz- 「列に並べる」、yiyiştir- 「集める」、yöz- 「書く」、oçir- 「消す」、yöp- 「閉じる」、toxtat-il- 「止める-CAUS-」、pörtlat- 「爆発させる」、tašla- 「投げる」、ol-ib kel- 「持ってくる」、uyaltir- 「恥をかかせる」

表 4-2: qoy- 副動詞語幹分類データ

		移動	主体変化	客体変化	意志
のべ	21	0 / 0%	0 / 0%	17 / 77.3%	21 / 100%
ことなり	17	0 / 0%	0 / 0%	13 / 72.2%	17 / 100%

2.2.2. 考察

用例検索では ket-, qol-, qoy- の3者がどのような動詞と共起するかが明らかになった。以下 ket-, qol-, qoy- の順に箇条書きで述べ、例文を挙げる。なお例文の出典はすべて「BBCuzbek.com」からである。

ket- の場合

- ol- (取る、持つ、得る)、čiq- (出る) と共起しやすい。

(4) keyin u los+anzelec-dagi kaliforniya universitet-i
次に 彼 ロサンゼルス-ADJLZ カリフォルニア 大学-3.SG.POSS
kasalxonasi-ga ol-ib ket-il-gan-ø, …
病院-3.SG.POSS-DIR 連れる-CVB.PF ket-PASS-PTCP-3.SG

「次に彼はロサンゼルスのカリフォルニア大学病院に連れて行かれた、…」

- 副動詞語幹は、主体変化動詞が多い傾向にある。

(5) ukraina-lik etakči arxiw mutaxassis-i wladimir wiatrowič
ウクライナ-人 リーダー 公文書 専門家-3.SG. POSS PRO
hužjat-lar taxlam-i ora-si-dan saryay-ib ket-gan
記録-PL 積み重ね-3.PL.POSS 中-3.SG.POSS-ABL 黄色くなる-CVB.PF ket-PTCP
žild-ni ol-a-di
本の巻-ACC 取る-CVB.IPF-3.SG

「ウクライナ人リーダー公文書専門家・バラディミル ビアタビチは記録の積み重ねの中から黄色くなった本の巻を取る。」

qol- の場合

- saqla (n) - (維持する、守る)、toxtat- (止める)、bol- (なる) と共起しやすい。

(6) bladimir oz yalaba-si ort-i-dan WBO, IBF, IBO
PRO REFL 勝利-3.SG.POSS 後ろ-3.SG.POSS-ABL (ボクシング関連団体)
yonal-iš-lar-i boy-i-ča mawqei-ni saqla-b
出発する-GER-PL-3.SG.POSS 金持ち-3.SG.POSS-DIM 地位-ACC 維持する-CVB.PF
qol-gan-ø.
qol-PTCP-3.SG

「ブラジミルが自身の勝利の後に WBO、IBF、IBO から離れたことが金持ちの地位を維持していた。」

- 主体変化動詞と比較的共起しやすい。

(7) sanʔatkər-ning 1982yilnašr et-il-gan triller albəm-i
 芸術家-GEN 1982年 出版する-PASS-PTCP スリラー アルバム-3.SG.POSS
 insonyat pəp madaniyat-i tarix-i-da eng kop
 人類 ポップ 文化-3.SG.POSS 歴史-3.SG.POSS-LOC SUPER 多い
 sət-il-gan albəm **bol-ib** **qol**-məqda,
 売る-PASS-PTCP アルバム なる-CVB.PF qol-PTCP.PROG
 「芸術家の1982年に出したスリラーは、人類ポップ文化の歴史で最も多く売れたアルバムになっている、」

qoy- の場合

- 全て意志動詞、他動詞である。
- 客体変化動詞が多い。

(8) swet həkimiyat-i hamma respublika-lar-nibir+bir-i-ga iqtisod-iy
 ソビエト 統治-3.SG.POSS 全ての 共和国-PL-ACC 1+1-3.SG.POSS-DIR 経済-ADJLZ
 žihat-dan **bəyla-b** **qoy**-gan-ø.
 立場-ABL つなぐ-CVB.PF qoy-PTCP-3.SG
 「ソビエトの統治はすべての共和国を1つずつ経済の立場からつないでおいた。」

以上が、3者の特徴である。3者ともに副動詞語幹の語彙的な性質によって使い分けが生じていることが確認できる。なぜならば、補助動詞 ket-, qol-, qoy- の元々の意味 (本動詞としての意味。脚注3参照) が残っており、補助動詞として用いられた際に大きな影響を及ぼすと考えられるためである。具体的には以下のように考えられる。

ket- は、「行く、去る」という意味を持つため、移動動詞や変化動詞と共起する傾向にあり、qol- は「残る、～のままになる」という意味を持つため、変化動詞と共起しやすいと考えられる。

qoy- は「置く」という意味を持つため、日本語の「テオク」と同様に、他動詞、意志動詞と共起しやすいのではだろうか。実際に qoy- は意志性と他動性を強く求める性質があるということが確認された。

2.2. インタビュー調査

本節では、インフォーマントによるインタビュー調査によって補助動詞 ket-, qol-, qoy-の間にどのくらいの互換性があるのか、検証する。

インフォーマントは1名、男性 (1986年生、フェルガナ出身) である。今回収集した全例文 (106文) を紙媒体で渡し、ket-, qol-, qoy-がそれぞれ他の2つに置き換えられるかどうか尋ねた。

以下、表 5~表 7 に結果を示す。

表 5: ket- 副動詞語幹置き換え結果

		qol- 置換可能	qoy- 置換可能
ket- 副動詞語幹	52	18 / 34.6%	2 / 3.8%

表 6: qol- 副動詞語幹置き換え結果

		ket- 置換可能	qoy- 置換可能
qol- 副動詞語幹	37	9 / 24.3%	5 / 13.5%

表 7: qoy-副動詞語幹置き換え結果

		ket- 置換可能	qol- 置換可能
qoy- 副動詞語幹	21	2 / 8.7%	1 / 4.8%

以上より 3 者間の互換性について、以下のような指摘ができる。

- ◆ ket- と qol- の互換性は 2 割から 3 割程度
- ◆ qol- と qoy- の互換性は 1 割程度
- ◆ qoy- と ket- の互換性は 1 割以下

上掲の指摘から、3 者の間にそれほど互換性がないということがわかる。それは、先述したように 3 者それぞれの副動詞語幹の語彙的性質によって特徴付けられているためと考えられる。

3. おわりに

本稿では、ウズベク語の《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b)+ket-, qol-, qoy-》の用法を、BBC のウェブページからの用例収集とネイティブへのインタビュー調査によって考察した。

先行研究では、3 者とも「完了」の意を持つとされており、用法・使い分けが不明瞭であった。今回の調査によって、完了副動詞の語幹の語彙的性質によって、3 者が使い分けられていることが明らかになった。

さらに qoy- には、副動詞語幹が意志動詞かつ他動詞でなければならない、という強力な制約があることも確認した。

今回の調査は、新聞記事が元になっているため、表現が固く話し言葉が用いられていない、語彙に偏りが生じている、用例数が少ない等の問題点が挙げられる。

今回は調査対象を《完了副動詞 (動詞語幹- (i) b)+ket-, qol-, qoy-》のみに絞ったが、未完副動詞とその否定の場合も取り扱う必要もあるだろう。

略号一覧

+		複合語	PASS	passive	受身
-		接辞境界	PAST	past	過去
1, 2, 3		各 1, 2, 3 人称	PF	perfective	完了アスペクト
ABL	ablative	奪格	PL	plural	複数
ACC	accusative	対格	POSS	possessive	所有
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	PRO	proper name	固有名詞
CVB	converb	副動詞	PROG	progressive	進行アスペクト
DIM	diminutive	指小	PTCP	participle	形動詞
DIR	directional case	方向格	REFL	reflexive	再帰
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
GER	gerund	動名詞	SUPER	superlative	最上級
IPF	imperfective	不完了アスペクト	Q	question marker	疑問
LOC	locative	位格			

参考文献

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト: 現代日本語の時間の表現』 東京: ひつじ書房
- 庄垣内正弘 (1988) 「ウズベク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 (第 1 巻 世界言語編 上)』 829-833. 東京: 三省堂
- 伊達秀 (2008) 『ウズベク語初級—ウズベキスタンへの招待』 愛知: ブイツーソリューション
- Ismatulla, Khayrulla (1995) *MODERN LITERARY UZBEK I*. Uralic and Altaic Series, Vol. 161, Indiana University, Bloomington.
- Krippes, Karl A (1996) *Uzbek-English dictionary*. Kensington/ Maryland: Dunwoody Press.
- Raun, Alo (1969) *Basic Course in Uzbek*. Uralic and Altaic Series, Vol. 59, Indiana University, Bloomington.
- Sjoberg, F. Andrée (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Indiana University, Bloomington.
- Waterson, Natalie (1980) *Uzbek-English dictionary*. Oxford/ New York: Oxford University Press.

参考ウェブサイト

「BBCuzbek.com」 <http://www.bbc.co.uk/uzbek/> (2009/07/18)

秋田方言における「(ニ) ガッテ」の用法と若年層における新方言

堀川 知之

(東アジア課程 中国語専攻)

キーワード：秋田方言、受身、助詞、「ニガッテ」、「サガッテ」

0. はじめに

本稿の目的は、第一に秋田方言における「(ニ) ガッテ」の用法を明らかにすることである。従来の研究では「(ニ) ガッテ」は受身の動作主を表す助詞であり、多くは被動者にとって不利益な場合に使われるということである。しかし、実際にはこの条件に該当しない例が決して少なくはないように思う。そこで本稿では、一般的ではないとされている用法が、どの程度許容されているのかということアンケート調査により明らかにする。第二の目的は、卒業論文の受身の動作主を表す助詞の使い分けの調査時に、10代のインフォーマントから聞くことができた「(ニ) ガッテ」の「ニ」が「サ」に入れ替わったと思われる「サガッテ」という助詞の調査である。なお、例文番号は筆者¹による。

1. 先行研究

1.1. 日高 (2000)

以下、日高 (2000) の要約である (脚注、下線は筆者による)。

「レル・ラレル」による受身では、(1) の直接受身²、(2) の持ち主の受身の場合は「ニガッテ」を用いるのが普通である。

(1) タローダバ ジロー ニガッテ タダガレダ (タダガエダ)³
「太郎は次郎に叩かれた」

(2) タローダバ スリ ニガッテ カバン トラレダ (トラエダ)
「太郎はスリに鞆を取られた」

ただし、「レル・ラレル」による受身の場合であっても、以下のように当該行為が恩恵的なものであれば「カラ」を用いる傾向が強い。

(3) タローダバ ジロー ガラ アンブネドゴ シケラレダ
「太郎は次郎に危ないところを助けられた」

(日高 2000: 102 を要約)

¹ 筆者は秋田県秋田市の出身であり、秋田方言を母語とする。

² まどもの受身という言い方もあるが、本稿では直接受身に統一する。

³ 秋田方言では、「レル・ラレル」の [r] が脱落し、「エ」となることが多い (日高 2000: 102)。

1.2. 北条 (1975)

北条 (1975) は、秋田方言の受身の動作主を表す助詞「ニガッテ」について以下のように述べている (例文の下線、標準語訳は筆者による)。

「雨に打たれる」の「ニ」は、北奥羽全般で「ニガテ」「ニカテ」「ガテ」などで表される。原形はニカッテである。この原形が使用されている地域の例を以下に挙げる。

- (4) コドモ エ (ニ) カガッテ ネムラレネア
「子供のせいで眠れない」

イヌ ガテ カジラエル (犬にかじられる)、ワラシ ガテ カギ トラエル (子供に柿を取られる)、アメ エカガテ イガエネ (雨のために行けない) など、多く被動者にとって不利益な場合に使われる。

(北条 1975: 191 を要約)

北条 (1975) の用例を見る限り、「ニガテ」(ニカッテ) には「～で」(原因)、「～のせいで」といった意味があり、必ずしも受身の動作主を表す助詞として使われているわけではないことがわかる。

1.3. 国立国語研究所編 (2006)

以下の例文は、国立国語研究所編 (2006) で見られたものである。

- (5) オメア ニガッテ ユアエダ (あなたに言われた)

(国立国語研究所編 2006: 185)

自然的受身形として受け取られやすい「言われる」に「ニガッテ」が使われている例文である。これは必ずしも被動者が不利益を受けているとは言えない例である。

1.4. 先行研究のまとめと問題提起

「ニガッテ」に関する記述は少ないが、従来の先行研究で言われてきた「ニガッテ」の一般的な用法は、受身の動作主を表す助詞であり、多く被動者にとって不利益な場合に使われるという2点である。しかし筆者の内省では、この条件に該当しない例というものも決して少なくないように思われる。本稿では、一般的ではないとされている「ニガッテ」の用法が、実際にはどのぐらい許容されているのかをアンケート調査により明らかにする。

2. 「ニガッテ」の用法に関する調査

2.1. 調査方法

秋田県内の30代～60代の男女にアンケート用紙を配布して記入してもらった形式をとった。「ニガッテ」の一般的な用法に該当しない例文(I)～(VI)について、問題なく使えると思う場合は○、使えなくはないが多少違和感があると思う場合は△、明らかにおかしいまたは間違っていると思う場合は×を書いてもらった。下記の例文を用いた理由として、まずこの調査をするきっかけとなったのが、(III)と(IV)の能動文である。これは以前筆者の家族が、実際に使った文である。しかし、一般的に使用されているのかどうかわからなかったため、調べる必要があった。次に、(III)と(IV)を除く例文だが、これらは、被動者にとって不利益な場合に使われるという条件(従来の先行研究における「ニガッテ」の一般的な使用条件の一つ)に該当しないものである(但し、(I)は両方の解釈ができる)。これらの文で高い許容度があるという結果になれば、「ニガッテ」は必ずしも被動者にとって不利益な場合に使われるとは限らないことが立証される。アンケートに使った例文は以下の通りである。調査時期は2009年10月で、秋田県秋田市にて調査を行った。

- (I) キシャノ オド ニガッテ メ サマシタ ()
「汽車の音で目を覚ました」
- (II) オメ ニガッテ ホントウ セワニナッタ ()
「あなたには本当にお世話になりました」
- (III) オメ ニガッテ ホントウ マイッテシマウ ()
「あなたには本当に参ってしまう」
- (IV) ユギ ニガッテ ソド アルガエネ ()
「雪のため(雪が多くて)外を歩けない」
- (V) ゲンジモノガタリ ハ ムラサキシキブ ニガッテ カガレダ ()
「源氏物語は紫式部によって書かれた」
- (VI) ヤマノ テッペン ユギ ニガッテ オオワレデダ ()
「山頂は雪で覆われている」

2.2. 調査結果

アンケートを回収できたのは32名で(男:16名、女:16名)、すべて言語形成期を秋田県内で過ごした人である。年齢層は30代(男:3、女:6)、40代(男:2、女:2)、50代(男:8、女:6)、60代(男:3、女:2)である。秋田市(中央方言)のインフォーマントを中心に調査を行ったため、出身地による比較はできなかった。下記の表は北部方言(3名)と南部方言(3名)のインフォーマントの調査結果もまとめて集計したものである。

表 1: 例文 I ~VIの調査結果

		○		△		×	
		男	女	男	女	男	女
I	30代 (男:3、女:6)	2	5	1	1	0	0
	40代 (男:2、女:2)	1	2	1	0	0	0
	50代 (男:8、女:6)	4	4	3	2	1	0
	60代 (男:3、女:2)	2	1	1	1	0	0
全体の割合 (%) (小数点第三以下切り捨て)		56	75	37	25	6	0

		○		△		×	
		男	女	男	女	男	女
II	30代 (男:3、女:6)	1	2	2	4	0	0
	40代 (男:2、女:2)	0	0	2	1	0	1
	50代 (男:8、女:6)	3	2	2	2	3	2
	60代 (男:3、女:2)	1	0	1	1	1	1
全体の割合 (%) (小数点第三以下切り捨て)		31	25	43	50	25	25

		○		△		×	
		男	女	男	女	男	女
III	30代 (男:3、女:6)	3	4	0	2	0	0
	40代 (男:2、女:2)	2	0	0	2	0	0
	50代 (男:8、女:6)	4	3	4	2	0	1
	60代 (男:3、女:2)	3	1	0	1	0	0
全体の割合 (%) (小数点第三以下切り捨て)		75	50	25	43	0	6

		○		△		×	
		男	女	男	女	男	女
IV	30代 (男:3、女:6)	3	5	0	1	0	0
	40代 (男:2、女:2)	2	2	0	0	0	0
	50代 (男:8、女:6)	5	3	3	3	0	0
	60代 (男:3、女:2)	3	1	0	1	0	0
全体の割合 (%) (小数点第三以下切り捨て)		81	68	18	31	0	0

		○		△		×	
		男	女	男	女	男	女
V	30代 (男:3、女:6)	1	2	2	4	0	0
	40代 (男:2、女:2)	0	0	1	0	1	2
	50代 (男:8、女:6)	2	2	1	3	5	1
	60代 (男:3、女:2)	1	1	1	1	1	0
全体の割合 (%) (小数点第三以下切り捨て)		25	31	31	50	43	18

		○		△		×	
		男	女	男	女	男	女
VI	30代 (男:3、女:6)	2	3	1	3	0	0
	40代 (男:2、女:2)	2	0	0	1	0	1
	50代 (男:8、女:6)	4	2	1	3	3	1
	60代 (男:3、女:2)	1	1	2	1	0	0
全体の割合 (%) (小数点第三以下切り捨て)		56	37	25	50	18	12

2.3. 考察

(I) ~ (VI) の例文で許容度が男女とも半数に満たなかったものは (II) と (V) である (網掛けの数値を参照)。(II) は当該行為が恩恵的な能動文で、(V) は直接受身で働きかけは「創造⁴」に属するものである。次に (III)、(IV) は被動者が不利益を受けている能動文であるが、男女とも許容度がかなり高かった (太字の数値を参照)。例文 (I) は動作主が無情物で、(VI) は動作主、被動者ともに無情物の「非情の受身文」と呼ばれているものである。(I) は (III)、(IV) と同じぐらい (女性では一番) 許容度が高かった (囲み線の数値を参照)。被動者が不利益を受けているかどうかの判断が難しいが、回答結果から多くの人が、不利益を受けていると読み取ったのではないだろうか。一方 (VI) は動作主だけでなく、被動者も無情物であり、調査結果が最も予想しにくかったものである。結果は男性で半数以上の人が使えたと答え、女性は△が多かったものの、○の数も少なくはなかった (下線の数値を参照)。秋田県は土地柄雪が多く、冬になると様々な面で負の影響を及ぼすが、そこから雪が降るということをあまり好ましくないと考えた人が多かったのではないかと考えられる。「非情の受身文」に関しては、例文を増やし引き続き調べる必要がある。

⁴寺村 (1982) は、「主体の客体に対する「働きかけ」の仕方に、少なくとも三つの型があることが認められ、その型の違いが、全体を受身文に転じたときに、発動者、つまり能動文における仕手のとる助詞の違いに反映している」と述べている。働きかけの創造に属する動詞には「作る」や「建てる」などがあり、共通語では動作主のとる助詞は「によって」である。

3. 「サガッテ」に関する調査

卒業論文で行った受身の動作主を表す助詞の使い分けの調査時に、10代のインフォーマントで、「イヌ ニガッテ カマレダ」(犬に噛まれた)という文を「イヌ サガッテ カマレダ」のように「サガッテ」という助詞を使うという人がいた。佐藤・日高(1999)は、「東北地方では、助詞「サ」が助詞「ニ」の領域へと用法を広げており、こうした変化は若年層においていっそう顕著である」と述べているが、「サガッテ」というのも「ニガッテ」の「ニ」が「サ」に入れ替わった形であると思われる。本節では若年層を対象に「サガッテ」の認知度とその用法についてアンケート調査を行う。

3.1. 調査方法

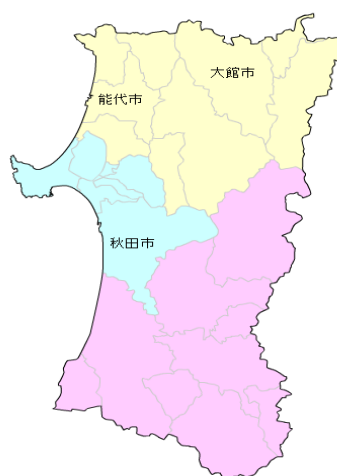


図1: 秋田県の方言区画と調査地点

インフォーマントは秋田県秋田市の明桜高校の男女15名(男10名、女5名)と秋田県能代市の二ツ井高校の男女20名(男5名、女15名)で、言語形成期を秋田県内で過ごした人を対象とした。調査は2009年10月に行った。佐藤(2000)によれば、秋田市は中央方言に属し、能代市は北部方言に属する。調査地点としてこの2箇所を選んだ理由として、まず秋田市は筆者の出身地であるのだが、これまでに「サガッテ」という助詞は聞いたことがなく、確認をする上で選んだ。次に能代市だが、これは本調査をするきっかけとなった10代のインフォーマントというのが、大館市(北部方言)の出身者であったため、大館市に比較的近い能代市を選んだ。アンケートは、助詞「ニガッテ」と「サガッテ」をそれぞれ知っているかまたは使うかという問いに対して、「はい」または「いいえ」で答えてもらい、「はい」と答えた人にも、それぞれの助詞を用いて例文を書いてもらった。アンケートに「ニガッテ」(「サガッテ」)を用いた例文は一切載せず、直接、助詞「ニガッテ」(「サガッテ」)を知っているかまたは使うかと聞いた。例文があることで、よくわからないのに、知っているまたは使うと答える人が増えるのではないかと感じたためである。本調査は「サガッテ」を知っている人がいるかどうかを調べるのが目的であるが、「ニガッテ」との関連性を調べるために、「ニガッテ」についても聞くことにした。

3.2. 調査結果

調査結果は以下の通りである。なお標準語訳は筆者による。

表2: 若年層における「ニガッテ」と「サガッテ」の調査結果

	明桜高校 (男 10 名、女 5 名)	二ツ井高校 (男 5 名、女 15 名)
「ニガッテ」、「サガッテ」どちらも知らないまたは使わない	男：9 名 女：3 名	男：5 名 女：14 名
「ニガッテ」のみ知っているまたは使う	男：0 名 女：1 名	男：0 名 女：0 名
「サガッテ」のみ知っているまたは使う	男：0 名 女：0 名	男：0 名 女：0 名
「ニガッテ」、「サガッテ」どちらも知っているまたは使う	男：1 名 女：1 名	男：0 名 女：1 名

・「ニガッテ」のみ知っているまたは使うと答えた人による例文

- (6) センセイ ガッテ ゴシャガレダ (明桜：女、出身地：秋田市)
「先生に怒られた」

・「ニガッテ」、「サガッテ」どちらも知っているまたは使うと答えた人による例文

- (7) センセイ ニガッテ ゴシャガイダ (明桜：男、出身地：大館市)
「先生に怒られた」
- (8) センセイ サガッテ ゴシャガイデオウ
「先生に怒られてさ、……」
- (9) オヤ ニガッテ イワレタ (明桜：女、出身地：秋田市)
「親に言われた」
- (10) センセイ サガッテ ゴシャガレタ
「先生に怒られた」

二ツ井高校の女性は、「ニガッテ」、「サガッテ」ともに知っているとは回答したが、例文は未記入であった。

3.3. 考察

本調査をするきっかけとなったインフォーマントを含め、わずか4名ではあったが、若年層において確かに「サガッテ」は使われているようである。例文が少なく確かなことは

何も言えないが、これを見る限りでは、基本的には「ニガッテ」と同じ意味で用いられているようである。本調査をするうえで最も悩んだのが、どのようなアンケートを作成するかであった。本調査では、「サガッテ」のみならず「ニガッテ」も知らないという答えが大半であったが、仮に始めから、「センセイ サガッテ ゴシヤガレタ」という例文を出し、このような文で「サガッテ」を使うかと聞いていたら、結果は大きく異なっていたのかもしれない。

4. 今回の調査のまとめ

以下に今回の調査で明らかになったことをまとめる。

- 「ニガッテ」は能動文でも使われ、受身の動作主を表す助詞に限ったものではない。被動者が不利益を受けることが条件のようだが、場合によっては被動者が無情物の場合でも使われる。
- 秋田県内の若年層において「サガッテ」が使用されているということを確認できた。

5. まとめと今後の課題

卒業論文は、受身の動作主を表す助詞の使い分けを調べることを目的として書き始めたのだが、そこから調査範囲を広げ、「ニガッテ」の用法と「サガッテ」の調査を行った。結果的にこちらの調査で、これまで先行研究では全く述べられていない独自の調査結果を導き出すことができたので、本稿で取り上げることにした。受身の動作主を表す助詞の使い分けの調査は、紙幅の都合上本稿では扱わなかった。「サガッテ」の調査に関しては、今回は若年層のみの調査であったが、地域によってはもしかすると、もう少し上の世代でも使われている可能性がある。引き続き秋田県大館市を中心に、調査地点を増やすなどして見ていく必要がある。本調査は全てアンケートによる調査であったが、同じようなことを聞くにしても、どう聞くかによってインフォーマントの答えが大きく変わり、改めてアンケート調査の難しさを感じた。今後は対面調査でインフォーマントの会話を録音するなど、より確かなデータを集めていく必要があると考える。

参考文献

国立国語研究所編 (2006) 『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第2巻 岩手・秋田』東京：国書刊行会／佐藤稔 (2000) 「秋田のことば 概説」大橋純一・小林隆・佐藤稔・日高水穂『秋田のことば』2-31. 秋田：無明舎出版／佐藤稔・日高水穂 (1999) 「秋田県大潟村移住者の言語変容—本格的調査に向けての準備調査報告—」『秋田大学教育文化学部研究紀要人文科学・社会科学』第54集 9-17. /寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版／日高水穂 (2000) 「秋田方言の文法」大橋純一・小林隆・佐藤稔・日高水穂『秋田のことば』74-132. 秋田：無明舎出版／北条忠雄 (1975) 「北海道と東北北部の方言」上村幸雄・大石初太郎編『方言と標準語—日本語 方言学概説—』157-199. 東京：筑摩書房

高知方言のアスペクト—存在動詞を中心に—

本山 綾乃

(欧米第二課程 イタリア語専攻)

キーワード：高知方言，アスペクト，存在動詞，～ユウ／チュウ，～ヨル

0. はじめに

本稿の目的は、高知方言のアスペクト表現形式「ユウ形」「チュウ形」の使用実態を明らかにすることである。なかでも、高知方言に特徴的な存在動詞におけるアスペクト表現形式の対立を中心にその実態を明らかにしていく。

本稿における高知方言とは、高知県高知市で現在使われている方言を指すこととする。

また、本稿でいうアスペクトとは「出来事（運動）をひとまとまりのこととして点的にとらえるか、時間の流れに沿って線的にとらえるかといった文法的カテゴリーのこと」と定義する。

なお筆者は高知方言母語話者であり、以下例文番号は筆者による。

1. 先行研究

本稿では、西日本における存在動詞「ある」のヨル系形式・トル系形式の分布について考察した井上 (2001) の記述と、高知方言のアスペクト表現形式であるユウ形とチュウ形の対立と中和についての畠山 (2007) の記述をまとめる。

1.1. 井上 (2001)

井上 (2001) は、工藤・木部 (編) (2000) の諸方言アスペクト調査の結果と『方言文法全国地図』を用いて、「運動会有一些」という項目で現れたヨル系・トル系の分布を示している。

井上 (2001) の存在動詞「ある」とアスペクト形式との共起に関する記述は、次のようにまとめることができる。

- ・ <動作開始直前>は、存在型アスペクト形式では表しにくい。
- ・ <痕跡><経験記録>は、トル系で表す。
- ・ <動作継続><変化過程><反復習慣>は、ヨル系とトル系の併用がみられるが、ヨル系で表すのが一般的である。

1.2. 畠山 (2007)

高知方言では「ル形: ユウ形: チュウ形」によって順に、<完成相 (限界達成)>、<不完成相 (限界達成前)>、<パーフェクト相 (限界達成後)>が表現されるという。

例えば、共通語で「太郎が窓を開けている」と表す状況を高知方言では次のように言う。

(1a) 太郎が窓を開けユウ。<不完成相>(太郎が今まさに窓を開けているところである。)

(1b) 太郎が窓を開けチュウ。<パーフェクト相>(太郎が窓を開け、窓は今も開いている。)

[筆者作例]

畠山 (2007) によると、ユウ形とチュウ形にはそれぞれ次のような多義性が認められる。

ユウ形: 動作の継続、変化の進行、直前の外的兆候、多回的動作、反復・習慣

チュウ形: 変化結果の残存、動作の完了、事物の状態や特性

1.2.1. 「おる」のアスペクト対立

「おる」のル形・ユウ形・チュウ形について、畠山 (2007: 68-69) の記述をもとに表 1 にまとめる。

表 1: 「おる」のアスペクト対立

表現形式	アスペクト的意味	例文
おる	完成	(2a) あの子は、自分の部屋にしばらくおるぜえ。
おりユウ	不完成	(2b) あの子は、自分の部屋にしばらくおりユウぜえ。
おっチュウ	パーフェクト	(2c) どうもあの子、あの日、自分の部屋にしばらくおっチュウぜえ。

[畠山 (2007: 68-69) をもとに筆者が作成]

ル形とユウ形の違いは、発見の文脈で使えるか否かということである。ル形は、発見の文脈で使えるが、「存在の存続」を表す「おりユウ」という表現は、発見の文脈では使えない。ただし「まだ」という語を付けると正文となり、「発話時以前から継続して存在することに驚いた」という意味なら適格となる。

(3) いや¹、弘史が{おる/?おりユウ}!

(4) いや、弘史がまだおりユウ。

[畠山 (2007: 69)]

(2c) は、「あの子が部屋にいたという痕跡が発話時に残っている」ことを表現し、「痕跡の存在」というパーフェクトを意味している。存在動詞のチュウ形はパーフェクトしか意味しない。

[畠山 (2007: 68-69) を要約]

1.2.2. 「ある」のアスペクト対立

「ある」のル形・ユウ形・チュウ形の対立について、畠山 (2007: 69) の記述をもとに表

¹ 例文 (3)、(4) の「いや」は、高知方言では発見や驚きを表すのに用いる。

2にまとめる。

表2:「ある」のアスペクト対立

表現形式	アスペクト的意味	例文
ある	完成	(5a) なんぼかつらいことがあるろうねえ。
ありユウ	不完成	(5b) なんぼかつらいことがありユウろうねえ。
あっチュウ	パーフェクト	(5c) なんぼかつらいことがあっチュウろうねえ。

[畠山 (2007: 69) をもとに筆者が作成]

出来事名詞をとる「ある」は動的な事態を指すためユウ形とチュウ形の対立があるが、モノの存在を表す「ある」はチュウ形を持たない。

[畠山 (2007:69) を要約]

2. 予備調査

予備調査として、畠山 (2007) への問題提起をもとに存在動詞のアスペクト表現形式について、また井上 (2001) の考察を確かめるべく高知方言における「運動会がある」のヨル系・トル系の使用実態について、二度アンケート調査を行った。調査の結果、1.1. でまとめた井上 (2001) の考察をほぼ確認し、さらに以下のことが明らかになった。

- ・ 高知方言において、存在動詞とアスペクト表現形式は共起しうる
- ・ 「存在が継続している期間 (時間)」がル形・ユウ形の選択に影響を与える可能性がある
- ・ モノの存在を表す「ある」は、ユウ形・チュウ形を持たない
- ・ 動的な事態を表す「ある」は、チュウ形と共起する
- ・ ユウ形・チュウ形以外に、若い世代でヨル形の使用がみられる

3. 本調査

先行研究と2つの予備調査をふまえ、次のような仮説を立てた。

- (A) <動作開始の直前>は直前のどの段階を指すかがアスペクトの選択に影響を与える
- (B) 「存在が継続している期間 (時間)」がル形・ユウ形の選択に影響を与える
- (C) <非実現>をユウ形で表すことができる
- (D) 高知方言のヨル形は若い世代で使われる新方言である

これらの仮説と、先行研究の主張を検証するために本調査を行った。

3.1. 調査方法

先行研究や2つの予備調査をふまえてアンケート調査を行った。

アンケートの回答には許容度を尋ねる方法をとった。提示した表現について、ごく自然

に使う表現である場合は◎、普通使わないが使っても不自然ではない表現である場合は○、普通使わず使うと若干不自然な感じがする場合は△、普通使わず使うと明らかに不自然である場合は×を記入してもらった。

コンサルタントは高知市近郊に在住の 15~81 歳の男女 54 名 (男性 31 名/女性 23 名、以下カッコ内は順に男女の人数を表す) である。このうち、18 歳まで別の土地で過ごした人や回答方法が間違っていた 10 名の回答を無効とし、有効な回答票は 44 (24/20) あった。有効な回答者の年代ごとの内訳は、10 代 6 名 (0/6)、20 代 7 名 (4/3)、30 代 12 名 (10/2)、40 代 8 名 (4/4)、50 代 7 名 (4/3)、60 代 1 名 (0/1)、70 代 2 名 (1/1)、80 代 1 名 (1/0) である。アンケートを作成する上で着目した点などを表にまとめる。

表 3: 本調査の設問テーマとポイント

テーマ	設問	状況	ポイント	
開始直前	1-1.	二日前	開始直前がいつを指すかによって、アスペクトの使い分けがあるかどうか。「ある」にアスペクト形を用いるか。	
	1-2.	前夜		
	1-3.	当日朝		
「おる」のアスペクト	2-1.	蜂	動物と人間でアスペクトの使い分けに差があるかどうか。	
	2-2.	太郎		
	3-1.	短期・室戸	期間が短いか 長いかで	距離の遠近で 差があるか。
	3-2.	短期・韓国		
	4-1.	長期 (永住)・東京	用いる形式に 差があるかどうか。	永住か期間限定か で差があるか。
	4-2.	長期 (限定)・沖縄		
将然と 非実現	5-1. ²	飛行機滑走路 <将然>	実際に飛んでいない、助走の状態でもユウ形を使うかどうか。	
	6-1.	靴を履く<将然>		
	6-2.	靴を履く<非実現>	実際に動作が行われるか否かでアスペクトの使用に差があるかどうか。	
	7-1.	転ぶ<非実現>		
	7-2.	転ぶ<実現>		
ヨル形	8.	意志・未来の	ユウ形と区別してヨル形を使うかどうか。世代差に注目。	
	9.	継続		

3.2. 調査結果

結果を考察するにあたり、自由記述の回答としてアスペクトにかかわらない終助詞を記入してある回答は、終助詞を除いた部分のみを調査対象とする。

² 実際には用いたアンケートでも設問番号が 5-1. となっているが、5-2. があるわけではなく 5. の誤りであることをことわっておく。

3.2.1. <動作開始の直前>の段階によるアスペクトの使い分け

設問 1-1. 運動会が行われる二日前。「明後日運動会がある」

設問 1-2. 運動会が行われる前日の夜。「明日運動会がある」

設問 1-3. 運動会が行われる日の朝。「今日運動会がある」

動作開始の直前を、運動会の二日前・前夜・当日朝の三段階で調査したところ、「当日朝」でユウ形の許容度がわずかに高くなる。ただしル形が圧倒的に優勢であることから、<動作開始の直前>は存在型アスペクト形式では表しにくいということがわかる。その原因としては、コンサルタントが「ある」という状態動詞によって運動会が終了する時点を想起しづらく、ユウ形を使うことが不自然だと判断した可能性や、運動会当日朝になり運動会の開始から終了までがある程度具体的に想像できるようになったため当日朝のユウ形の許容度が高くなった可能性が考えられる。また、二日前・前夜から比べて当日朝でユウ形に◎と○をつけた4人のうち3人が60代以上であり、以前は<直前>をアスペクト形式を用いて表現していた可能性も考えられる。

3.2.2. 「おる」の継続アスペクトの使用実態

設問 3-1. 今、太郎が2泊3日の合宿に室戸に行っている。太郎の居場所を尋ねられ、次のように答える。「太郎は今室戸にいる」

設問 3-2. 今、花子は3日間韓国に研修旅行に行っている。花子の居場所を尋ねられ、次のように答える。「花子は今韓国にいる」

設問 4-1. 太郎は高校卒業後、東京で就職した。太郎の居場所を尋ねられ、次のように答える。「太郎は東京にいる」

設問 4-2. 花子は3年間限定の転勤で、沖縄に住んでいる。花子の居場所を尋ねられ、次のように答える。「花子は沖縄にいる」

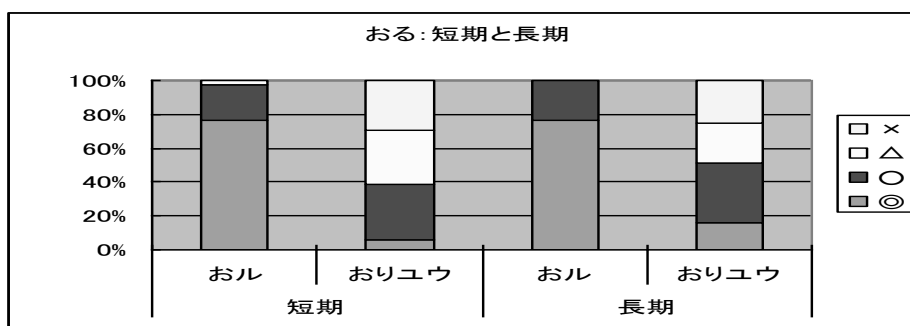


図 1: 設問 3-1.~4-2.

<非実現>を表すアスペクト形式の使用実態を調べた設問 6-1.の説明では、単なる「靴を履く」という<動作の進行過程>として捉えられている可能性が大いにある。そのため、この設問では<将然>という観点からユウ形の使用について十分に確認できたとはいえない。しかし、設問 6-2. など動作が実現していない場合にもユウ形が用いられることを確かめた。設問 6-1.~7-2.は条件設定を再考して調査を行なう必要がある。

3.2.4. ヨル形の使用実態と世代差

設問 8. 友人と買い物に行って、自分だけ二階を見に行くことにし、あとで合流するため電話してもらうとき。「二階を見ているからあとで電話して」

設問 9. 帰りが遅くなると父から連絡があった。先に食事をするということを伝えるとき。「先にご飯食べているからね」

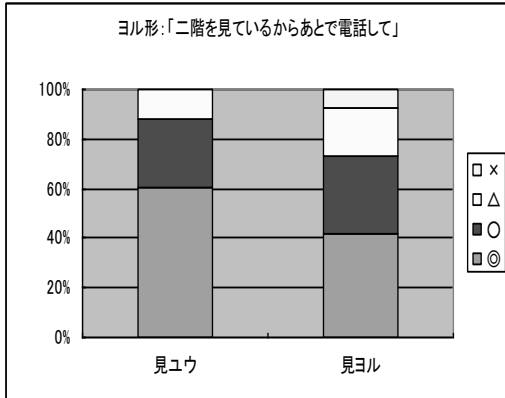


図 3: 設問 8.

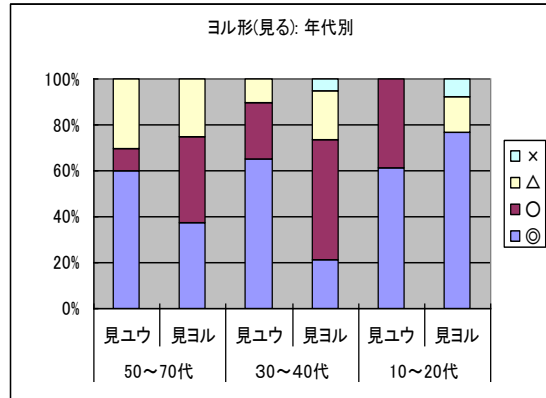


図 4: 設問 8. 年代別

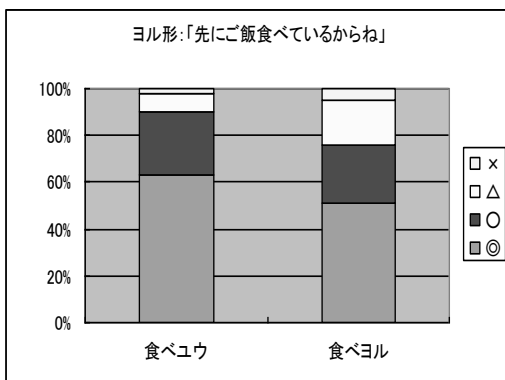


図 5: 設問 9.

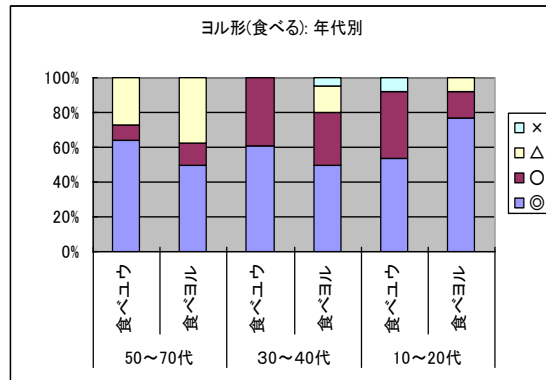


図 6: 設問 9. 年代別

設問 8.、9.ともにユウ形の許容度がヨル形よりも高いものの、ヨル形に◎・○をつけた回答も全体の70%を超えている。◎をつけた割合を年代別にみると、10~20代ではユウ形よりも高いが、30~40代と50代以上ではユウ形よりも低い。このように、若い世代に顕著に

見られるヨル形の使用は、他の世代の話者においても使用が確認できた。また、ヨル形のアスペクト的意味は内省から述べると「意志・未来における動作の継続」を表しているように思われるが、今後はヨル形とユウ形との意味の棲み分けがあるかなどについての調査も必要だ。

4. まとめと今後の課題

今回の調査で、以下のようなことが明らかになった。

- (A') <動作開始の直前>は直前が「物事の終了を想定しうる」直前ではユウ形が使われることもあるが、基本的に<動作開始の直前>は存在型のアスペクト形式では表しにくい。
- (B') 「存在が存続している時間」がル形・ユウ形の選択に関わるということは、複数の話者から確認できたが、さらに人数を増やして調査する必要がある。
- (C') <非実現>をユウ形で表すことは可能だが工藤 (2000) が述べたようにそのアスペクト的意味は弱い。
- (D') 高知方言のヨル形は決して新しい方言とは言えないが、若い世代ではユウ形よりも自然に使うと答えた話者が多く、関西圏の影響なども考えられる。ただしヨル形のアスペクト的意味についてはこれから調査しなければならない。

調査の問題点としては、調査方法がアンケートのみによることやコンサルタントの年代・男女のバランスがよくないことがあげられる。今後は、上で述べたような課題を解決するためにも幅広い世代から多くのデータを得る必要があるだろう。

参考文献

- 井上文子 (2001) 「運動会が「アリヨル」「アットル」について」工藤真由美 (編) 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』, 51-59, 科学研究費補助金成果報告書
- 井上文子・沖裕子・木部暢子 (2002) 「テンス・アスペクト」大西拓一郎 (編) 『方言文法調査ガイドブック』, 65-83, 科学研究費補助金成果報告書
- 工藤真由美 (1986) 「アスペクトについてのおぼえがき」『国文学解釈と鑑賞』51-1: 39-48, 至文堂
- _____ (2000) 「アスペクト表現の地域差—西日本諸方言を中心に—」『国文学解釈と鑑賞』65-1: 34-44, 至文堂
- 工藤真由美・木部暢子 (編) (2000) 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』科学研究費補助金成果報告書
- 島山真一 (2007) 「高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類」『日本語科学』21: 65-88, 国立国語研究所
- 吉田則夫 (1982) 「高知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』, 425-450, 国書刊行会

思言 東京外国語大学記述言語学論集 **第6号**

2010年10月1日発行

編集・発行： 東京外国語大学 記述言語学研究室（風間伸次郎）
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
mail: kazamas@tufs.ac.jp

Edited and Published by Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies
Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,
183-8534, JAPAN

SHIGEN

vol. 6

Articles

- A contrastive study on the predicative use of the onomatopoeia in Japanese and Chinese: a pilot survey based on dictionary entries HUANG Hui (3)
- The correlation between modals in the quotative clause and the predicate or modified noun in the main clause in Japanese SATO Yusuke (25)

Abstracts of the Graduation Papers

- A comparative study on conditional constructions in the Miyagi, Akita, and Aomori dialects of Japanese UTSUMI Yu (55)
- The function of the head of Colloquial Burmese compound nouns that denote an action or an event ONISHI Hideyuki (63)
- The phonetic characteristics of temporary onomatopoeia in comics: with a special focus on English KOBIYAMA Shiori (71)
- The particles *-kou* and *-Ø* in Modern Colloquial Burmese: with a special focus on *-Ø* attached to human object GOTO Shuntaro (79)
- The form *-dianr* in Chinese and words that cooccur with it SAKAYAMA Yuki (87)
- A descriptive study on sentence-final particles in the Owari dialect of Japanese: with a special focus on *Ndatte* TAKAMI Azusa (95)
- The Japanese particles *ni* and *e* that occur immediately before the motion verb *iku*: a survey based on the literary works in the 1940's and 1950's TAGO Yurie (103)
- A study on the plural marker *-tul* in Korean CHAE Heekyung (111)
- The gender and generational differences in the use of emphatic expressions in Kumamoto City, Japan TOYODA Yoko (119)
- The Uzbek auxiliary verb constructions «perfective converb (verb stem -(i)b) + ket-, q 1-, qoy-» HIDAKA Shinsuke (127)
- The use of *nigatte* in the Akita dialect of Japanese and New Dialect among young people HORIKAWA Tomoyuki (135)
- The aspect of the Kochi dialect of Japanese: with a special focus on the verbs *aru* and *oru* MOTOYAMA Ayano (143)

2010

Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies / Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies